児玉町文化財調査報告書　第３集

阿　知　越　遺　跡　Ⅰ

児玉遺跡群保存事業に伴う発掘調査報告書１

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

児玉町文化財調査報告書　第３集

阿知越遺跡 Ⅰ

あ　ち　ご え

児玉遺跡群保存事業に伴う発掘調査報告書１

１９８３
埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

序

悠久の昔、わが町児玉を舞台にくり広げられた歴史の数々は、脈々と生き続けた祖先の生活と努力の結晶であります。歴史の古い児玉町には、これらの歴史を裏付ける貴重な文化財が数多く残されており、わが町が全国に誇るべきもののひとつといえましょう。これらの文化財を永く後世に継承することは、我々に課せられた使命と考え、日夜その保護と活用に努めてまいりました。このたびもその保存措置につきまして、関係機関や施工者等と再三の協議を重ね、現状で保存できるよう要望してまいりました。しかし現状での保存は難かしいとのこと、やむおえず万全の調査をもって記録という形で後世に伝えることになったものです。

このように、本報告書が無事刊行できましたことは、調査関係者各位はもとより国・県・町当局さらに住民の皆様の深い御理解と御協力の賜と存じ、心より感謝申し上げる次第でございます。

このささやかな報告書が、広く町民の皆様や、教育・研究にたずさわる皆様の御参考になれば幸甚に存じます。

昭和58年３月10日

児玉町教育委員会教育長

石　井　栄　一

例言

1．本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字入浅見字阿知越に所在する阿知越遺跡Ａ地点の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、個人住宅建設に先立つ児玉遺跡群保存事業とし昭和55年度に児玉町教育委員会が実施したものである。

3．発掘調査および整理・報告書作成に要した経費は、町費・国庫補助金（文化庁）・および県費補助金(埼玉県教育委員会)で、ある。

4．本書の遺構平面図は60分の１を基本とし方位はすべて座標北である。断面図に示した数字は標高（ｍ）である。また土器挿図の縮尺は４分の１、その他の遺物は３分の１とした。

5．本書の編集は、整理参加者の協力をえて鈴木徳雄が行ない、各執筆分担については各文末に記した。

6．発掘調査および本書作成にあたって下記の方々や機関から御助言・御協力を賜った。記して感謝の意を表わしたい。(順不同、敬称略)

赤熊浩一、儀崎　一、岡本幸男、笠原信男、駒宮史朗、坂本和俊、笹森健一、菅谷浩之、利根川章彦、中村倉司、西口正純、長谷川勇、飛田正美、樋口誠司、山口逸弘、埼玉県教育局文化財保護課、美里村教育委員会、埼玉県埋蔵文化財調査事業団

7．本書作成の主な作業分担は次のとおりである。

土器接合・復元（林和代、雉岡泰子、田口照代）　土器拓本（林和代、雉岡泰子）　土器実測（市川淳子、干装智、矢内勲、雉岡恵一、石森英子、佐藤英美子、恋河内昭彦）土器トレース（田口照代、市川淳子）　金属および石製品実測（市川淳子、成田千鶴子）　遺構原図操作（篠崎潔、鳥羽政之、雉岡恵一、市川淳子、恋河内昭彦、田口照代）　遺構トレース（尾崎美砂、市川淳子、恋河内昭彦、田口照代）　本書レイアウト（市川淳子）　その他（城戸剛、徳山寿樹、大屋道則、松本英輔）

8．本書は、図版・挿図を中心に編集したもので、本文は別途刊行の予定である。

阿知越遺跡調査団組織

団　長　　根岸幸平　　児玉町長

副団長　故海北堅太郎　児玉町教育委員会教育長（当時）

調査担当　金子　章

事務局　　三上元一　　児玉町教育委員会社会教育主事

発掘調査参加者

内田タケ子、梅沢トモ子、大谷秋子、奥原美津子、倉林英夫、倉林久子、小林八重子、小林陽子、柴崎のり子、竹内初代、出牛光江、藤野林二、松村菊治、峰岸タカ子、山田松江　（地元有志）

岡部邦彦、雉岡恵一、篠崎潔、鈴木純、鳥羽政之、橋本雅夫
（学生有志）

凡　例

遺構内遺物

● 土器（土師器・須恵器）

▲ 鉄製品

△ 砥　石

■ 銅銙（巡方）

（遺物出土位置図における実線は同一個体であることのみを示し各破片の接合関係は、表現していない。）

遺物挿図

黒色処理

海綿状発泡

目　　次

序

第１章　発掘調査に至る経過……1

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境……3

第Ⅲ章　調査の経過 ……7

第Ⅳ章　遺跡の概要 ……8

第Ⅴ章　遺構と遺物 ……11

第１節　竪穴住居址……11

第２節　掘立柱建物遺構・ピット群・土坑・溝……76

第Ⅵ章　阿知越遺跡の提起する問題 ……84

写　真　図　版

挿　図　目　次

第１図　阿知越遺跡周辺の遺跡１（古墳時代）……2

第２図　阿知越遺跡周辺の遺跡２（奈良・平安時代）……4

第３図　阿知越遺跡および御林下遺跡の調査位置……6

第４図　阿知越遺跡Ａ地点全測図……9

第５図　第１号住居址およびカマド……12

第６図　第１号住居址出土遺物……13

第７図　第２号住居址出土須恵器大型広口壺破片拓影図……14

第８図　第２号住居址……15

第９図　第２号住居址断面図……16

第10図　第２号住居址掘り方面図……18

第11図　第２号住居址出土遺物分布図……19

第12図　第２号住居址カマド……20

第13図　第２号住居址出土遺物（１）……22

第14図　第２号住居址出土遺物（２）……23

第15図　第２号住居址出土遺物（３）……24

第16図　第２号住居址出土遺物（４）……25

第17図　第２号住居址出土遺物（５）……26

第18図　第２号住居址出土須恵器大型広口壺……27

第19図　第２号住居址出土鉄製品……27

第20図　第３ａ号住居址……28

第21図　第３ａ号住居址カマド……29

第22図　第３ｂ号住居址およびカマド……30

第23図　第３ａ・ｂ号住居址出土遺物……31

第24図　第３号住居址出土遺物……32

第25図　第４ａ・ｂ・ｃ号住居址……33

第26図　第４ａ・ｂ・ｃ号住居址カマド……35

第27図　第４ａ・ｂ・ｃ号住居址出土遺物……36

第28図　第５号住居址出土遺物……37

第29図　第５号住居址およびカマド……38

第30図　第６号住居址出土遺物分布図（遺物集中地区）……39

第31図　第６号住居址……40

第32図　第６号住居址断面図……41

第33図　第６号住居址出土遺物分布図……43

第34図　第６号住居址カマド……44

第35図　第６号住居址出土須恵器大型広口壺破片拓影図……45

第36図　第６号住居址出土遺物（１）……46

第37図　第６号住居址出土遺物（２）……47

第38図　第６号住居址出土遺物（３）……48

第39図　第６号住居址出土遺物（４）……49

第40図　第６号住居址出土遺物（５）……50

第41図　第６号住居址出土遺物（６）……51

第42図　第６号住居址出土遺物（７）……52

第43図　第６号住居址出土遺物（８）……52

第44図　第６号住居址出土須恵器大型広口壺（１）……53

第45図　第６号住居址出土須恵器大型広口壺（２）……54

第46図　第７号住居址出土須恵器大型広口壺破片拓影図……54

第47図　第７号住居址出土遺物……55

第48図　第７号住居址……56

第49図　第７号住居址カマド……57

第50図　第７号住居址出土砥石……58

第51図　第８号住居址出土遺物……58

第52図　第８号住居址およびカマド……59

第53図　第９号住居址……60

第54図　第９号住居址断面およびカマド……61

第55図　第９号住居址出土遺物（１）……63

第56図　第９号住居址出土遺物（２）……63

第57図　第９号住居址出土遺物（３）……64

第58図　第９号住居址出土遺物（４）……65

第59図　第10号住居址カマド……66

第60図　第10号住居址……67

第61図　第10号住居址出土遺物（１）……68

第62図　第10号住居址出土遺物（２）……68

第63図　第11ａ・ｂ・ｃ号住居址……69

第64図　第11ａ号住居址およびカマド……70

第65図　第11号住居址出土遺物……71

第66図　第12号住居址およびカマド……72

第67図　第12号住居址出土遺物……72

第68図　第12号住居址出土石製紡錘車……72

第69図　グリット区出土遺物……73

第70図　阿知越遺跡Ａ地点出土墨書集成（破片）……74

第71図　第１号住居址南表採砥石……75

第72図　阿知越遺跡Ａ地点出土銅製品……75

第73図　第１・２・３号掘立柱建物遺構（ＳＢ—１・２・３）……76

第74図　第４号掘立柱建物遺構（ＳＢ—４）……77

第75図　第５号掘立柱建物遺構（ＳＢ—５）……78

第76図　ピット群—１……79

第77図　ピット群—２（１）……80

第78図　ピット群—２（２）……81

第79図　第１号溝（ＳＤ—１）……81

第80図　第１～６号土坑（ＳＫ—１～６）……82

第81図　阿知越遺跡住居平面比較図……83

〈参考資料〉

第82図　阿知越遺跡Ｂ地点全測図……87

第83図　阿知越遺跡Ｂ地点出土遺物(1)……87

第84図　阿知越遺跡Ｂ地点出土遺物(2)……88

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表……5

第２表　発掘作業工程表……7

第３表　阿知越遺跡Ａ地点出土墨書土器一覧表……74

第４表　第１～６号土坑計測表……81

第５表　住居址別遺物出土量比較表(1)……84

第６表　住居址別遺物出土量比較表(2)……85

図 版 目 次

図版１　１．阿知越遺跡Ａ地点全景　（南西より）

図版２　１．阿知越遺跡Ａ地点遠景　（西より）

２．調査区中央部　（北西より）

図版３　１．調査区西半部　（南東より）

２．第２・６号住居址　（東より）

図版４　１．第１号住居址

２．第１号住居址カマド

図版５　１．第２号住居址

２．第２号住居址カマド

図版６　１．第２号住居址遺物出土状態（１）

２．第２号住居址遺物出土状態（２）

図版７　１．第３ａ号住居址

２．第３ｂ号住居址

図版８　１．第４ａ・ｂ号住居址

２．第４ａ号住居址カマド

図版９　１．第５号住居址

２．第５号住居址カマド

図版10　１．第６号住居址

２．第６号住居址カマド

図版11　１．第６号住居址カマド南側遺物集中地区(1)

２．第６号住居址カマド南側遺物集中地区(2)

図版12　１．第６号住居址遺物出土状態（１）

２．第６号住居址遺物出土状態（２）

３．第６号住居址遺物出土状態（３）

図版13　１．第７号住居址

２．第７号住居址カマド

図版14　１．第８号住居址

２．第８号住居址カマド

図版15　１．第９号住居址

２．第９号住居址カマド

図版16　１．第９号住居址遺物出土状態

２．第９号住居址鉄製品出土状態（１）

３．第９号住居址鉄製品出土状態（２）

図版17　１．第10号住居址

２．第10号住居址カマド

図版18　１．第10号住居址遺物出土状態（１）

２．第10号住居址遺物出土状態（２）

図版19　１．第11ａ・ｂ・ｃ号住居址

２．第11ａ号住居址カマド

図版20　１．第12号住居址

２．第12号住居址カマド

第Ⅰ章　発掘調査に至る経過

調査の原因

昭和55年１月上旬、埼玉県重要選定遺跡生野山古墳群の丘陵西側斜面（児玉町大字阿知越1,125の18.19番地内、約1,500m²）においてブルドーザーで整地をしているという通報が、県文化財パトロール員から町教育委員会にあった。ただちに担当職員が現地へ出向き確認したところ、当該区域の表土が50cmから１ｍあまりも斜面にそって削平されており、表面に土器片が多量に散乱し、数軒の住居跡が確認でき、一部ではすでに削平されている住居跡もあった。早速原因者を現地へ呼び埋蔵文化財の保護について説明し理解を求めるとともに、開発行為の目的につきて事情を聞いた。その内容は下記のとおりである。

①同区域およびその周辺は終戦後（第二次大戦後）開拓され、農地として10数年程前まで耕作されていたが、その後放置され荒れており３ｍ前後の篠が繁茂しており土地の境界さえわからなくなってきたため、とりあえず表土を剝いで境界をはっきりさせるため開発行為申請手続きを済ませず行なったものである。

②表土を剝ぎ境界をはっきりさせた後、測量を行ない、隣接地域の開発の状況をみて貸住宅を建設する計画である。

原因者の意向については、以上のとおりであった。

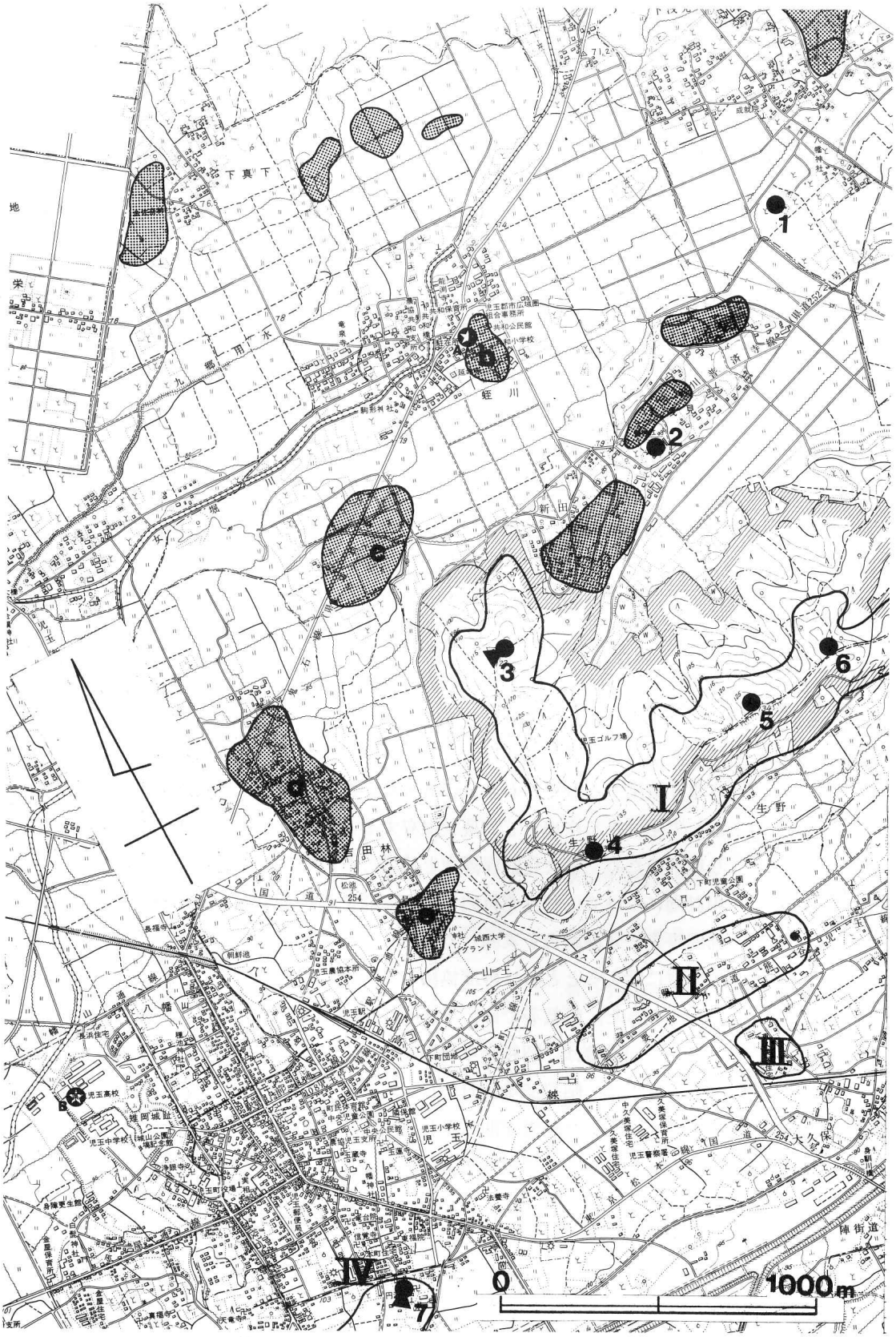
協　　議

しかし　現状は遺構が斜面上に露出しており、そのまま放置しておけば雨水等により流出するおそれが多分にあった。また、剝いだ表土は下の谷の部分に埋土として用いたため埋戻して現状保存することもできない条件にあった。このような現況のため、県文化財保護課と協議したところ、原因者に対して今後の土地利用計画について、利益を目的とした開発をしない条件であれば、昭和55年度国庫補助事業で発掘調査を実施しても差しつかえないという指導を受けた。この旨を原因者に伝えるとともに再度協議したところ、将来個人の自宅を建設したいということであった。町教委では、早速昭和55年度予算に計上し、実施するよう進めた。かくして同遺跡は、昭和55年度事業で発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、昭和55年10月17日付児教社第172で発掘調査通知が提出され、昭和56年１月10日より調査が開始された。担当者には金子章氏が当たった。

なお文化庁からは昭和56年３月５日付委保記２の3665をもって発掘調査に対する指示通知があった。

（事務局　三上元一）



第１図　阿知越遺跡周辺の遺跡１（古墳時代）

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境

遺跡の名称

本遺跡は、埼玉県児玉郡児玉町大字入浅見字阿知越に所在し、『埼玉県遺跡地図』の児玉町-No.39に相当するもので、その小字名から阿知越遺跡と呼称する。

地　　形

遺跡は、神流川扇状地である本庄台地上に存在する第三紀層の残丘である生野山の裾部近くの北西向き斜面にあたり、標高は約98mから102mを測る。この生野山丘陵下には、八王子-高崎構造線の断層崖下付近より流れでる金鑽川・赤根川水系に属する女堀川によって開析された沖積地が展開し、これらを中心に明瞭な条里形地割りの痕跡を認めることができる。また、遺跡の南側には生野山丘陵の支丘である山王山があり、その北側の湧水点を中心に藤池・松池という溜池がつくられている。生野山の南側にも立川面相当の台地が広がっており、丘陵下より思池湧水があるが、ローム面上に小山川（身馴川）の氾濫によってもたらされた礫層が被覆する氾濫原となり、条里形地割りの痕跡は認められていない。小山川は、この付近では伏水し水量は少なく、扇状地地形特有のあり方を示している。

遺跡周辺の基盤層は生野山礫層と呼ばれる第三紀層で、その上部に粘土層さらに大里ローム層が被覆し、表土は流出しているためか薄い堆積である。

歴史的環境

ここに報告する阿知越遺跡の所在する児玉郡児玉町は、埼玉県北部の旧武蔵国の北端近くにあり、古代の児玉郡に比定される地域である。『和名類聚抄』によると岡太郷、振太郷、黄太郷、太井郷の四郷が存在したことが知られる。本遺跡がこれらのうちどの郷に比定される区域であるのかは、諸説がありいずれも明解ではない。しかし、これらのある郷を構成する主要な集落のひとつに相当するものであろう。

旧児玉郡の領域は、金鑽川・赤根川水系（女堀川・九郷水系）を中心とする沖積地に展開し、旧賀美郡との境界を神流川扇状地扇央部中央に、那珂郡との境界を小山川（旧身馴川）にとる範囲と考えられる。また更に、東は利根川を境に一部上野国那波郡、西は神流川を挟んで上野国緑野郡に接しており、古墳時代より彼地との関連も深い。

旧郡内の式内社には明神大社という異例の格式を備えた金佐奈神社（金鑽神社、武蔵国二の宮）がある。また寺院跡には城土野廃寺があり、児玉町飯倉の「金草窯跡」と同笵の軒丸瓦が出土しいる（高橋他、1982）。この他10世紀代の創建と考えられる児玉町河内「寺山廃寺」も存在している。旧児玉郡内には更に承平三年（933年）に勅旨牧となった阿久原牧の存在が知られている。

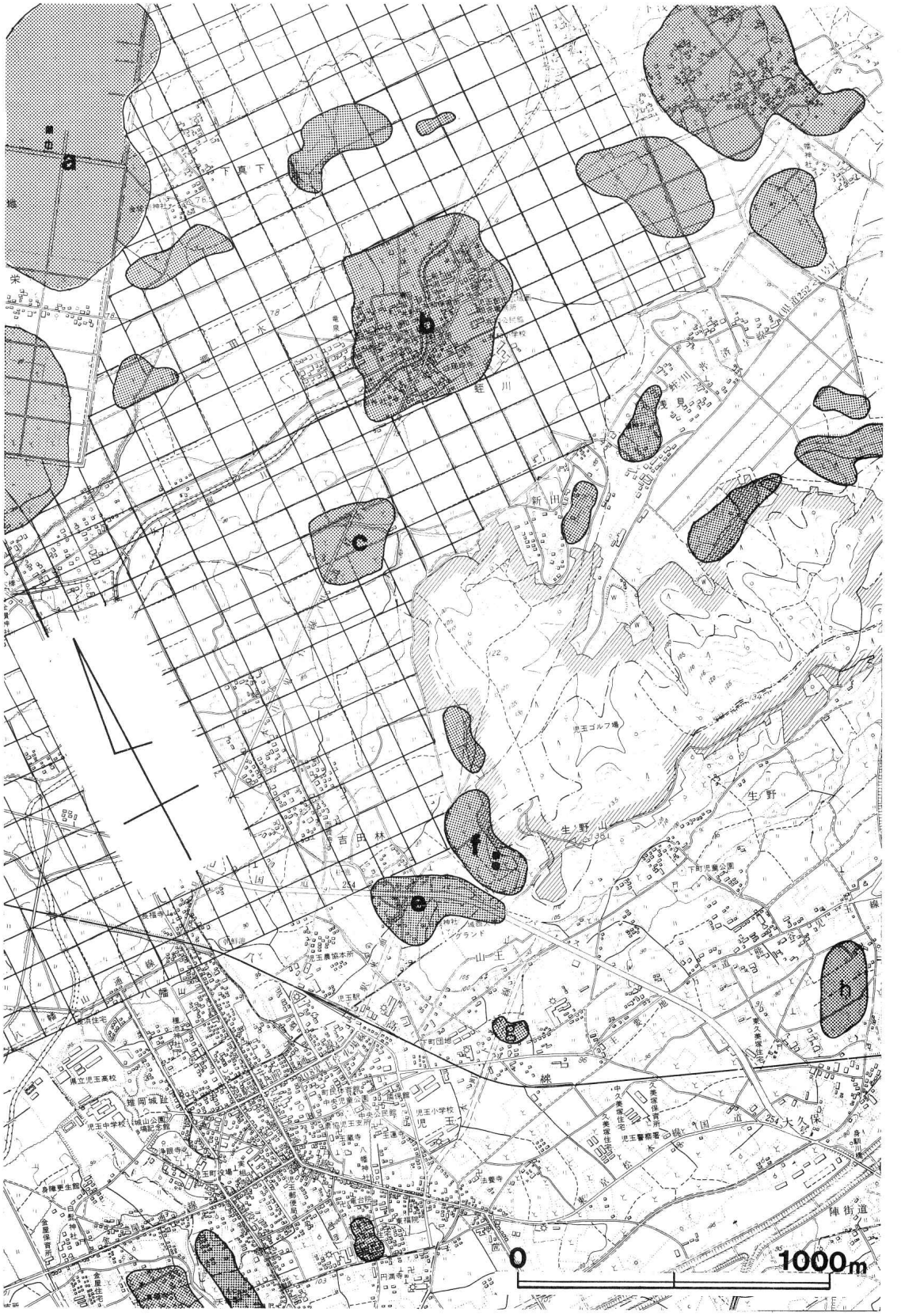
本遺跡の周辺には各時代の遺跡が存在しているが、古墳時代後

凡　例

古墳時代後期の集落

古　墳　群

✪　埴輪窯跡



第２図　阿知越遺跡周辺の遺跡２（奈良・平安時代）

期では本遺跡をのせる生野山丘陵上や、生野山南側の氾濫原にも古墳群が形成される（第１図)。これらの区域は、氾濫の危険や開墾の困難さとあいまって墓域として意識されていたためか、現在までのところ該期の集落跡は発見されていない。この時期の集落跡は、女堀川の自然堤防上に集中的に形成される傾向が認められることは注目される。

奈良 平安時代の遺跡

奈良・平安時代に入ると、従来の自然堤防上にも集落が占地するが、むしろ集落形成区域の中心は沖積地の周辺つまり生野山裾部の緩斜面や女堀川右岸の広い洪積地内に移り、必ずしも古墳時代後期の集落とは継続しないことは注目してよい。また、平安時代中頃から再び集落が拡散する傾向も認められるが、その内容は詳かでない。

本遺跡から約250m 西方には、1976年に埼玉県教育委員会が発掘調査を実施した御林下遺跡（駒宮、1977）がある。御林下遺跡は奈良・平安時代の集落跡で、住居跡５軒と掘立柱建物遺構、土坑、溝、ピット群等が検出されており、本遺跡と同時的に存在した遺跡と考えられ相互に有機的な関連が予想される。なおこの遺跡と本遺跡との間にはゆるい谷が入り、この二集落を明瞭に区分している。

また本遺跡から2.5km北方には、奈良・平安時代の住居址約150軒や掘立柱建物遺構が検出されている古井戸・将監塚遺跡（井上・高橋、1983）がある。

（鈴木徳雄）

凡　例

奈良・平安期の集落

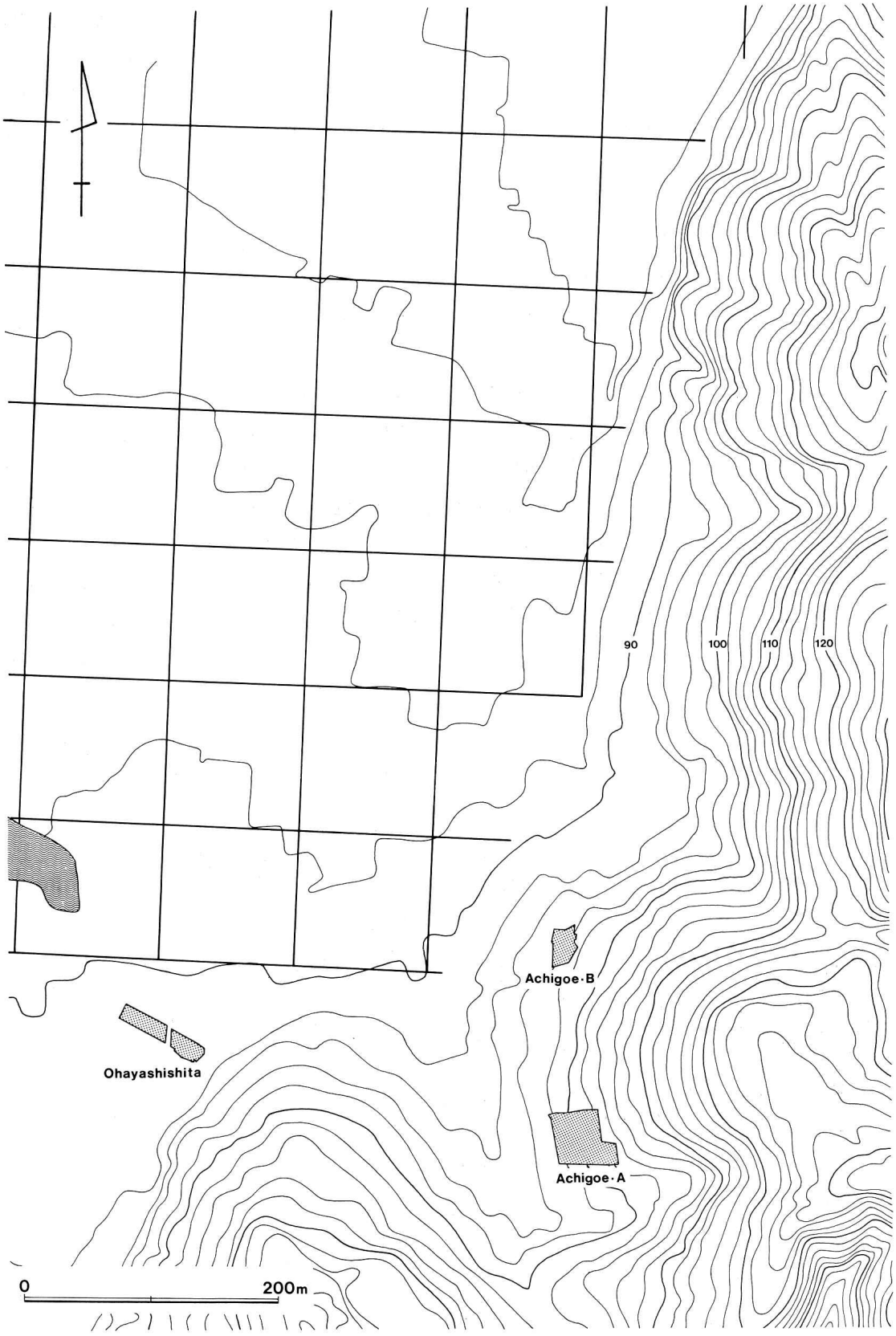
■　鈴帯（巡方）

●　鈴帯（丸鞆）

⊞　鈴帯（鉸具）

番号	遺跡名	文献	備考
Ⅰ	生野山古墳群	（菅谷・駒宮、1973）	同一か？
Ⅱ	児玉下町古墳群		同一か？
Ⅲ	大久保古墳群	（大　護他、1956）	同一か？
Ⅳ	長沖古墳群	（金　子他、1980）	同一か？
a	将監塚・古井戸遺跡	（井上・高橋、1983）	
b	共和小学校校庭遺跡		仮称
c	蛭川南遺跡		〃
d	吉田林遺跡		〃
e	御林下遺跡	（駒　宮、1978）	
f	阿知越遺跡	本報文	
1	鷺山古墳	（田　口他、1975）	
2	金鑽神社古墳	〃	
3	生野山銚子塚古墳	〃	
4	生野山三角点古墳	〃	
5	生野山将軍塚古墳	（柳　田、1964）	
6	生野山９号墳	（菅谷・駒宮、1973）	
7	長沖１３８号墳	（金　子他、1980）	
A	蛭川埴輪窯跡		仮称
B	八幡山埴輪窯跡	（柳　　、1961）	

第１表　周辺遺跡一覧表



第３図　阿知越遺跡および御林下遺跡の調査位置

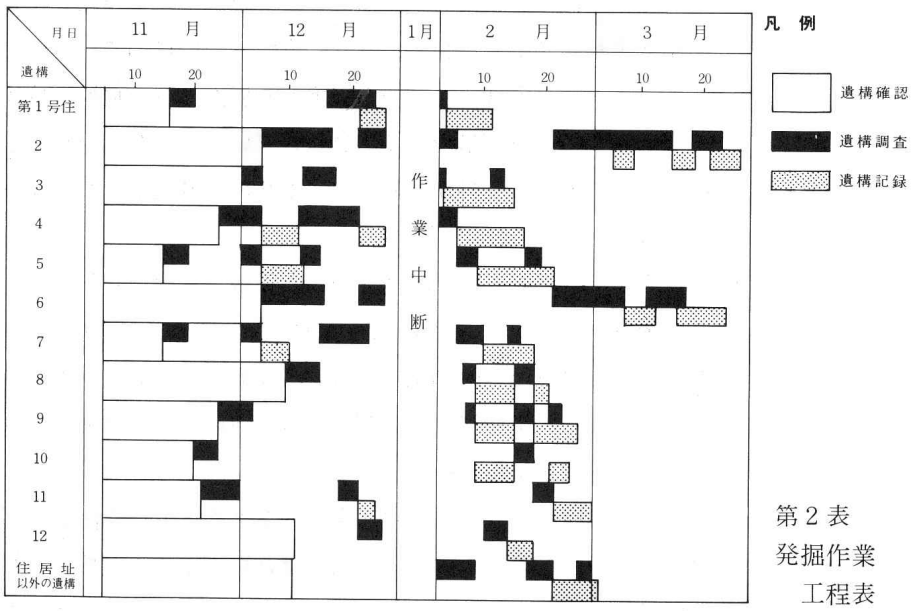
第Ⅲ章　調査の経過

調査前の状況　阿知越遺跡A地点の調査は、昭和55年11月5日より翌56年3月31日までの間、途中1ヶ月間余りの作業の休みをはさみ、約4ヶ月の期間に実施したものである。

調査対象区は、既に宅地造成工事により表土部分が除去され、遺構の確認面にまで達しており、部分的に遺構の一部が露出あるいは削平されてしまっていた状況であった。

調査の経過　発掘調査は、遺構の確認作業から着手し、削平の浅かった調査区内のほぼ全域で竪穴住居址、柱穴、土坑等が確認され、順次各遺構の掘り下げ作業と調査を進めた。調査も12月に入り、本遺跡の北100ｍに位置する阿知越遺跡B地点の調査をも開始し、併行して作業を進める事とした。日々の寒さも一層増し、しばらくは遠く上州の山々から吹き曝すからっ風の中の作業に耐えねばならなかった。年の明けた1月には、阿知越遺跡B地点の調査に作業の主体を傾むけるべく、当遺跡の作業を約1ヶ月間中断した。2月に入り、調査を再開した。作業もかなり進み、実測を行うため国土地理座標に基づく4×4ｍのグリットを設定した。その後、作業員も半減し、実測、写真撮影を中心に作業を進めたが、最後に調査の残った大型の住居址2，6号住は、遺物の出土量も多く、作業が遅れ、最終的に2号住の調査が完了したのは、春の気配の感じられる3月末のことであった。そして、3月31日をもって現地での全調査を終了した。

尚、各遺構の調査経過は、第2表に示した通りである。　（金子　章）



第2表
発掘作業
工程表

第Ⅵ章　遺跡の概要

阿知越遺跡A地点は、所在地の小字名阿知越よりその名称をつけたものである。また、同字名が広い地区に亘るため、調査地点をアルファベットで示す事とした。

遺跡は、生野山と称される丘陵の南西端の西側斜面に位置し、微視的には北西より入り込んだ浅い谷地形を呈するやや窪む所に存在する。その標高は 100m前後を測る。

遺跡の範囲　遺跡の範囲は、丘陵斜面に沿って標高90～ 100m前後を中心に南北 400m程の広がりが予想され、奈良～平安時代にかけての時期の集落址の様である。また、当遺跡の南側の谷を隔てて対峙する位置にも、御林下遺跡の調査された同時期の集落址の広がりが認められる。

調査は、約2,000㎡を対象に行い、検出された遺構は、奈良・平安の竪穴住居址が重複による一部確認も含め17軒、同期の柱穴群、この内掘立柱建物址と捉えられたもの５棟、同期の土坑６基及び溝状遺構２本、近世の溝状遺構１本である。これらの遺構は、いづれも基盤となるローム層を掘り込み構築されている。

竪穴住居址　竪穴住居址は、長辺７m程から２m程の規模のものに亘り、2，6号住の６×７mの規模は、傑出した存在である。確認面からの遺構の掘り込みは、小規模のものは浅く、中,大型のものは深く、しっかりとしたものである。平面プランは、全容の知れた住居址を見る限り、正方形のものが少なく、傾斜する辺を長辺とするものが殆どであり、小規模のものでは形態の乱れが認められる。また、中,大規模の2,6,9 号住では、カマドの附設された辺が一直線を成さず、カマドを境に左右の壁がずれるプランを呈しており、カマドの構造的に片側の袖のはり出しをなくしている。カマドは、全ての住居址とも斜面上方の東壁に位置し、辺の中央もしくは南東コーナー部にかけて附設されている。また、石材の使用も目立ち、４軒の住居址で石製の支脚が認められ、さらに２号住では、カマド内壁面及び天井部に架設した石材の使用が見られた。

柱　　穴　柱穴の確認できた住居址は３軒であるが、その他６号住では礎石と考えられる石の配置が認められている。柱穴の配置は、９号住が４本の主柱穴から成り、２号住では、壁際及び一部壁外を含めほぼ等間隔で掘り方のしっかりとした柱穴列が並ぶ。また、７号住では一部に２号住同様の柱穴に加え、基本的に４本の主柱穴を持つ配置を示している。

時期的には、８世紀代から10世紀にかけて営まれた住居址群であるが、規模、プラン等の同一時期における傾向は窺い知れない。ただ、比較的時期差の少ない2,6 号住の大型の住居址において多量の土器を出土し、２軒のみに限り墨書土器を出土した事は、これらの住居址の性格を捉える上で重要である。（金子　章）

第４図　阿知越遺跡Ａ地点全測図

第Ⅴ章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址

第１号住居址（第５図，図版４－１）

１号住居址は、調査区北端の斜面上に位置する。遺構西側部分は流失しており検出されない。

規模は、南北３ｍ20cm、東西２ｍ以上を測り、プランは方形あるいは長方形を呈すことが予想される。主軸方位は、Ｎ－88°－Ｅを示す。

床面は、カマド側が高く西に傾斜し、比高差は30～40cmを測る。壁高は、東側で15cmを測る。

住居址内から検出された土坑、ピット等の中から、この住居址に伴なうことが明らかなのはカマド南の小ピット１基のみで床面下30cmを測る。

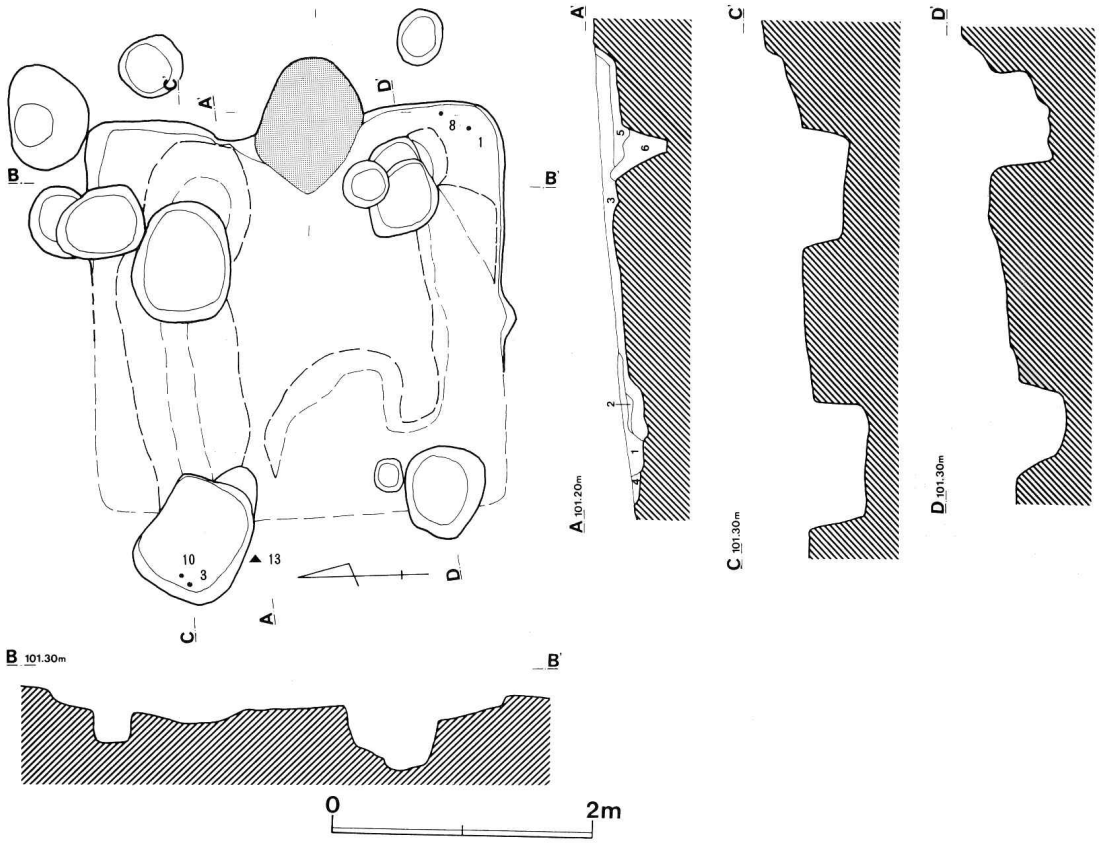
出土遺物は少なく、そのうち第６図No.２・８は、床直上で検出されたものである。

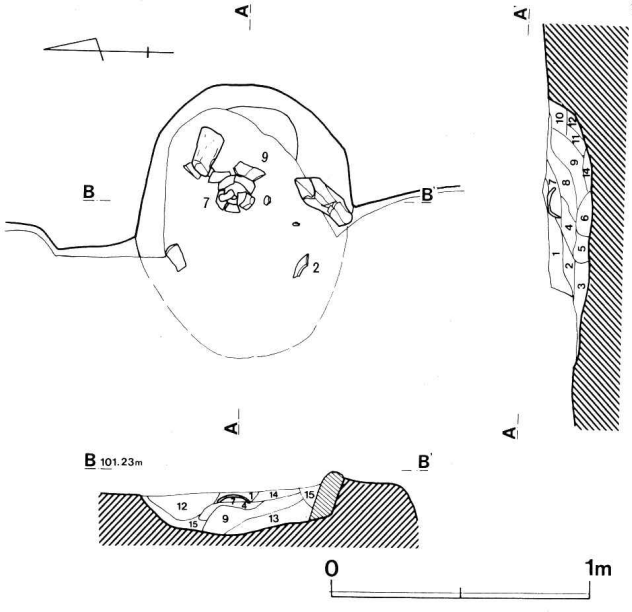
カマド（第５図，図版4-2）

カマドは東壁中央部に設けられ、主軸方向はＮ－84°－Ｅである。燃焼部は壁を幅84cm、壁外へ50cm掘り込む。焚き口部は床面を利用し、支脚は燃焼部東隅に設置されている。煙道部は不明である。

第１号住居址カマド土層説明

１層　暗茶褐色土（多量の炭化物粒･焼土粒と若干の粘土ブロックを含む。粘性有。）
２層　暗茶褐色土（１層より若干明るい色で焼土粒を多量に含み、炭化物粒子はやや少なめである。粘土ブロックを含む。粘性あり。）
３層　暗黄褐色土（焼土粒を若干含む。）
４層　暗赤褐色土（焼土粒を多量に含む。粘性あり。）
５層　暗茶褐色土（ロームブロックを含み焼土粒、炭化物粒を若干含む。粘性有。）
６層　暗黄褐色土（ローム主体。）
７層　暗黄褐色土（炭化物粒、焼土粒を若干含む。）
８層　暗茶褐色土（多量の白色砂粒と若干の焼土ブロックを含む。しまり悪し。）
９層　暗茶褐色土（焼土ブロックを多量に含み、炭化物粒を若干含む。）
10層　暗茶褐色土（９層よりやや赤みをおびており、焼土粒を多量に含む。）
11層　暗茶褐色土（焼土粒を多量に含み、炭化物粒を若干含む。）
12層　暗茶褐色土（他の暗茶褐色土よりやや暗色を呈し、炭化物を若干含む。）
13層　暗茶褐色土（焼土粒を若干含む。）
14層　暗茶褐色土（焼土粒を多量に含む。）
15層　暗茶褐色土（炭化物粒、ローム粒を若干含む。）
16層　暗茶褐色土（白色砂粒を多量に含みしまりが悪い。攪乱土層である。）





第５図　第１号住居址およびカマド

第１号住居址土層説明

１層　暗茶褐色土（火山砂、炭化物及び焼土粒を含む。）

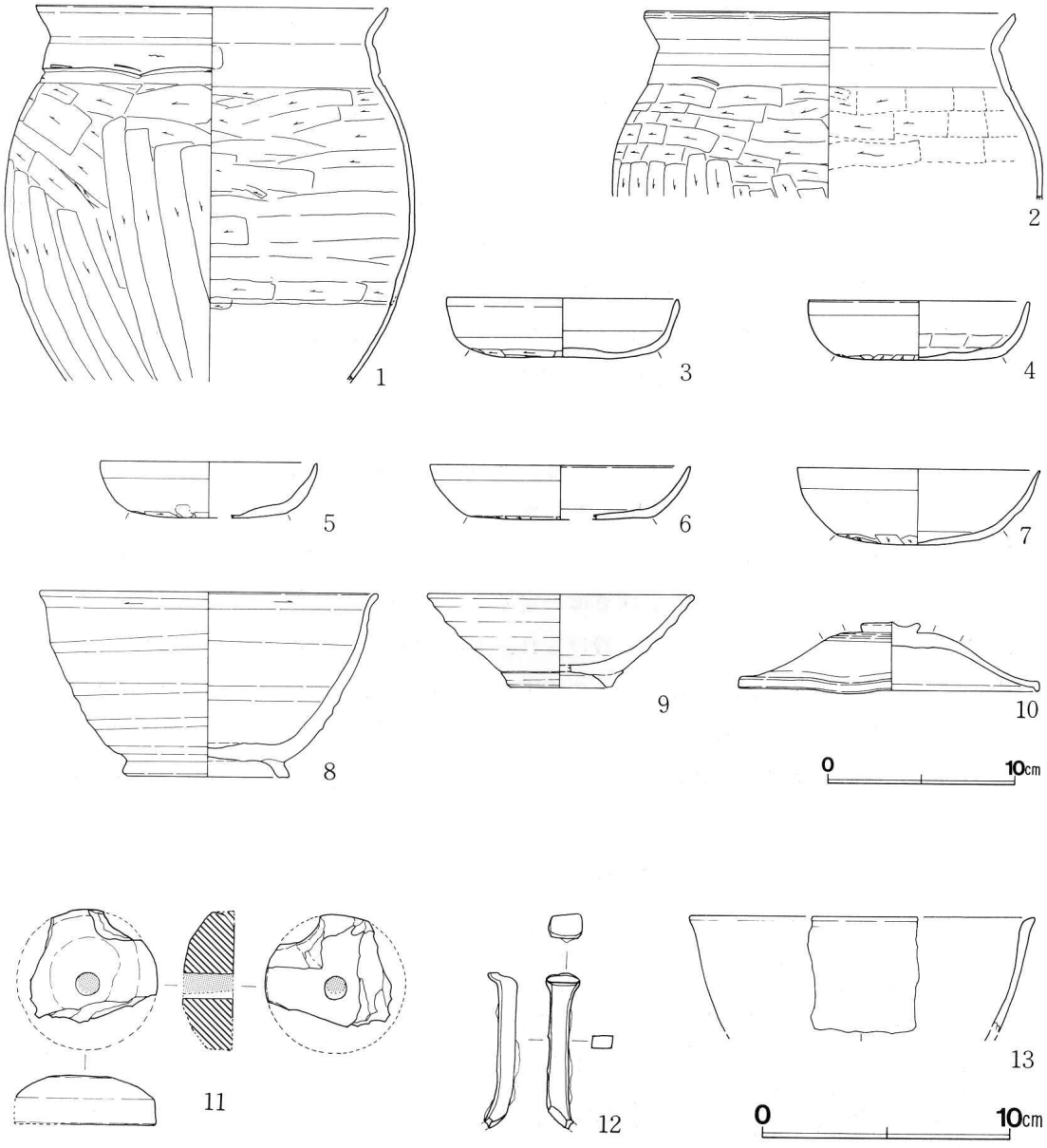
２層　暗黄褐色土（火山砂、炭化物及び焼土粒を少量含む。）

３層　暗茶褐色土（火山砂を少量含み炭化物、焼土粒を多量に含む。）

４層　暗黄褐色土（火山砂を若干含む。）

５層　暗茶褐色土（火山砂、炭化物及び焼土粒子を若干含む。）

６層　暗黄褐色土（火山砂を若干含み粘性も若干ある。）



第６図　第１号住居址出土遺物

第２号住居址（第８・９・10・11・12図，図版５－１・２）

２号住居址は、調査区北西部緩斜面上に位置し、隣接する６号住居址とは１ｍ余、３・６号住居址とは約２ｍの距離である。

プランは、カマド左側部が後方に張り出す特異な形態を呈し、張り出し部分を除いた形態では、東西5.6ｍ、南5.6～5.8ｍの正方形に近い。張り出し部分は、カマド側で東に１ｍ、北壁側で50～70cm張り出し、南北幅は、２ｍ70cm程である。主軸方位は、N－90°－Eを示す。

床面は、比較的平坦な面を形成し、黄褐色ローム土による張り床が行なわれている。

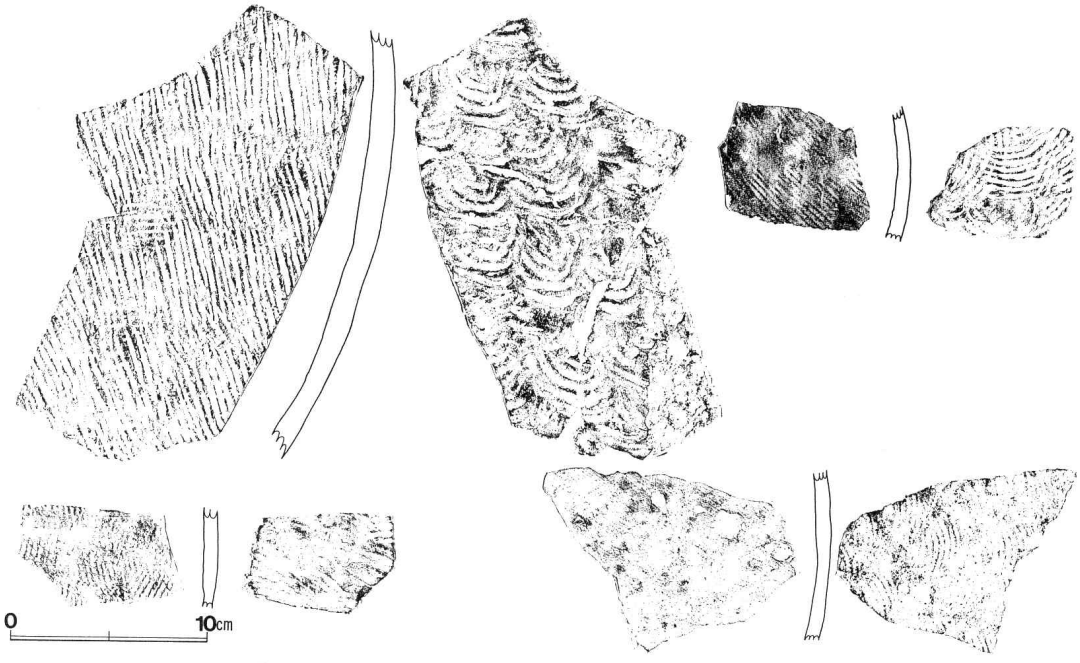
床面下は、住居址中央付近で、長径３ｍ、短径２ｍ、深さ50cm程度の倒木痕が検出され、また北壁を沿う形で、壁から10cm程内側に東西に掘り方が検出され、さらに張り出し部まで延びており、最深部で約30cmを測る。南壁側にも同様な掘り方が検出され、最深部は20cm程を測る。床面から確認面までの高さは東壁側で40cm、西側では10cm程である。

壁溝は、北壁及び南壁、張り出し部に於いて検出されており、西壁側では検出されていない。壁溝幅は、確認できるもので30cmを測り、深さは床面から10cmを測る。

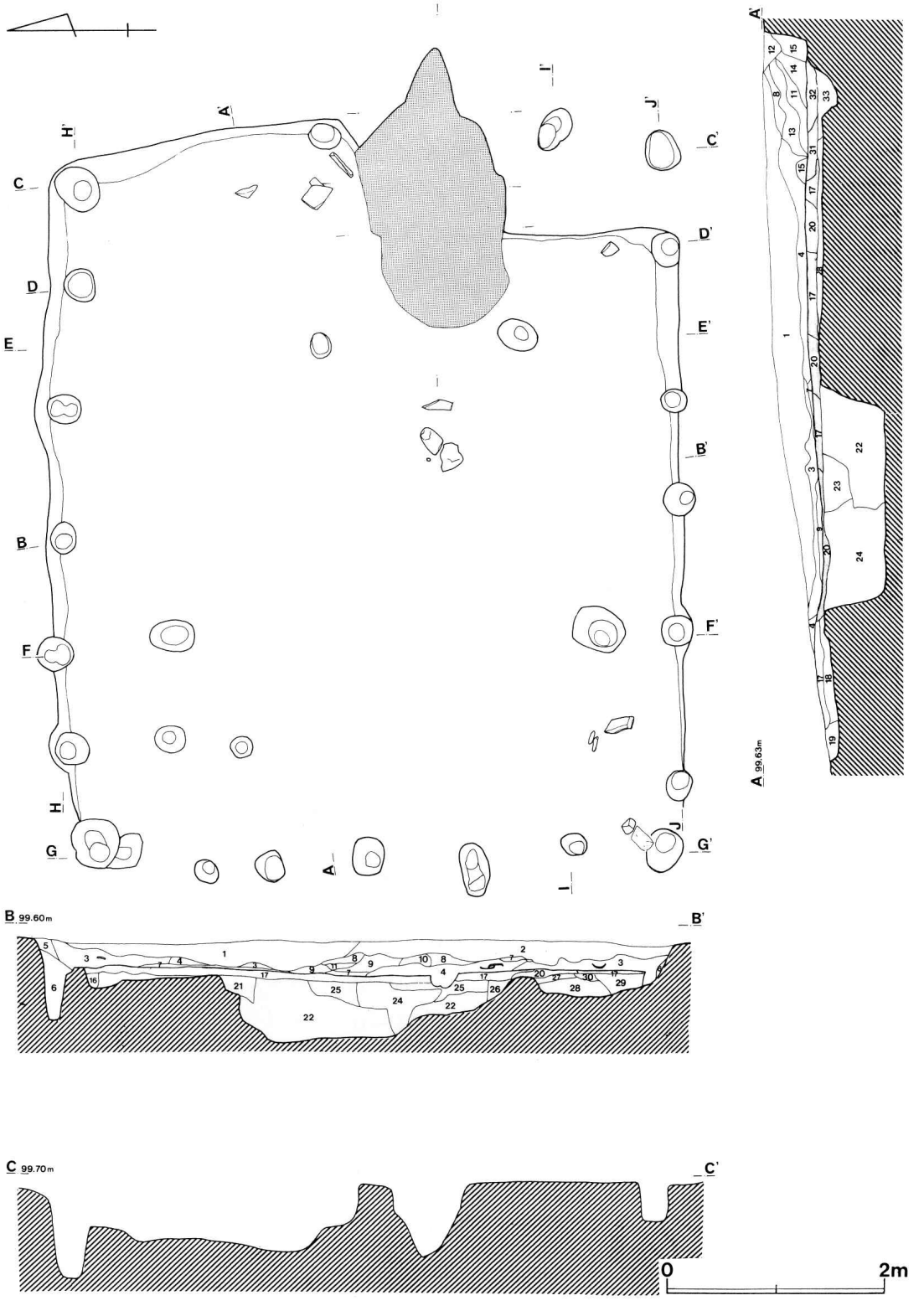
柱穴は、30基検出されている。その中で主柱穴と断定できるものはない。支柱穴は壁に沿う形で検出でき、カマド右側では壁東70cm程外に検出された。基数は北壁、南壁、西壁でそれぞれ７基、東側で４基検出されている。規模は、上場で20～40cmを測り、深さは一定でなく、床面から10～60cmとばらつきがある。

カマド
（第12図，
図版５-2）

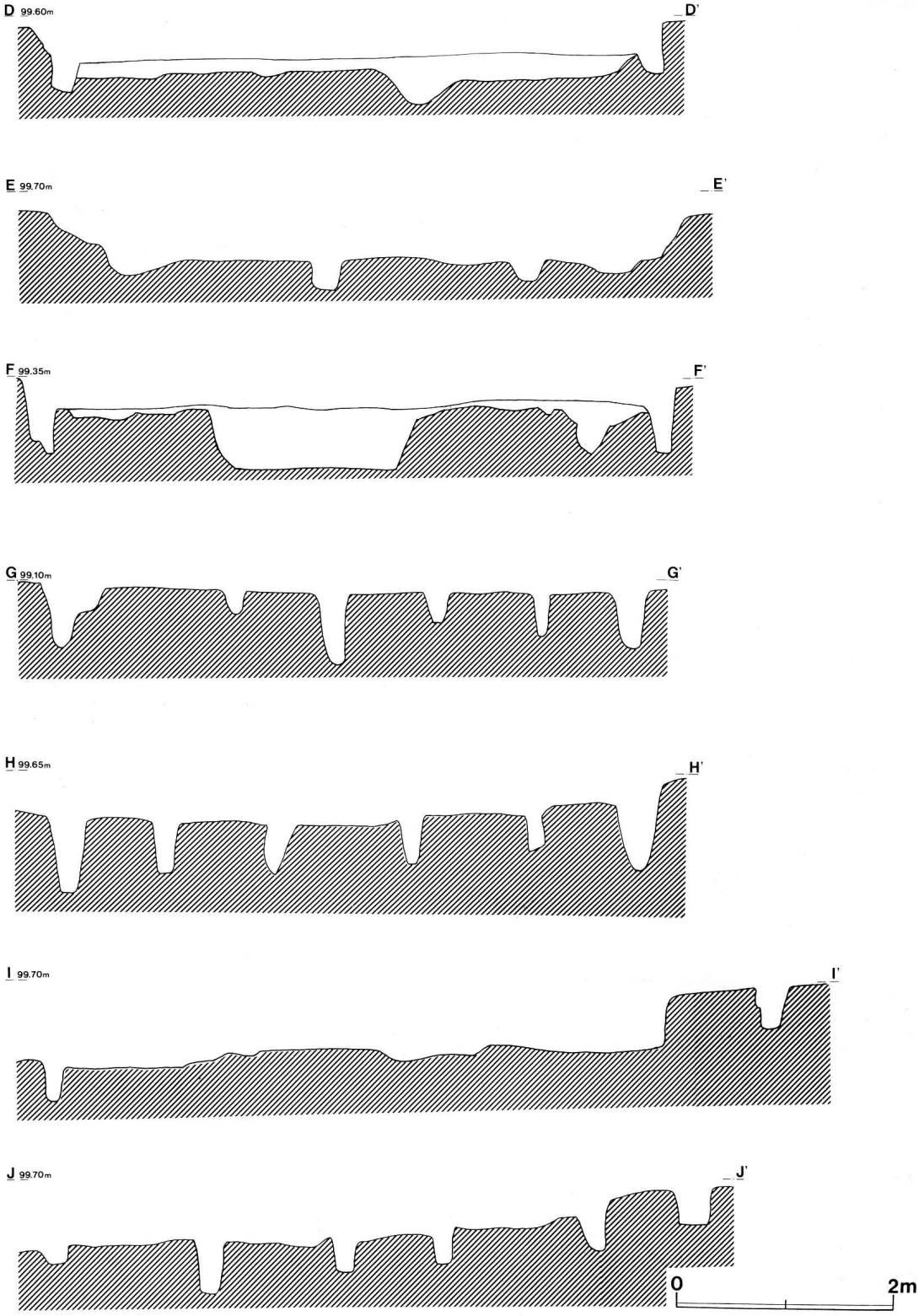
カマドは東壁南寄部に設けられ、主軸方向はＮ―90°―Ｅである。焚き口部長径64cm、短径39cm、深さ40cmの楕円形ピットを設けている。燃焼部は壁を幅76cm壁外へ長さ95cm掘り込み、これに幅60cm長さ76cmの煙道部を付設する。袖はカマド北側のみ住居の壁を長さ107cm程削り出し、カマド南側は、棚状に段差をつくる。カマド入口には、緑泥片岩が橋状にかけられ、燃床部には灰色粘土が貼られている。支脚は、燃床部中央部付近に設置されている。



第７図　第２号住居址出土　須恵器大型広口壺破片拓影図



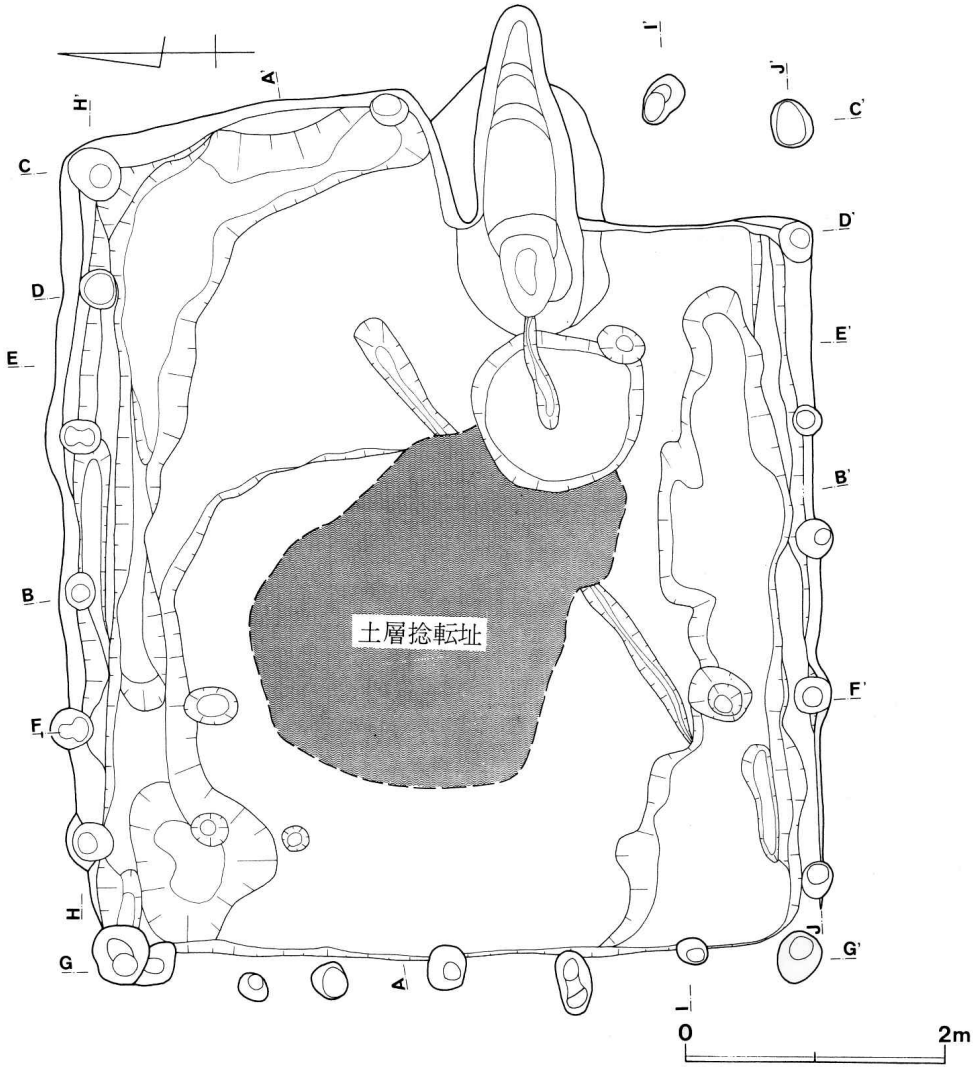
第８図　第２号住居址



第９図　第２号住居址断面図

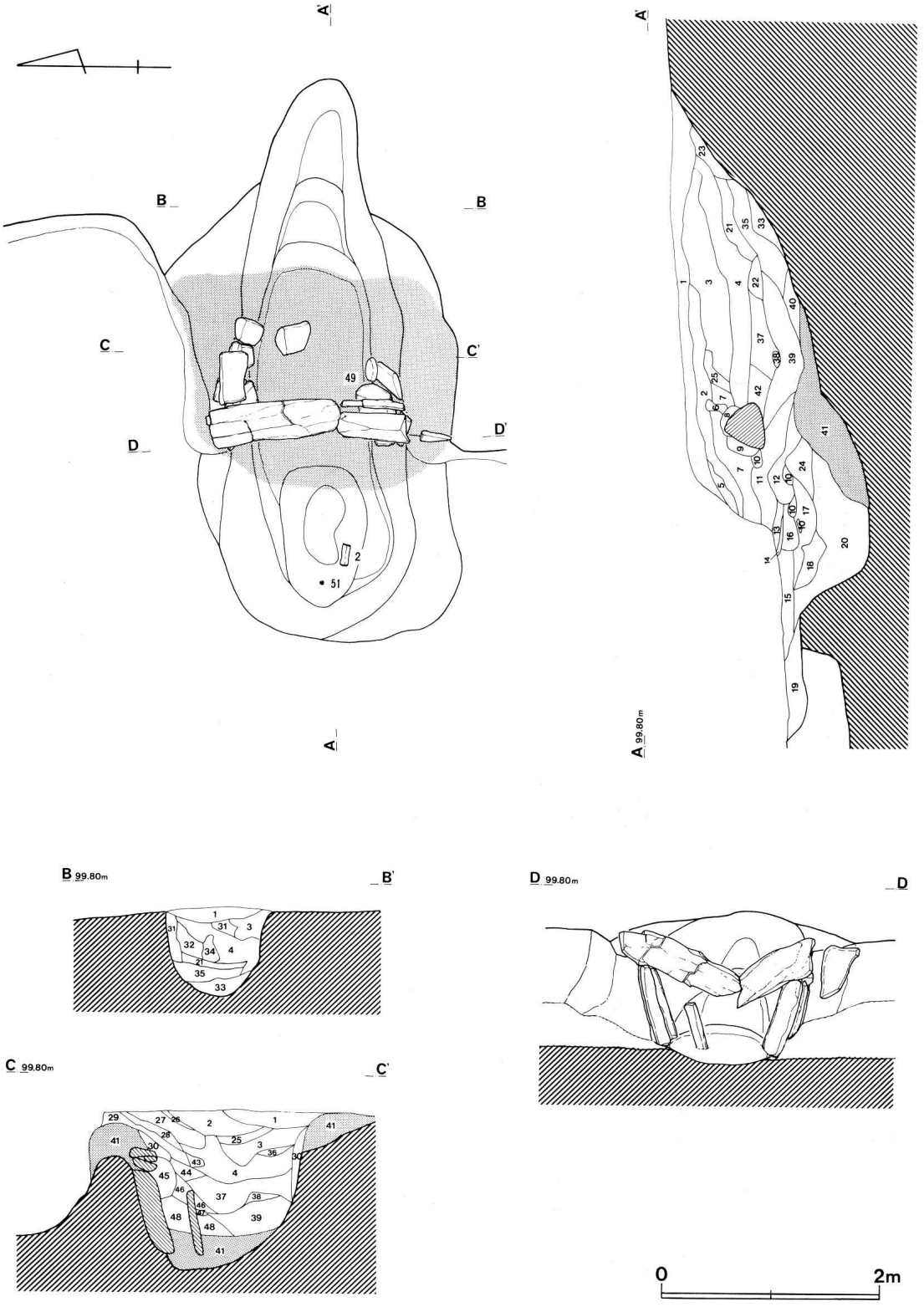
第２号住居址
土層説明

１層　茶褐色土（焼土粒子、炭化物、ローム粒子、火山灰を多少含む。）
２層　茶褐色土（１層より明るい色で、焼土粒子、炭化物、火山灰を多少含み、ロームブロック、ローム粒子を多く含む。）
３層　黒褐色土（炭化物を多く含み、焼土粒子、ローム粒子を多少含む。）
４層　暗黒褐色土（炭化物が主体で、焼土粒子を多少含む。）
５層　暗黄褐色土（火山灰、炭化物をわずかに含む。）
６層　暗黄褐色土（５層より暗い。炭化物をわずかに含む。）
７層　橙褐色土（焼土）
８層　赤褐色土（焼土が主体で、乳黄褐色粘土粒子、炭化物を多く含む。）
９層　暗茶褐色土（焼土粒子、炭化物を多少含む。）
10層　乳黄褐色土（粘土）
11層　灰褐色土（粘土）
12層　暗赤褐色土（焼土が主体で、火山灰、ローム粒子を多少含む。）
13層　赤褐色土（焼土）
14層　灰茶褐色土（灰褐色粘土が主体で、ローム粒子、焼土粒子を多少含む。）
15層　暗黄褐色土（粘質のローム）
16層　暗茶褐色土（ロームブロックをやや多く含む。）
17層　黄褐色土（ローム、張り床）
18層　暗茶褐色土（16層より暗い色で、ロームブロックを多少含む。）
19層　暗茶褐色土（ロームブロックを多少含む。）
20層　茶褐色土（ロームブロックとの混合土、張り床）
21層　黄褐色土（粘質のローム）
22層　暗黄褐色土（ロームブロックとの混合土。）
23層　暗黄褐色土（19層より暗い色で、ロームブロックが細かい。）
24層　暗黒褐色土（ロームブロックとの混合土）
25層　暗茶褐色土（ロームブロックとの混合土）
26層　暗黄褐色土（ローム粒子を多量に含み、焼土粒を若干含む。）
27層　黒色土（粘土を若干含む。）
28層　暗黄褐色土（ロームブロックとの混合土）
29層　暗茶褐色土（焼土粒、炭化物粒を若干含む。）
30層　暗茶褐色土（焼土粒を若干含み、炭化物ブロックを含む、29層よりやや明るい色である。）
31層　茶褐色土（ロームブロックとの混合土で、焼土粒、炭化物を若干含む。20層より暗い色調である。張り床）
32層　茶褐色土（灰褐色粘土ブロックを多く、焼土粒、ローム粒を多く含む。）
33層　灰褐色土（粘土、ローム粒、焼土粒を若干含む。）



第10図　第２号住居址掘り方平面図

第11図　第２号住居址出土遺物分布図



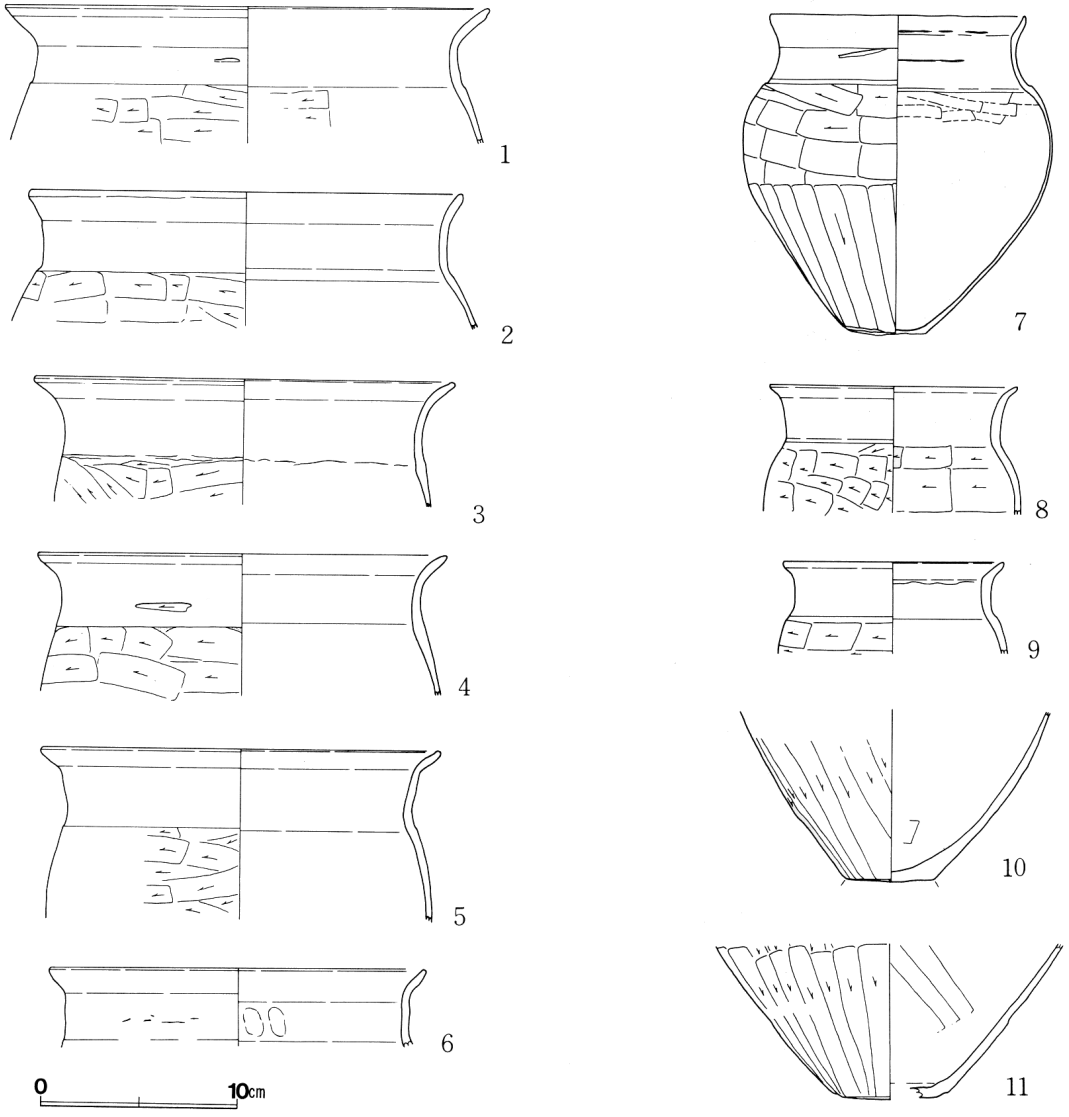
第12図　第２号住居址カマド

第2号住居址カマド

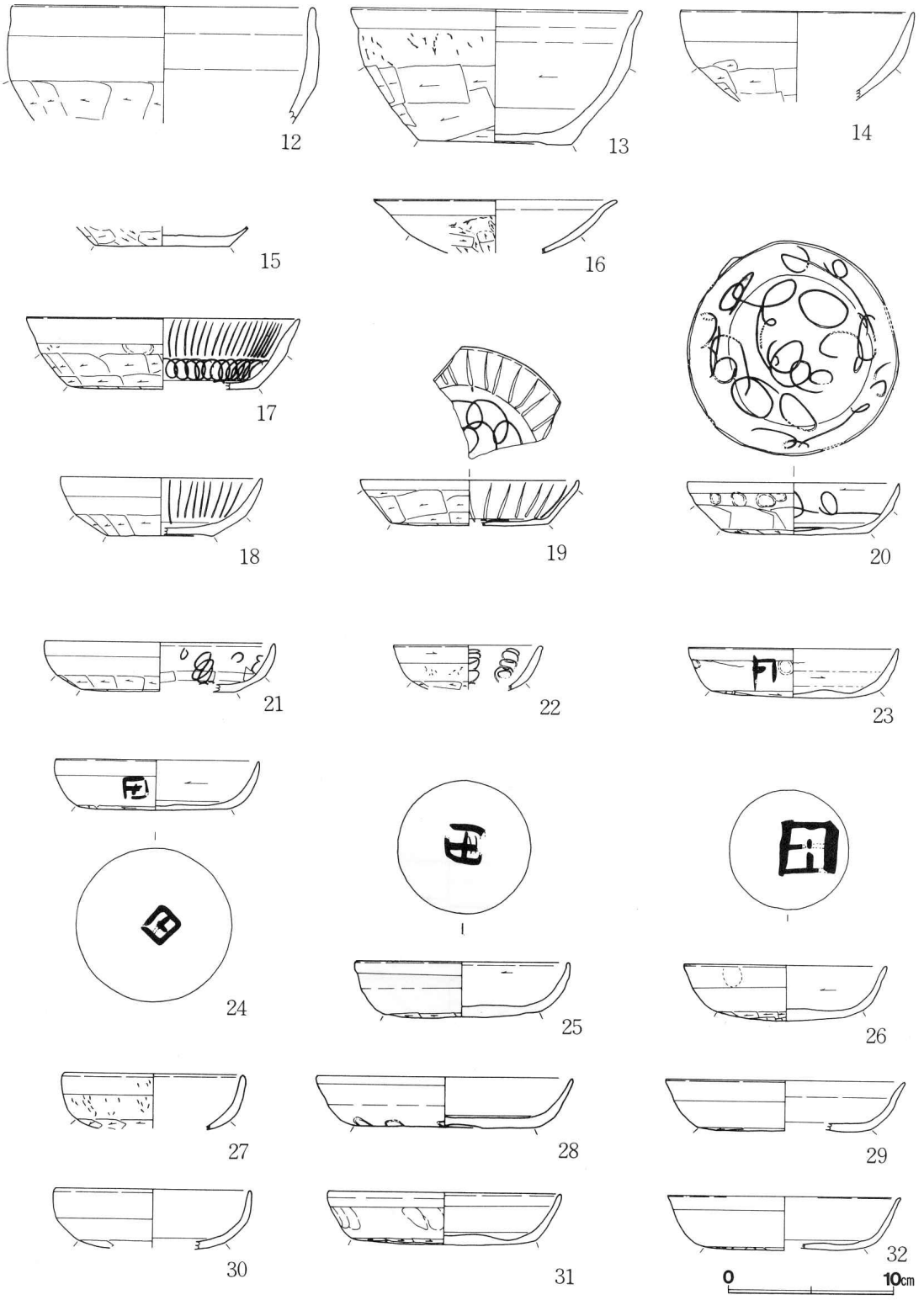
土層説明

1層　暗茶褐色土（炭化物、焼土粒、砂を含み、しまっている。）
2層　暗茶褐色土（炭化物、焼土粒、砂を含む。1層より砂の含有量が少なく、しまっている。）
3層　暗茶褐色土（炭化物、焼土粒、砂を含む。1、2層より暗い色で、しまっている。）
4層　暗赤褐色土（焼土ブロックを主体とし、炭化物を若干含み、しまっている。）
5層　暗茶褐色土（1層に近く、しまっている。）
6層　暗赤褐色土（焼土ブロックでしまりがある。）
7層　暗茶褐色土（焼土粒、炭化物、粘土を含む。2層や11層と比較して焼土粒が少なく、しまっている。）
8層　暗赤褐色土（粘土と焼土の混合土で、しまっている。6層より暗い色である。）
9層　暗茶褐色土（焼土粒と若干の炭化物を含み、しまっている。）
10層　褐色土　（粘土ブロックでしまっている。）
11層　暗茶褐色土（焼土粒を多く含み、炭化物を若干含み、しまっている。）
12層　明黒褐色土（焼土粒、炭化物を多く含み、しまっている。）
13層　暗茶褐色土（焼土粒、炭化物を若干含み、しまりがない。）
14層　黒色炭化物
15層　明黒褐色土（焼土粒、炭化物を多く含む。）
16層　暗茶褐色土（炭化物、粘土を含み若干の焼土粒を含む。）
17層　黒褐色土　（若干の焼土粒を含む。）
18層　暗褐色土　（粘土を主体とし、焼土粒、炭化物を若干含む。）
19層　暗茶褐色土（若干の焼土粒を含む。）
20層　明黒褐色土（若干の焼土粒、炭化物を含む。）
21層　暗赤褐色土（焼土を主体とする。4層より明るい色である。）
22層　暗赤褐色土（焼土ブロックを主体とする。21層より明るい色である。）
23層　暗茶褐色土（焼土粒を若干含む。）
24層　暗茶褐色土（焼土粒、粘土ブロックを含む。）
25層　乳黄褐色土（粘土層）
26層　灰褐色土　（粘土層）
27層　暗茶褐色土（焼土粒、炭化物を含み、粘性あり。）
28層　暗茶褐色土（炭化物ブロックを多量に含む。）
29層　暗茶褐色土（炭化物、焼土を多量に含む。）
30層　橙褐色土　（焼土層）
31層　暗赤褐色土（炭化物粒を若干含む。）
32層　暗赤褐色土（31層よりやや暗い色で、硬質の焼土を含む。）
33層　暗茶褐色土（袖の部分と同質の粘土を含み、焼土、炭化物粒を若干含む。）
34層　橙褐色土　（焼土ブロック）
35層　暗茶褐色土（焼土粒を多量に含む。）
36層　暗赤褐色土（焼土粒、炭化物粒を含む。）
37層　暗茶褐色土（焼土粒、炭化物を含み、4層と比較して軟質である。）
38層　黒褐色土
39層　暗橙褐色土（焼土粒を主体とし、炭化物を若干含み、しまりがない。）
40層　暗橙褐色土（焼土粒を主体とし、炭化物を若干含み、粘土粒子を多く含む。）
41層　灰褐色土　（粘土を主体とし、焼土粒と若干の炭化物を含む。）
42層　暗茶褐色土（焼土粒、炭化物、粘土粒を含み、しまっている。）
43層　暗赤褐色土（焼土粒を主体とする。）
44層　暗茶褐色土（焼土粒と若干の粘土粒を含む。）

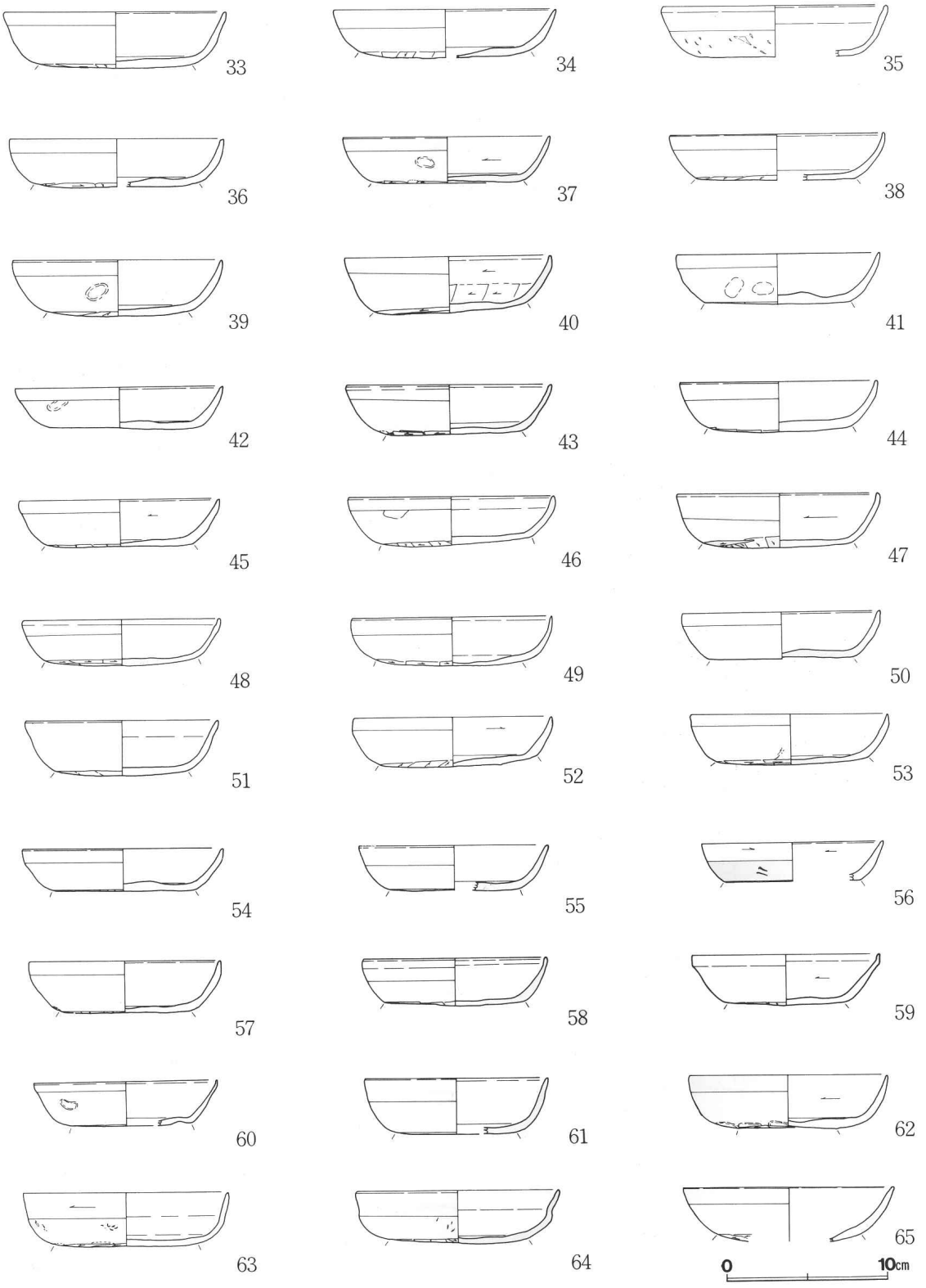
45層　暗黄褐色土（焼土粒、炭化物、ロームブロックを含む。）
46層　茶褐色土　（焼土粒、炭化物を含む。）
47層　乳橙褐色土（焼土ブロック）
48層　明黒褐色土（焼土粒、炭化物を含む。）
49層　暗黄褐色土（ロームを主体とし、焼土ブロック、砂粒子を含む。しまりがない。）
※　カマド内の土は、全体的に粘質である。



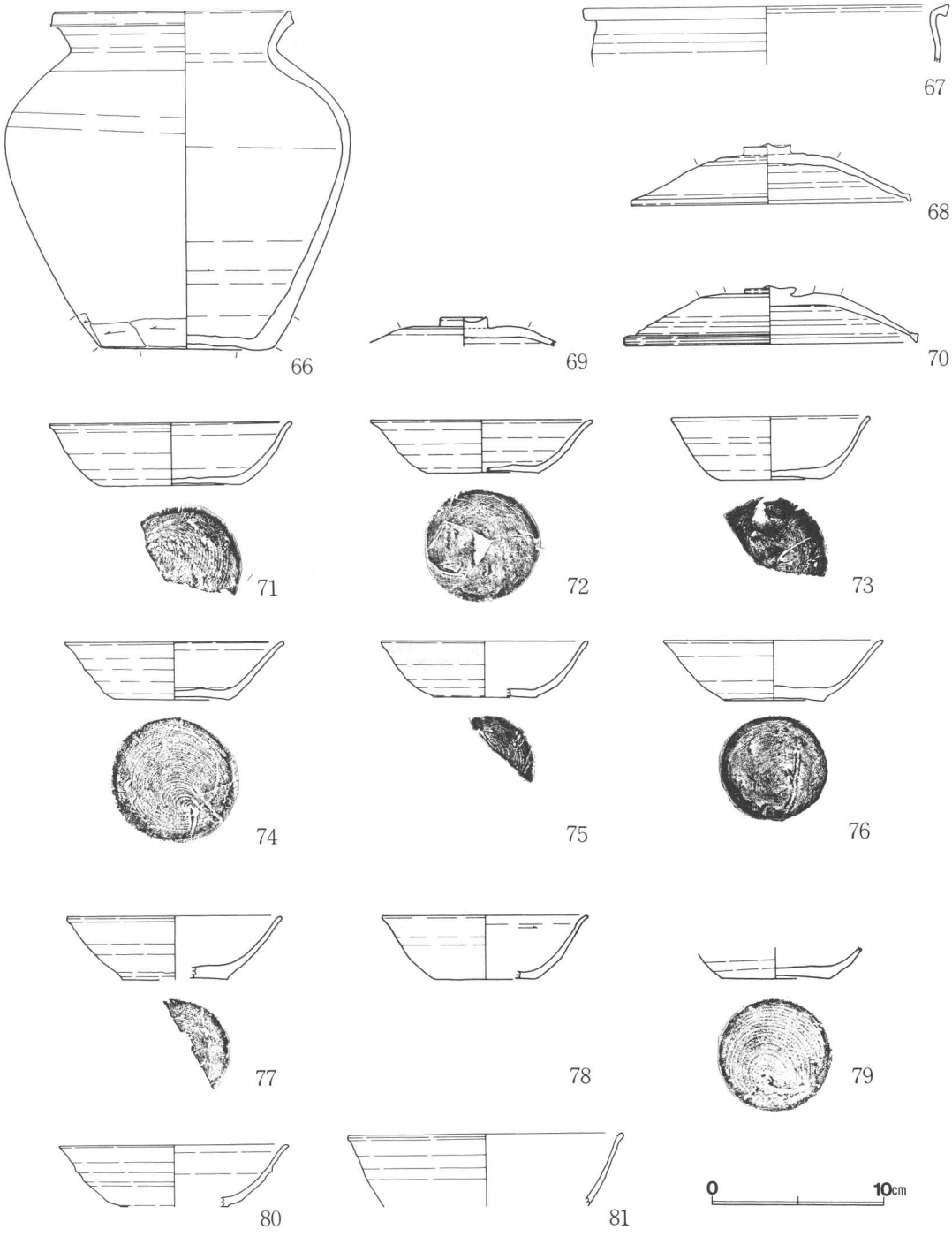
第13図　第２号住居址出土遺物（1）



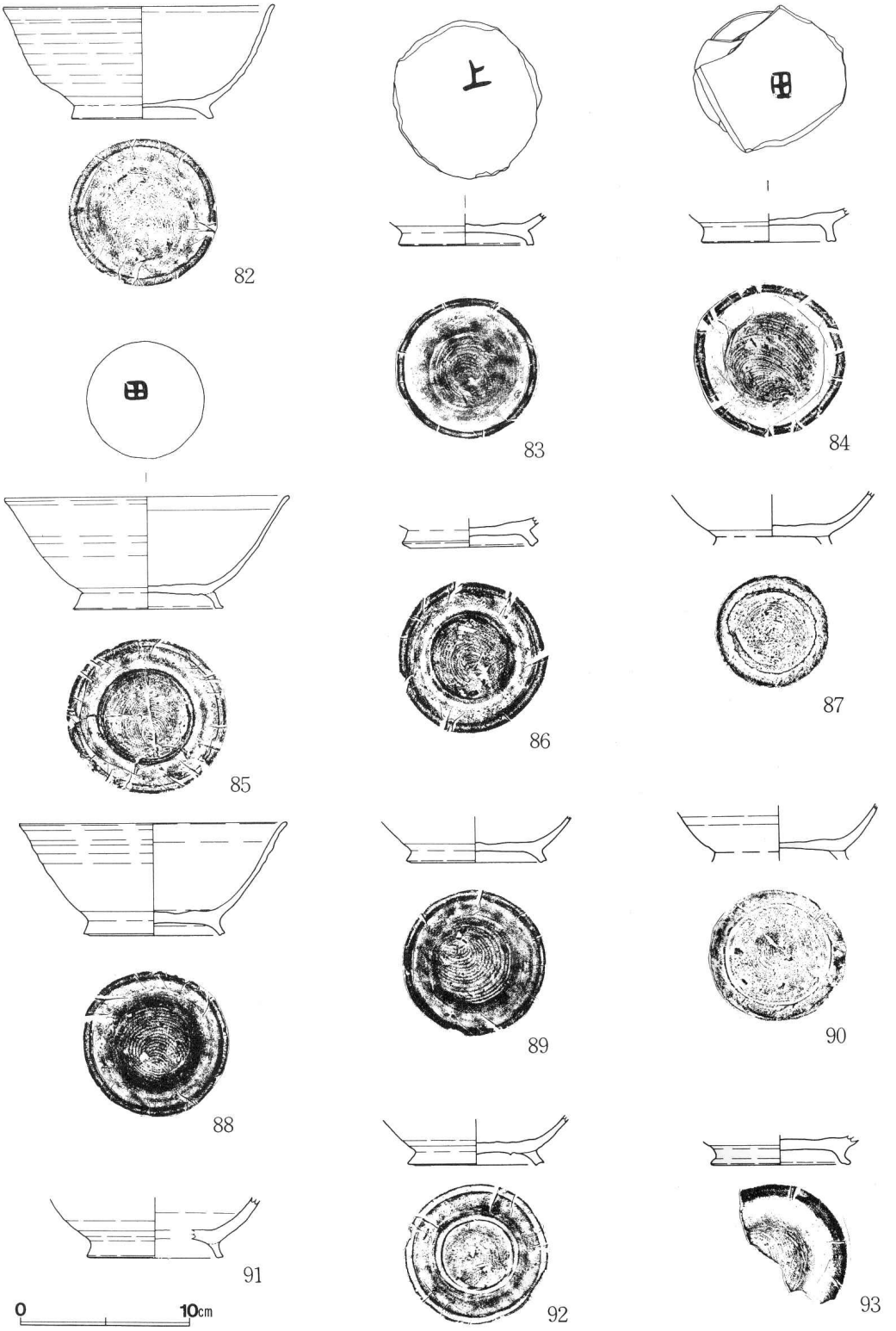
第14図　第２号住居址出土遺物 (2)



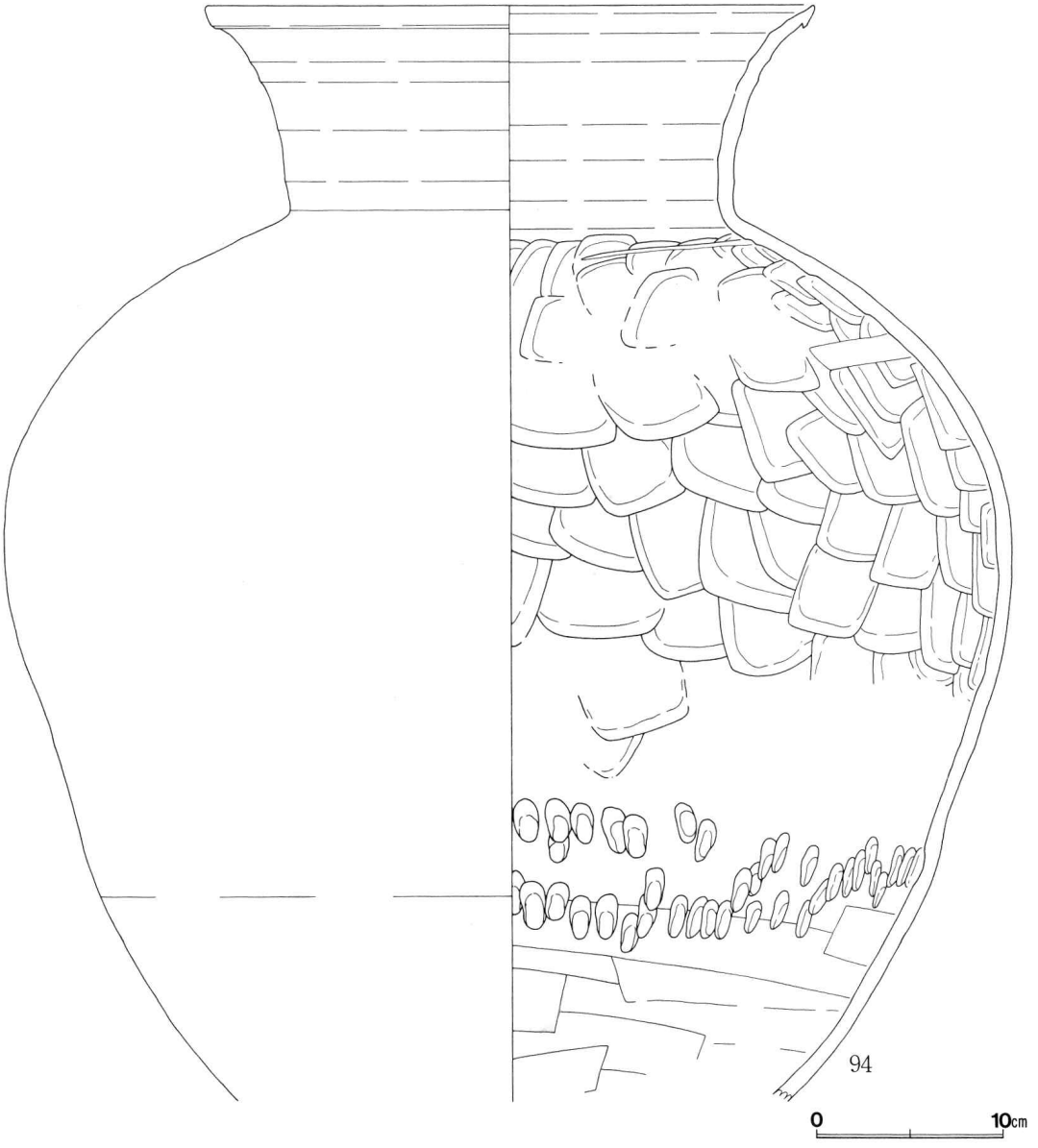
第15図　第２号住居址出土遺物(3)



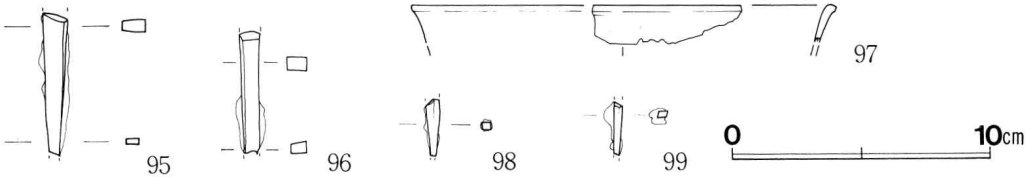
第16図　第２号住居址出土遺物(4)



第17図　第２号住居址出土遺物 (5)



第18図　第２号住居址出土　須恵器大型広口壺



第19図　第２号住居址出土鉄製品

第３ａ・ｂ号住居址（第20・21・22図，図版７-１・２）

３ａ住
（第20図，
図版７-1）

３ａ号住居址は調査区北西部に位置し、南西側約４ｍには４号住居址が、南東側約３ｍには３ｂ号住居址が存在する。

規模は北側及び西側のプランが不明であるが、南北１ｍ50cm以上、東西１ｍ70cm以上である。南東コーナー部にカマドが付設されている。

主軸方向はN—87°—Eを示す。壁高は東側で20cmを測る。住居址北側にはピット群が存在する。

３ａ住カマド
（第21図）

カマドは、東壁南寄部に設けられ、主軸方向はN—87°—Eである。焚き口部は径42cm、深さ19cmの円形ピットを設けている。燃床部は、壁を幅90cm、壁外へ長さ68cm掘り込む。支脚は燃床部中央に設置されている。煙道部は不明である。

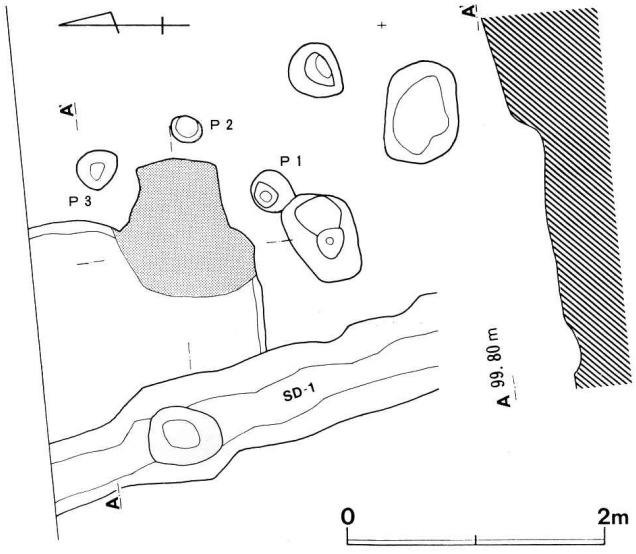
３ｂ住
（第22図，
図版７-2）

３ｂ号住居址は、3a号住居址の北側に位置し、南に２ｍ程離れて２号住居址が存在する。遺構西側の大部分は流出しており検出されない。

規模は南北２ｍ20cm以上、東西１ｍ40cm以上である。プランは明らかではなくカマドが南東コーナー部に付設されている。主軸方向はN—90°—Eを示す。壁高は東側で12cmを測る。住居址内からはピット、土坑等が検出されているが、伴なうものであるかが明らかではない。

３ｂ住カマド
（第22図）

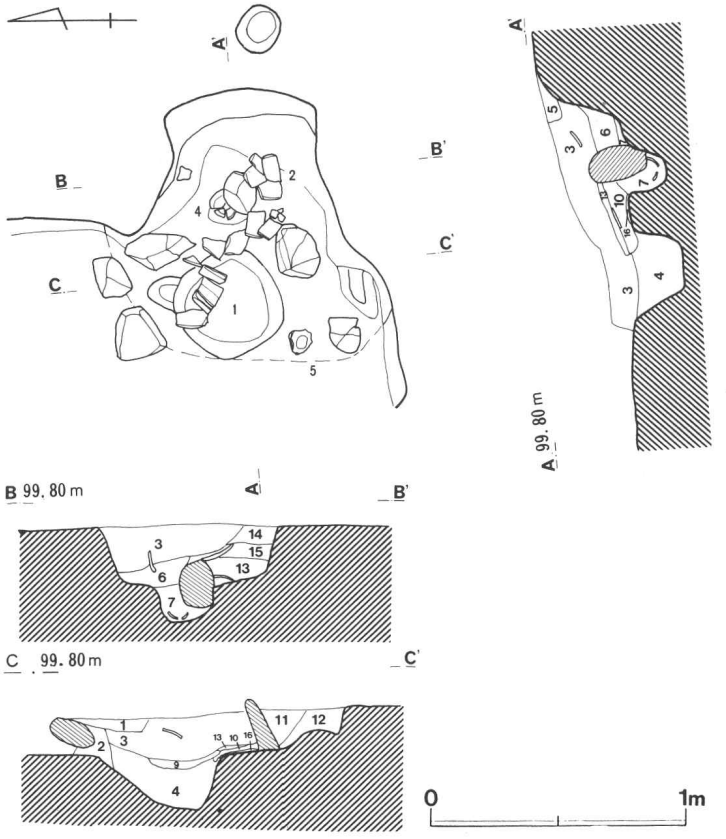
カマドは東壁南寄部に設けられ、主軸方向はN—118°—Eである。燃床部は壁を幅91cm、壁外へ長さ55cm掘り込む。焚き口部から燃焼部にかけては、その区別が明確でなく、不整形のピットが設けられる。煙道部は不明である。



第20図
第３ａ号住居址

３ａ住付近ピット覆土説明

Ｐ１　暗黒褐色土（ロームブロック・ローム粒を多く含む。炭化物を多少含み粘質がある。）
Ｐ２　赤褐色土（焼土ブロック・炭化物を多く含む。比較的しまっている）
Ｐ３　黒褐色土（ロームブロックを多く含む。粘質なくパサついている。）



第21図　第３a号住居址カマド

第３ａ号住居址カマド土層説明

１層　暗褐色土（炭化物・焼土粒・ローム粒・粘土ブロックを含む。やや粘性がありしまっている。）

２層　暗褐色土（炭化物・焼土粒・ローム粒・粘土ブロックを含む。１層より暗く、やや粘性がありしまっている。）

３層　暗黄褐色土（焼土ブロック、粘土ブロック・ローム粒・炭化物を含む。やや粘性あり、しまっている。）

４層　暗黒褐色土（焼土粒・ローム粒・炭化物を多く含み、ロームブロックも含む。粘性なく、パサついている。）

５層　黄褐色土（焼土ブロックロームブロックを多量に含み、炭化物も多少含む。粘性あり。しまっている。）

６層　黒褐色土（ロームブロックを多く含み、焼土ブロック・炭化物を多少含む。粘性あり、しまっている）

７層　暗黒褐色土（炭化物を多量に含み焼土ブロックも多少含む。粘性なくパサついている。）

８層　黒褐色土（ロームブロック・炭化物・焼土ブロックを含む。比較的７層に近い。）

９層　赤燈色土（焼土ブロックが密になった２cm程度の層。）

10層　黒色土（焼土粒・ローム粒を多少含む。粘性なくパサついている。）

11層　黄褐色土（粘土ブロックを比較的多く含み、ローム粒・炭化物・焼土粒も少し含む。粘性が有りしまっている。）

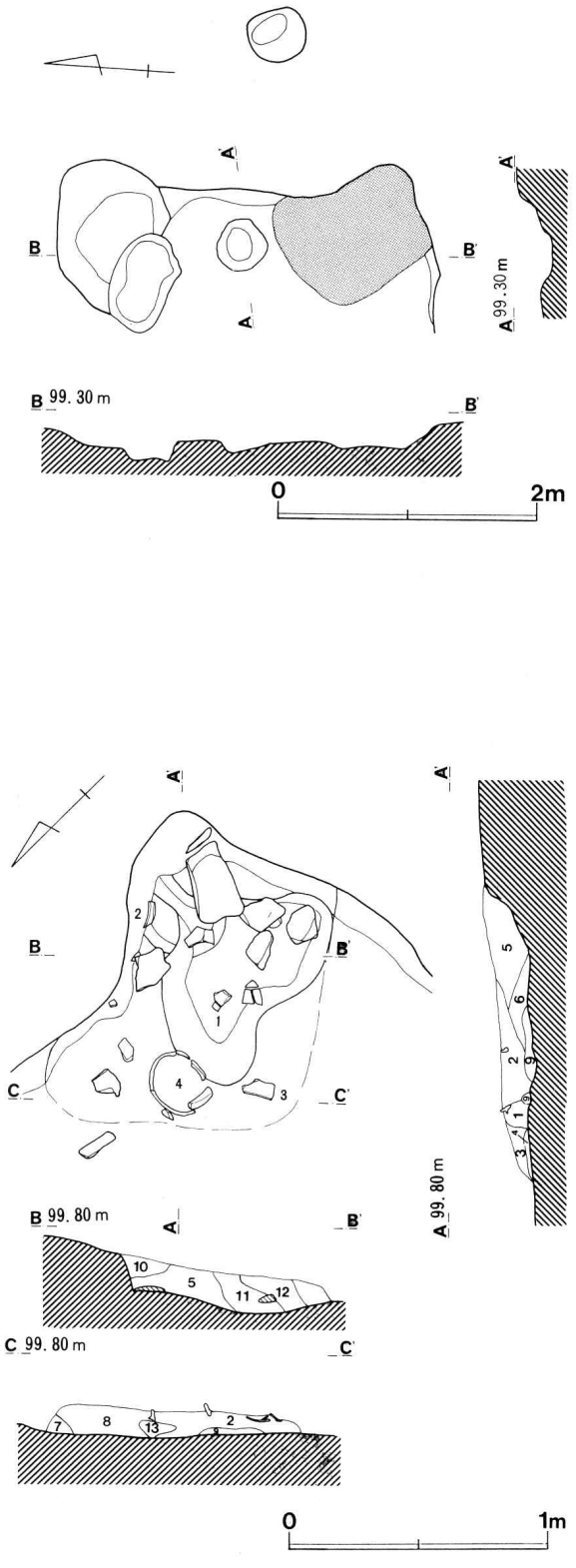
12層　暗褐色土（ロームブロックを多量に含み、炭化物も多少含む。11層よりは、粘性に乏しいが、しまっている。）

13層　赤燈色（焼土ブロックが密に集中する。黒色土がやや混入し、９層より焼土は、疎である。）

14層　暗黄褐色土（炭化物・焼土ブロック・粘土ブロック・ロームブロックを含み、１層に比べて、明るく黄色である。）

15層　赤燈色土（焼土ブロックが密に混入し、炭化物・ローム粒を多少含む。やや粘性あり、しまっている。）

16層　赤燈色土（パリパリに焼けた焼土。）



第22図　第３b号住居址およびカマド

第３ｂ号住居址カマド土層説明

1層　暗黄褐色土（ローム粒子を多量に含み、炭化物を若干含む。）

2層　茶褐色土（ロームブロック・焼土ブロックを含み、炭化物を、多量に含む。）

3層　暗黄褐色土（炭化物粒を若干含み炭化物ブロック・焼土粒を含む。１層よりやや明るい。）

4層　暗黄褐色土（炭化物を若干含む。）

5層　褐色土（白色砂粒を多量に含み、焼土粒、炭化物粒を若干含む。）

6層　茶褐色土（炭化物粒・焼土粒を若干含む。やや硬質である。）

7層　黄褐色土（やや硬質である。）

8層　黄褐色土（焼土粒・炭化物粒を、若干含む。）

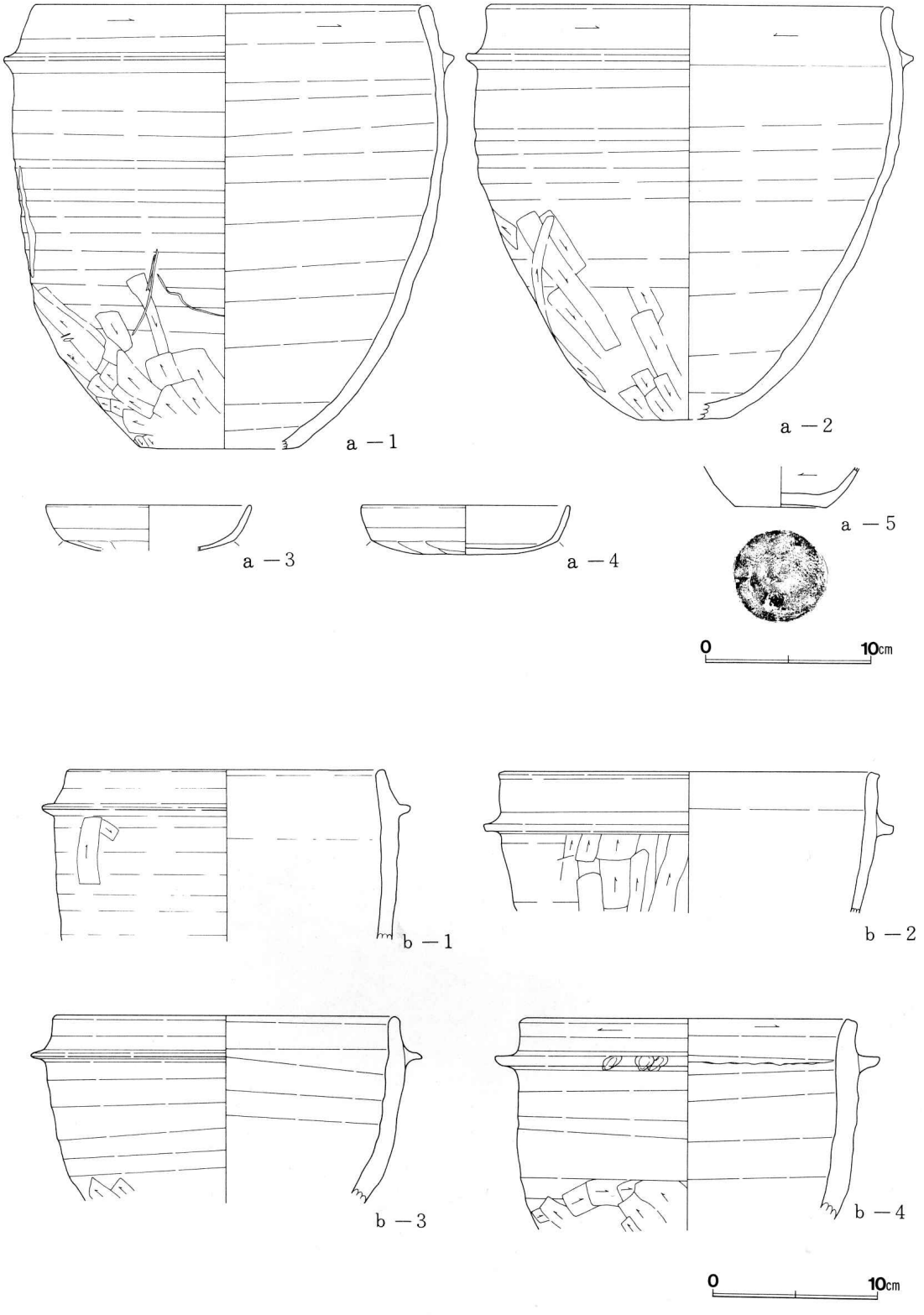
9層　黒色土（炭化物を多量に含む。）

10層　暗黄褐色土（白色砂粒を若干含む。）

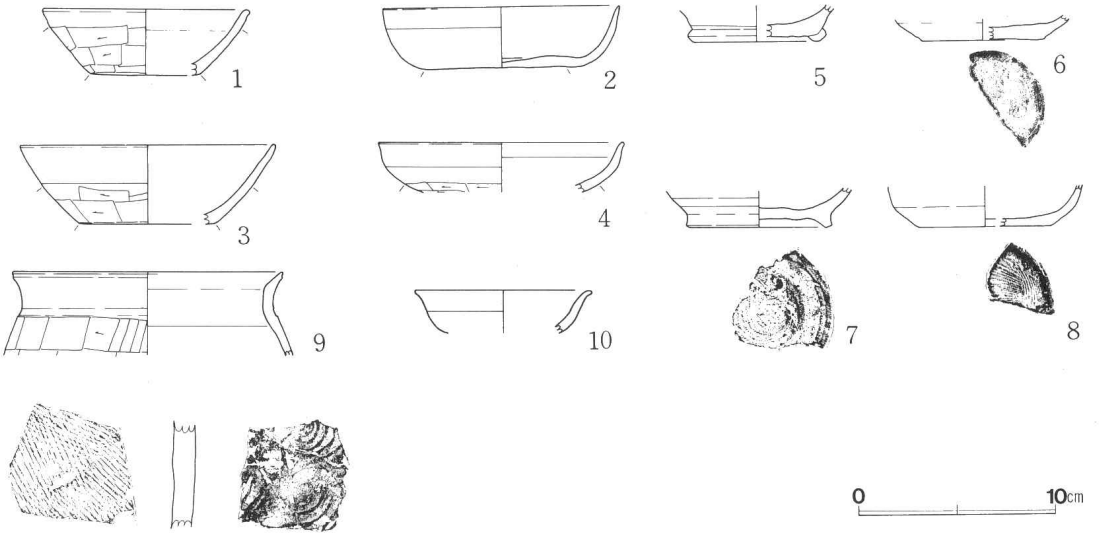
11層　褐色土（炭化物粒・焼土粒を若干含む。）

12層　褐色土（炭化物粒・焼土粒を若干含む。11層よりやや暗い色である。）

13層　黒色土（炭化物を極めて多く含み、焼土ブロックを含む。）



第23図　第３a・３b号住居址出土遺物



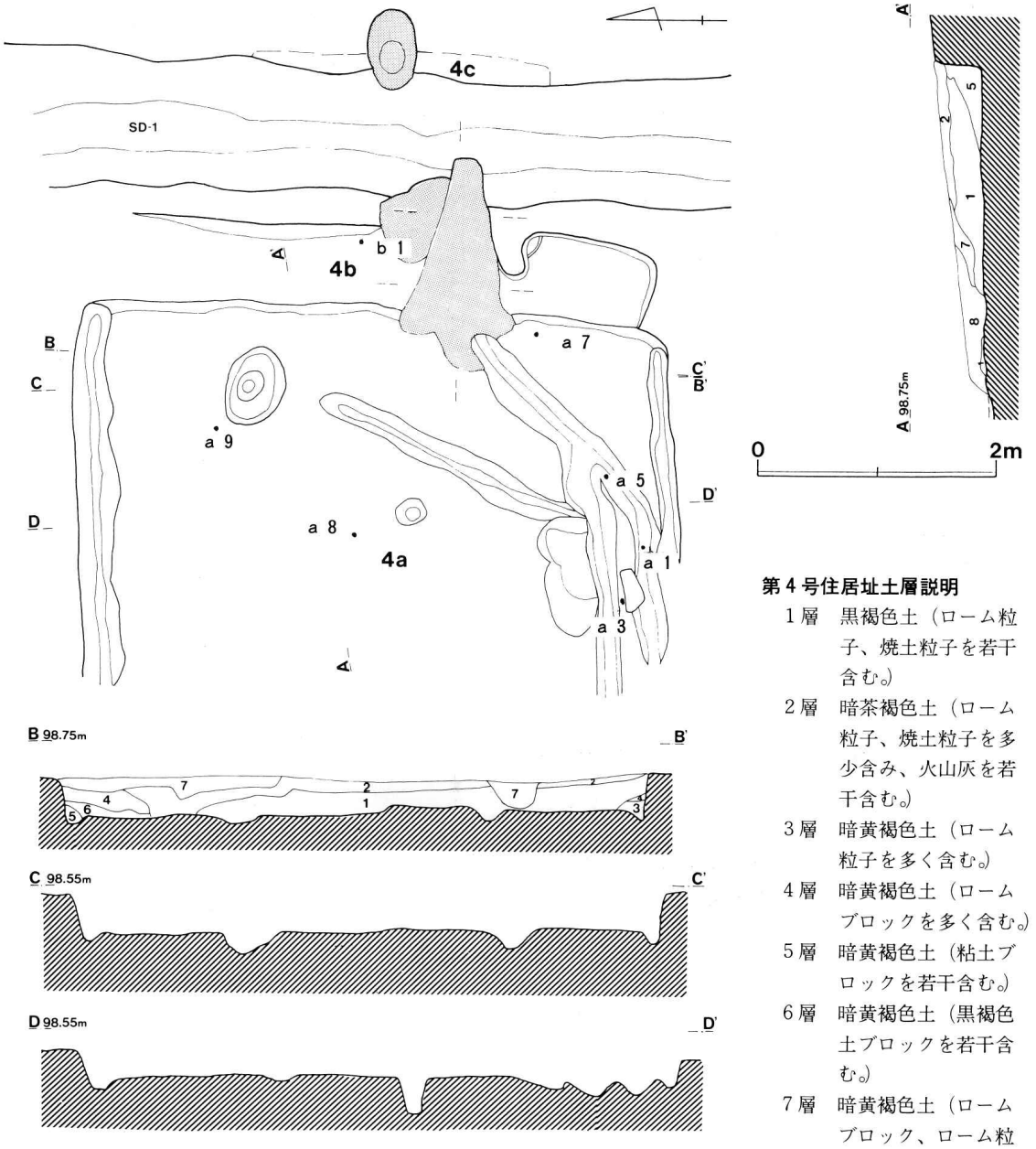
第24図　第３号住居址出土遺物

第４ａ、ｂ、ｃ号住居址（第25・26図，図版８－１・２）

第４ａ、ｂ、ｃ号住居址は、調査区北西端に位置する。３軒の住居址が切り合っているが、新旧関係は明らかでない。

４　ａ　住

第４ａ号住居址は、３軒の内で最も西に位置する。西側部分は流出しており、検出されなかった。



第４号住居址土層説明

１層　黒褐色土（ローム粒子、焼土粒子を若干含む。）

２層　暗茶褐色土（ローム粒子、焼土粒子を多少含み、火山灰を若干含む。）

３層　暗黄褐色土（ローム粒子を多く含む。）

４層　暗黄褐色土（ローム ブロックを多く含む。）

５層　暗黄褐色土（粘土ブロックを若干含む。）

６層　暗黄褐色土（黒褐色土ブロックを若干含む。）

７層　暗黄褐色土（ローム ブロック、ローム粒子を多く含む。８層より多い。）〈攪乱〉

８層　暗茶褐色土（２層より暗い。ロームブロック、ローム粒子を多く含む。火山灰を若干含む。）〈攪乱〉

第25図
第４a・d・c 号
住 居 址

規模は南北４ｍ90cm、東西３ｍ20cm以上を測り、プランは方形あるいは長方形を呈すことが予想される。主軸方位は、Ｎ―91°―Ｅを示す。

床面は、比較的平坦であり、堅固である。壁高は、東側で40cm程である。

北壁及び南壁に沿う形で、壁溝が検出されている。壁溝の幅は、北壁側が30cm程、南壁側が20cm程であり、深さはいずれも10cm前後である。

４ａ住カマド
（第26図，
図版８-2）

カマドは、東壁南寄部に設けられ、主軸方向はＮ―97°―Ｅである。焚口部は平坦な床面を利用し、燃焼部は壁を幅88cm。壁外へ130cm掘り込む。燃焼部入口付近には、２つの楕円形ピットが設けられ、カマド補強のための石材がぬかれた痕跡とも考えられる。またカマド南西部から溝が延びているがその性格は不明である。

４　ａ　住

第４ａ号住居址は、４―ａ住の東側に位置し、カマドを含む東壁と南壁の一部が検出されている。

規模は、南北４ｍ40cm以上を測り、プランについては明らかでない。主軸方位は、Ｎ―91°―Ｅを示す。

床面は平坦で堅固である。壁高は約８cmを測る。壁溝は、検出されなかった。

４　ｃ　住

第４ｃ号住居址は、４―６号住居址よりさらに東側で検出された。検出されたのは、カマドのみで、東壁はＳＤ―１による破壊を受けており検出できなかった。

４ｃ住カマド
（第26図）

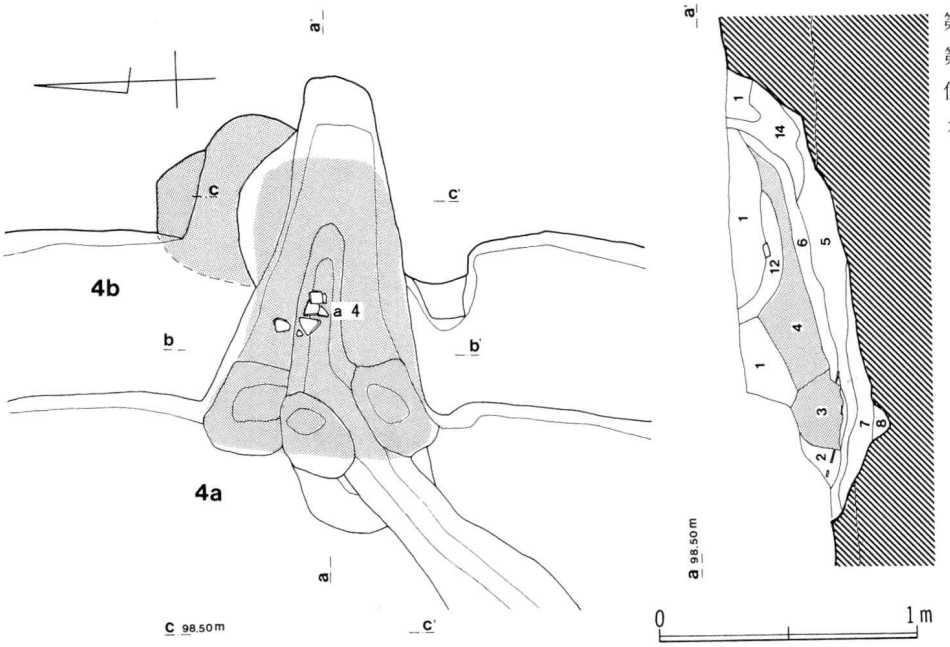
カマドは、東壁南壁に設けられ、主軸方向はＮ―90°―Ｅである。燃焼部は壁を幅41cm壁外へ長さ50cm掘り込む。焚き口部から燃焼部にかけての区別は明確でない。煙道部は不明である。

第４ｃ号住居址カマド土層説明

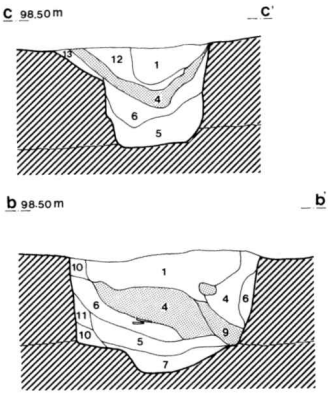
１層　赤褐色土（焼土粒を主とする。）

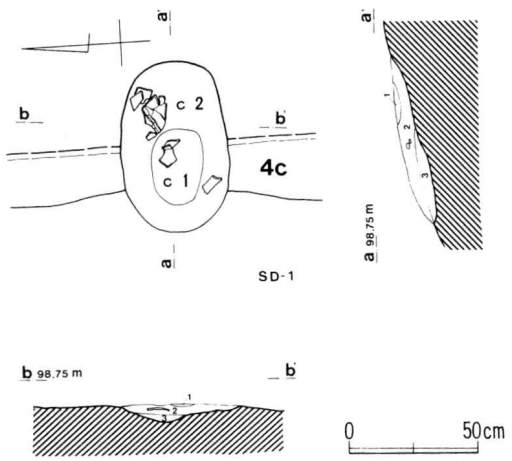
２層　黒褐色土（焼土粒とローム粒子を多く含む。）

３層　黒褐色土（焼土粒を若干含み、ローム粒子を多く含む。）



第26図
第4a、b、c号
住居址
カマド





4 a、b号住居址カマド土層説明

1層　暗褐色土（焼土ブロック、火山灰、炭化物を多少含む。粘質がなく、パサついている。）

2層　茶褐色土（ロームブロック、焼土を多く含む。粘質がなく、パサついている。）

3層　黄褐色土（ロームブロックを多く含み、粘土層、炭化物、焼土ブロック粒を多少含む。粘質があり、しまっている。）

4層　茶褐色土（炭化物、焼土、ロームブロックが多少混入された粘土質の土層である。）

5層　黒色土（焼土、炭化物を多く含む。粘質がなく湿っている。）

6層　赤燈色土（硬質な焼土層）

7層　茶褐色土（焼土、炭化物、ロームブロック、粘土ブロックを多く含んみ粘質に富む。）

8層　灰黒色土（いわゆる灰の層で、炭化物、焼土を混入する。粘質はなく湿っている。）

※　a－a′セクションでは、一部しかかからないが、カマド前の小ピット内のものである。

9層　灰褐色土（粘質があり、しまっている。純度の高い粘土である。）

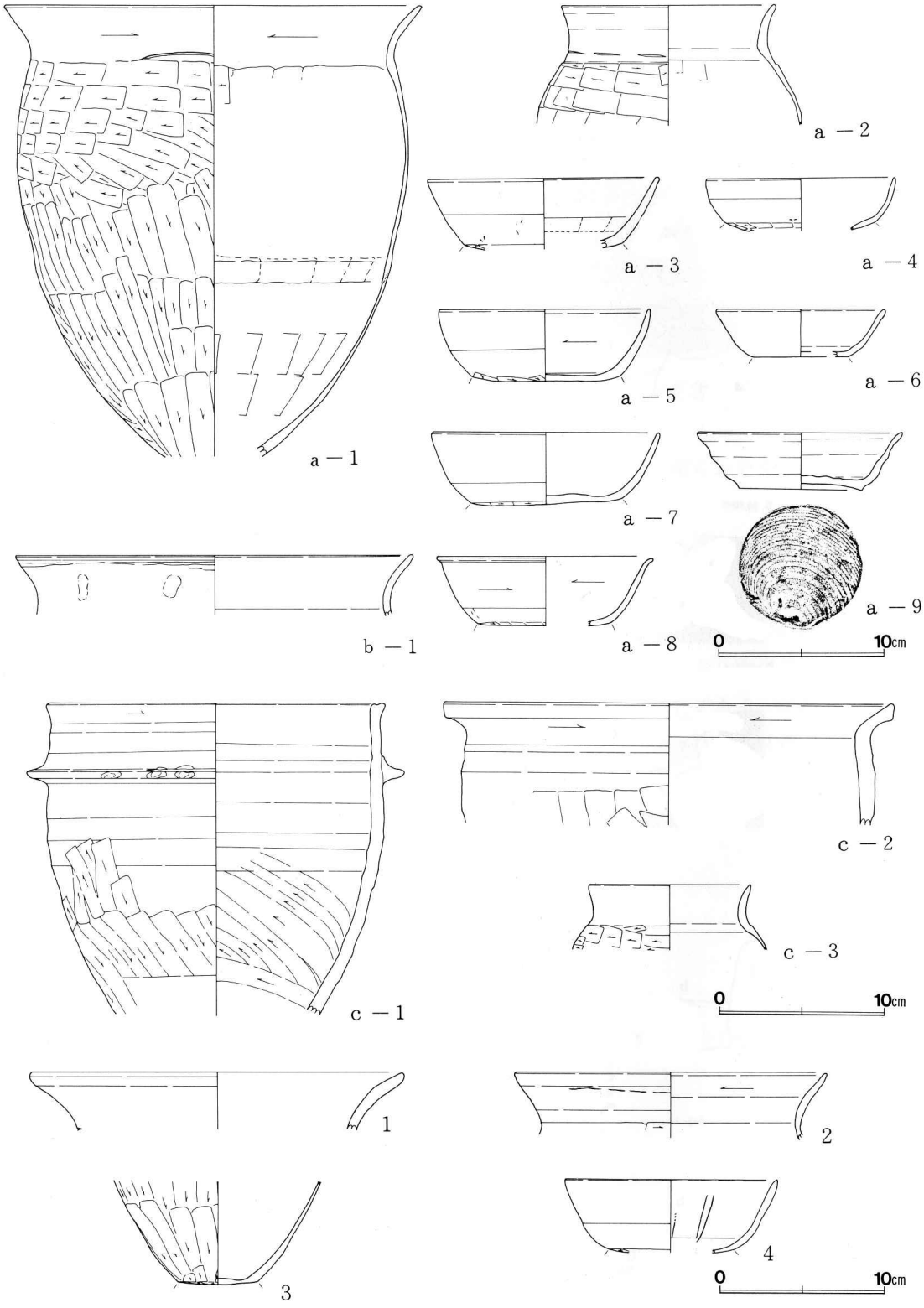
10層　黄褐色土（ソフトローム土層）

11層　暗赤燈色土（比較的軟質の焼土）

12層　暗黄褐色土（ロームブロックを多量に含み、粘質がない。炭化物、焼土を多少含む。ロームブロック以外の点では1層と同じ。）

13層　茶褐色土（ロームブロック、焼土ブロックを多少含む。粘質がなくパサついている。）

14層　暗赤燈褐色土（粘土ブロック、焼土ブロック、炭化物の混入土層で粘質なくパサつく。）



第27図　第４ａ・ｂ・ｃ号住居址出土遺物

第５号住居址（第29図，図版9—1・2）

５号住居址は、調査区中央部の緩斜面上に位置する。住居址の北側には、12号住居址が２ｍ程の所に近接している。

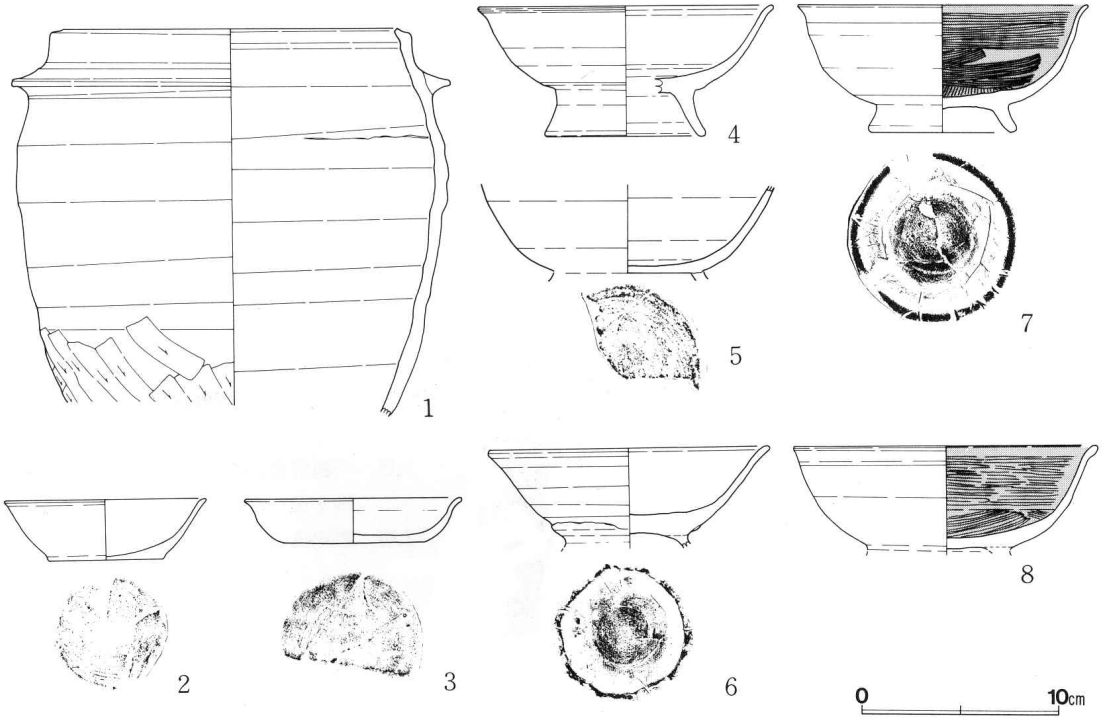
規模は、南北2.6ｍ、東西2.7ｍを測り方形に近いプランを呈している。主軸は、N—103°—Eを示す。

床面は、西に傾斜しており、その比高差は30cm程である。壁高は、面側で15cmを測る。

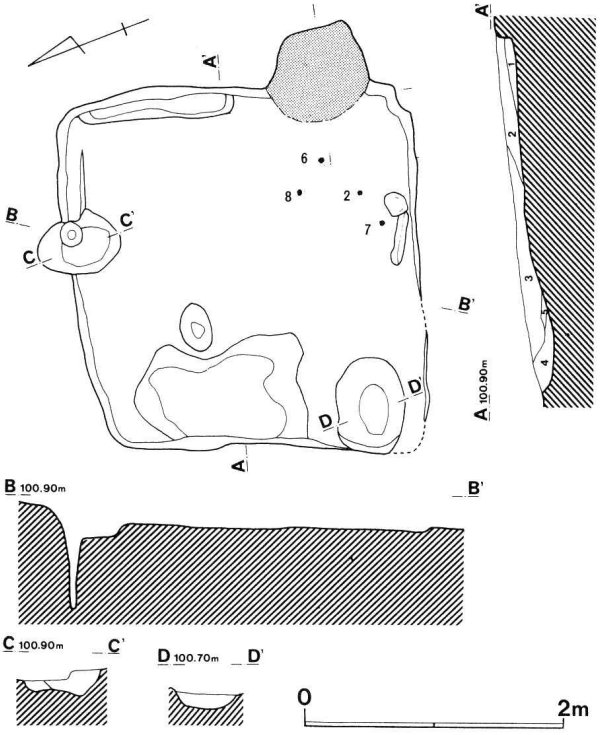
壁溝は、東壁カマド左側及び、北壁東半に沿う形で検出されている。柱穴など住居址に確実に伴なう遺構の検出はない。

カマド（第29図，図版９-2）

カマドは東壁南寄部に設けられ、主軸方向はN—126°—Wである。燃焼部は壁を幅50cm、壁外へ長さ72cm掘り込む。焚き口部付近には径25cmの円形ピットを設け、両端に石を配する。支脚は燃焼部中央付近に設置されている。

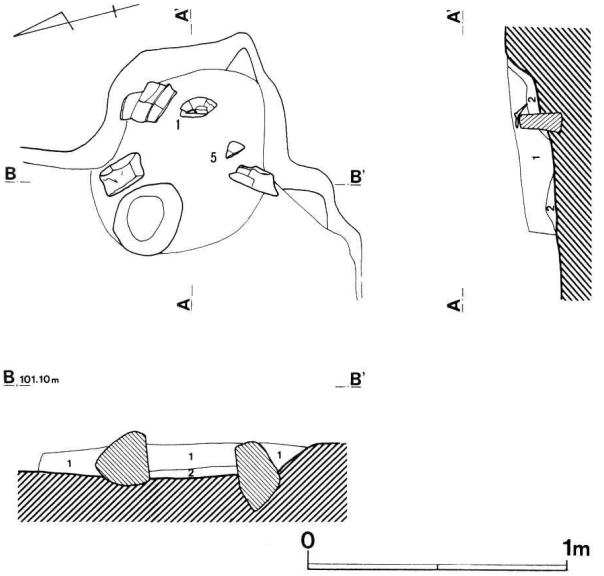


第28図　第５号住居址出土遺物



第５号住居址土層説明

１層　暗茶褐色土（粘質・焼土粒子・ローム粒子を若干含む。）
２層　暗茶褐色土（１層よりも明るく焼土粒子・ローム粒子を多く含む。）
３層　暗茶褐色土（２層よりさらに明るい。焼土粒子・火山灰を若干含みローム粒子・ブロックを多く含む。）
４層　暗黄褐色土（ローム粒子を多く含む。）
５層　暗黄褐色土（暗茶褐色土・ロームブロックを主体とする。）



第５号住居址カマド土層説明

１層　茶褐色土（小さな焼土ブロック・炭化物を多く含む。）
２層　黒褐色土（焼土粒子及び炭化物を若干含む。）

第29図　第５号住居址およびカマド

第６号住居址（第30・31・32・33・34図，図版10－１・２）

６号住居址は、調査区中央部の緩斜面上に位置する。北側には、１ｍ程の間隔をもって２号住居址がある。

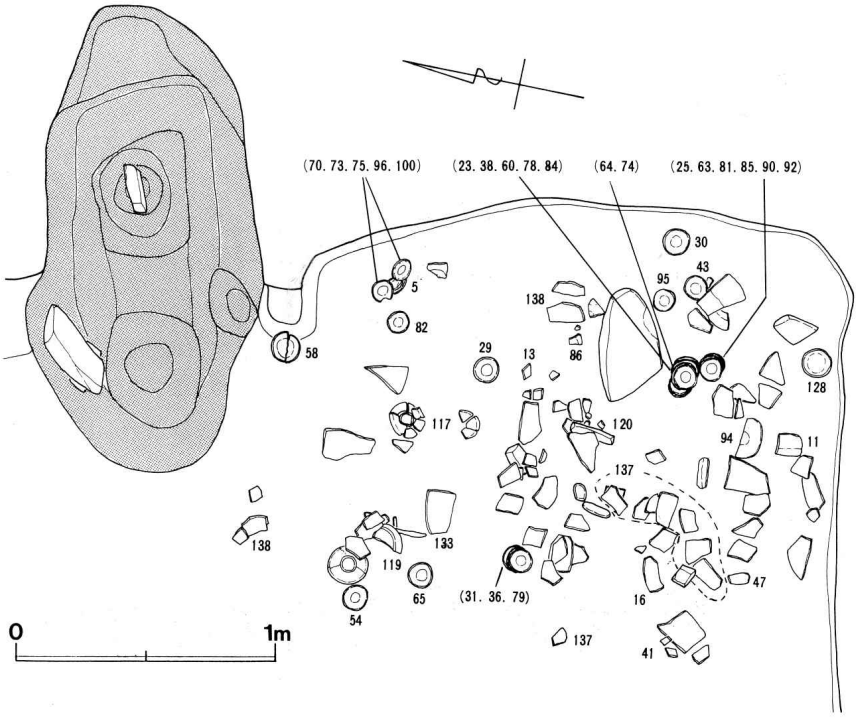
規模は、東西7.5ｍ、南北6.4ｍ程でありプランは、東西に長い長方形を呈している。カマドの左側には、２号住居址と同様な張り出しを有し、東西に80cm、南北に2.8ｍを側る。主軸は、Ｎ―79°―Ｅを示す。

床面は、西に傾斜しており、比高差40cmを測る。壁高は、東西で25cm、西側で10cm程である。

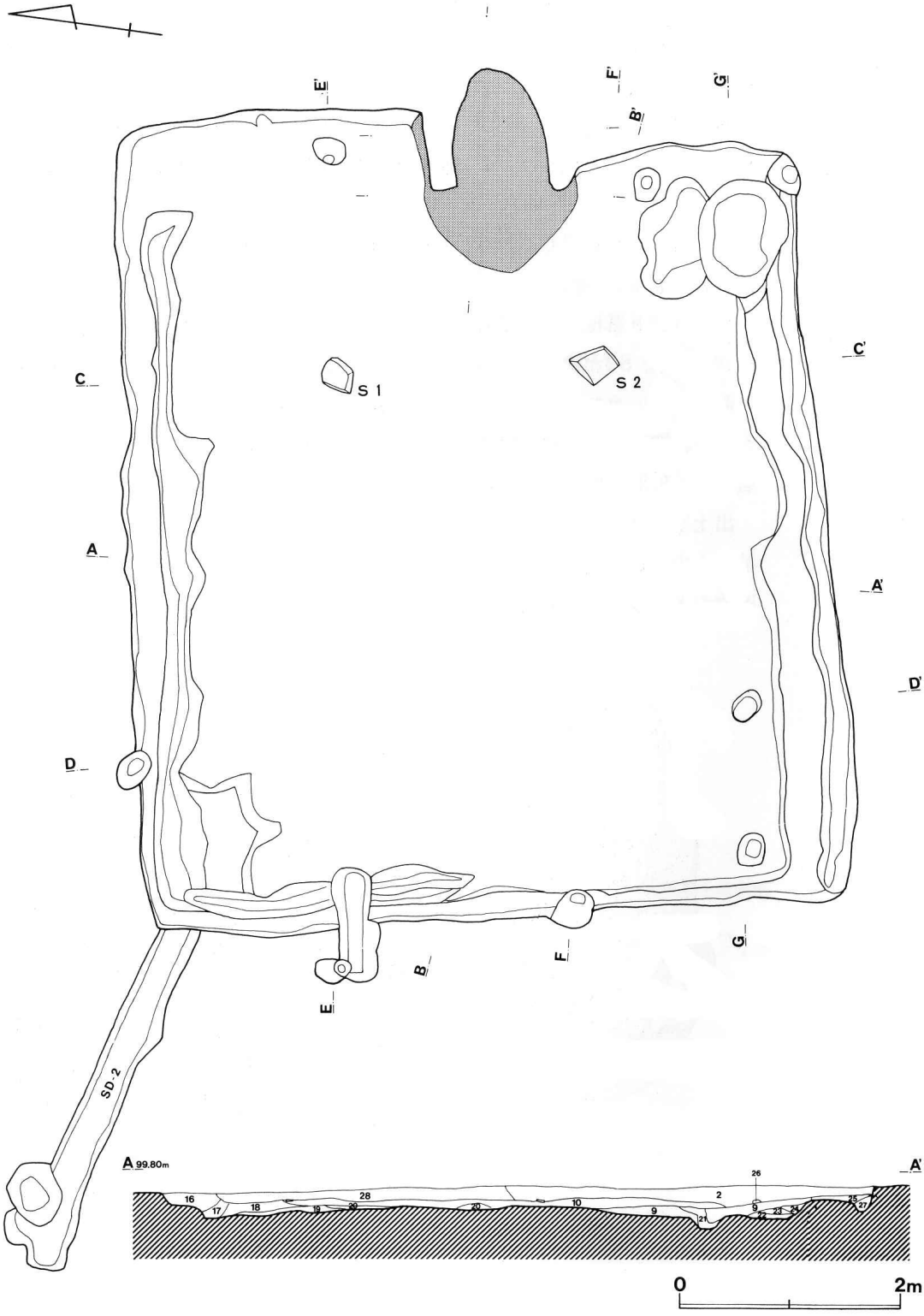
柱穴は、８基検出されており、何れも支柱穴である。主柱穴は検出されていないが、Ｓ1とＳ2が礎石とすれば、主柱は、床面上に据えられたと考えられる。

貯蔵穴は、カマド右側に検出され、規模は、長径1.1ｍ、短径0.8ｍ、深さ0.2ｍを測る。壁高は、北壁、南壁及び西壁に見られ、さらに、北西コーナー部から住居址外へ3.3ｍ伸びており、排水溝と考えられる。

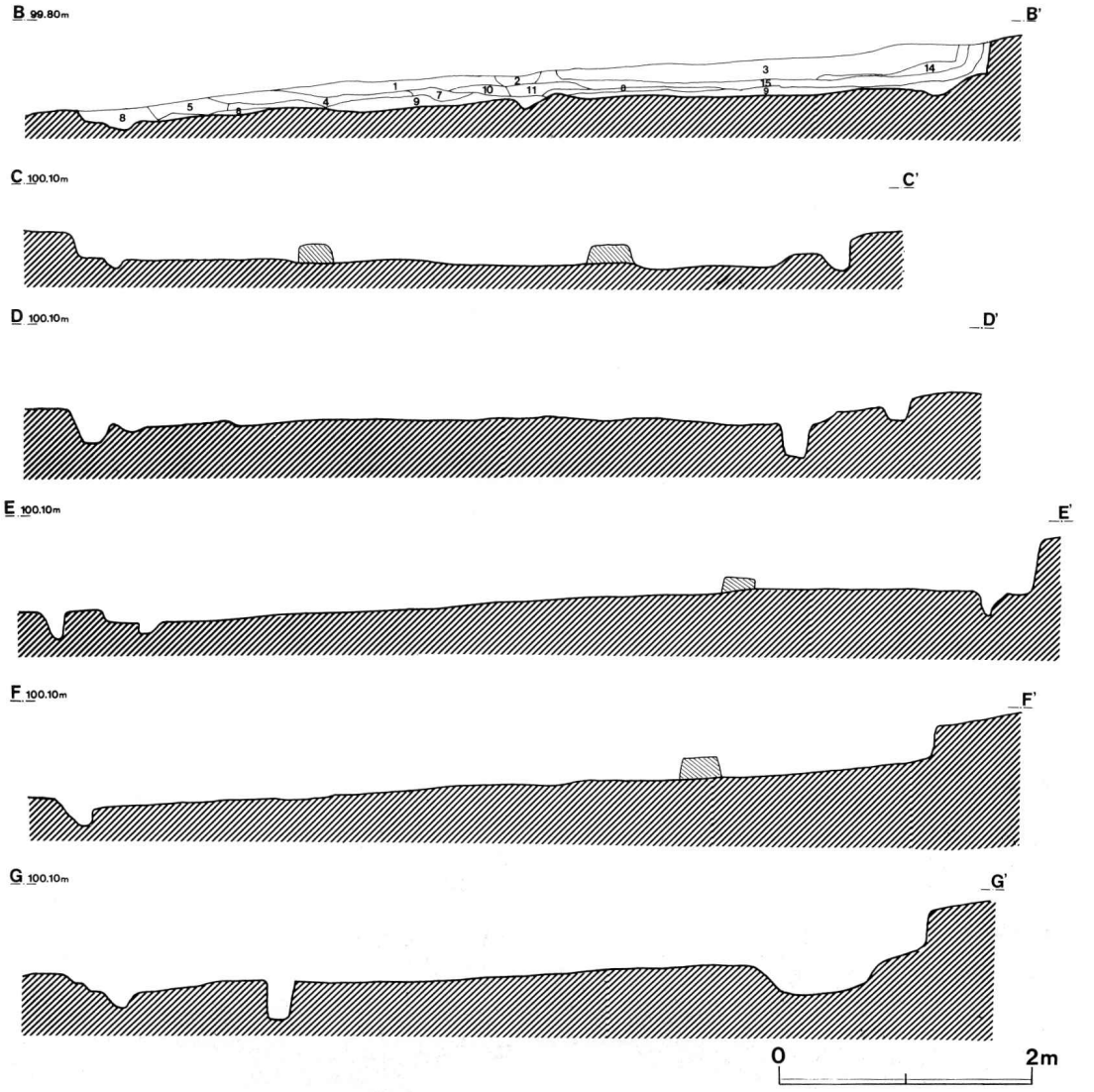
出土土器は、カマド右側の貯蔵穴付近に集中して見られ、完形品が多い。住居址覆土中に炭化物が多く見られることから焼失住居であることが想定でき、出土遺物の多くは、現状を留めたものとすることができる。



第30図　第６号住居址出土遺物分布図(遺物集中地区)



第31図　第６号住居址

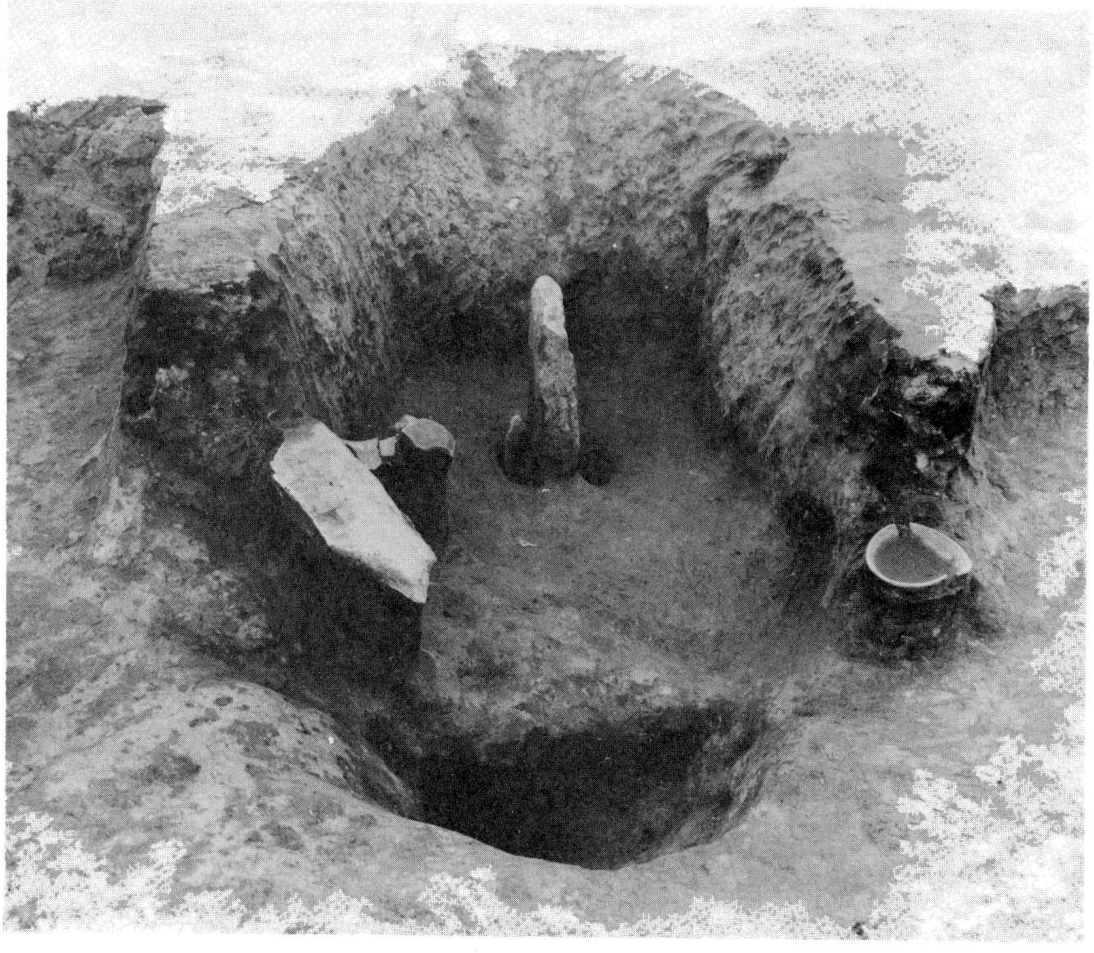


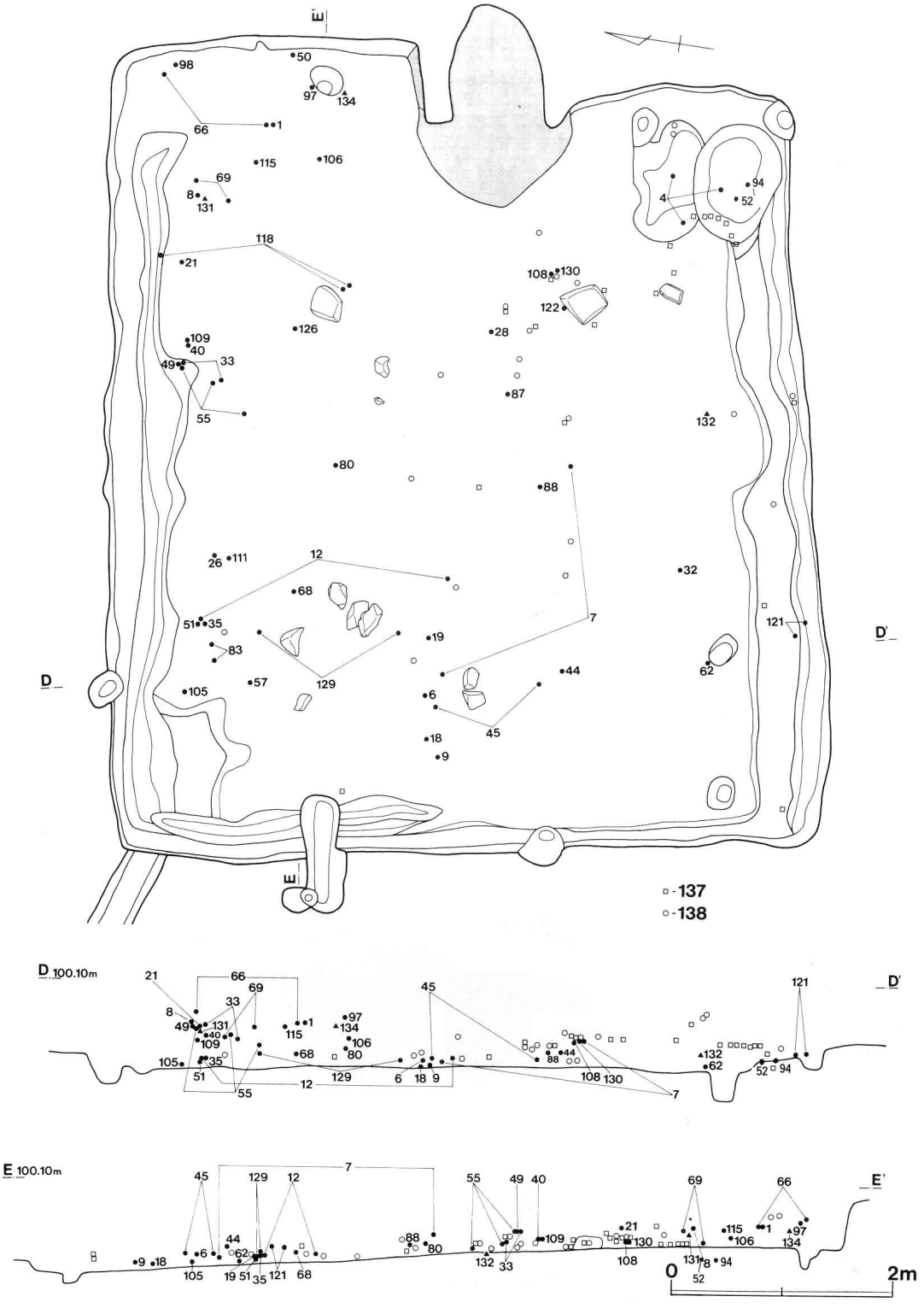
第32図　第６号住居址断面図

第６号住居址土層説明

1層　茶褐色土（焼土粒、炭化物粒を含む。）
2層　茶褐色土（焼土粒、炭化物粒を含み、１層や３層よりやや暗色を呈す。）
3層　茶褐色土（焼土粒、炭化物粒を含み、やや粘性がある。）
4層　黒色土（炭化物を多量に含み、軟質である。）
5層　茶褐色土
6層　暗黄褐色土（焼土ブロックを多く含み、やや粘性がある。）
7層　黒褐色土（ローム粒を多く含み、焼土粒を若干含む。）
8層　暗黄褐色土（ロームブロックを多く含む。）
9層　黄褐色土（ロームブロックを多く含む。）
10層　黒褐色土（焼土ブロックを含み、炭化物を多く含む。）
11層　暗茶褐色土（焼土粒を多く含む。）
12層　暗茶褐色土（焼土粒、炭化物粒を多く含む。）

13層　茶褐色土（焼土粒を多く含み、粘性がある。）
14層　黒褐色土（焼土粒、炭化物粒を多く含み、粘性が非常に強い。）
15層　灰色土（焼土を多く含み、粘性が非常に強い。）
16層　暗黄褐色土（焼土ブロックを含む。ローム粒を多量に、炭化物を若干含む。）
17層　暗茶褐色土（ロームブロック、焼土粒を若干含む。）
18層　暗黄褐色土（ロームブロックを多く含む。）
19層　黄褐色土（ロームブロックを多く含む。）
20層　暗黄褐色土（焼土、炭化物を多く含む。）
21層　暗茶褐色土（炭化物ブロックを含み、やや粘性がある。）
22層　暗黄褐色土（ロームブロックを含み、炭化物粒を若干含む。）
23層　黒褐色土（焼土粒を若干含む。）
24層　暗黄褐色土（ローム粒を多量に含み、炭化物粒、焼土粒を若干含む。）
25層　暗黄褐色土（炭化物ブロック、焼土ブロックを若干含む。）
26層　黒褐色土（炭化物を多量に含む。）
27層　暗黄褐色土（焼土粒、炭化物粒を若干含む。）
28層　暗茶褐色土（焼土ブロック、炭化物粒をきわめて多量に含む。）

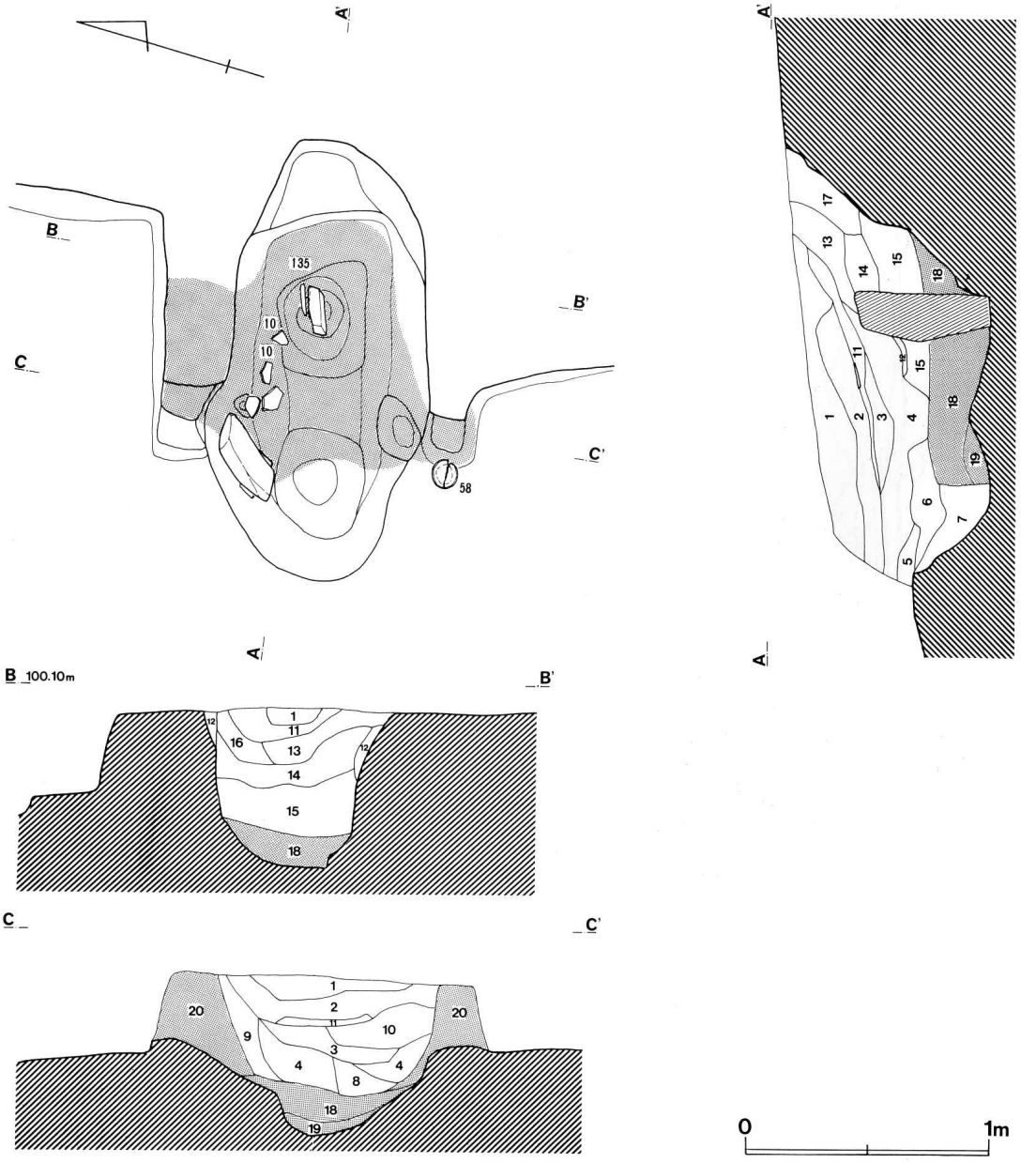




第33図　第６号住居址出土遺物分布図

カマド
(第34図,
図版10-2)

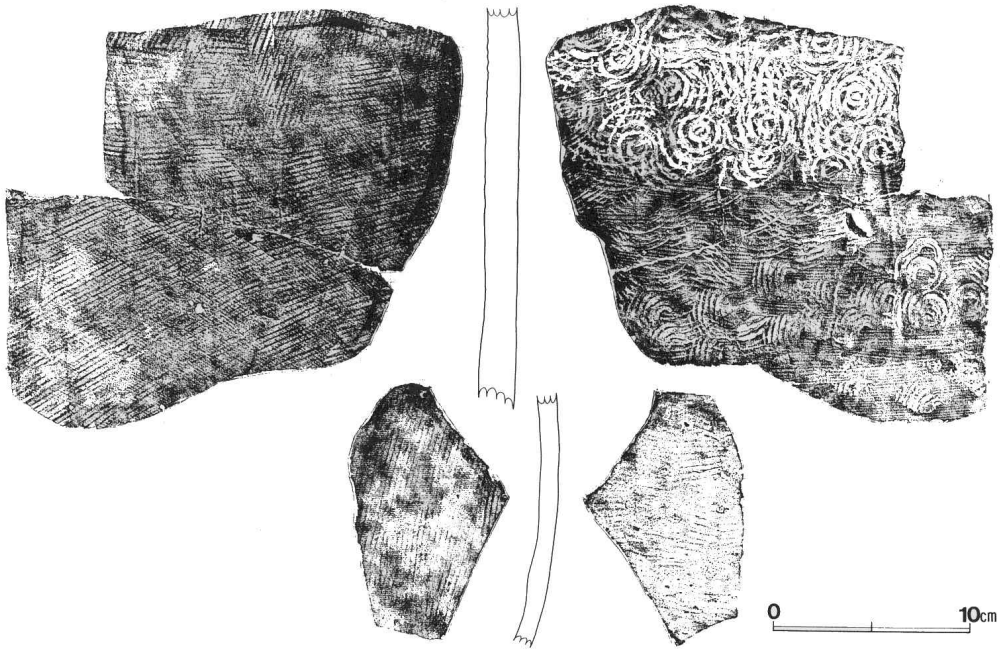
カマドは東壁中央部に設けられ、主軸方向はN—74°—Eである。燃床部は壁を幅94cm、壁外へ長さ120cm掘り込む。焚き口部には、径47cm深さ30cmのピットを設ける。袖は壁を北側97cm、南側30cm削り出し、その上に暗赤褐色の粘土が貼られる。支脚は燃床部東端に設置され、灰褐色粘土により固定される。煙道部は不明である。



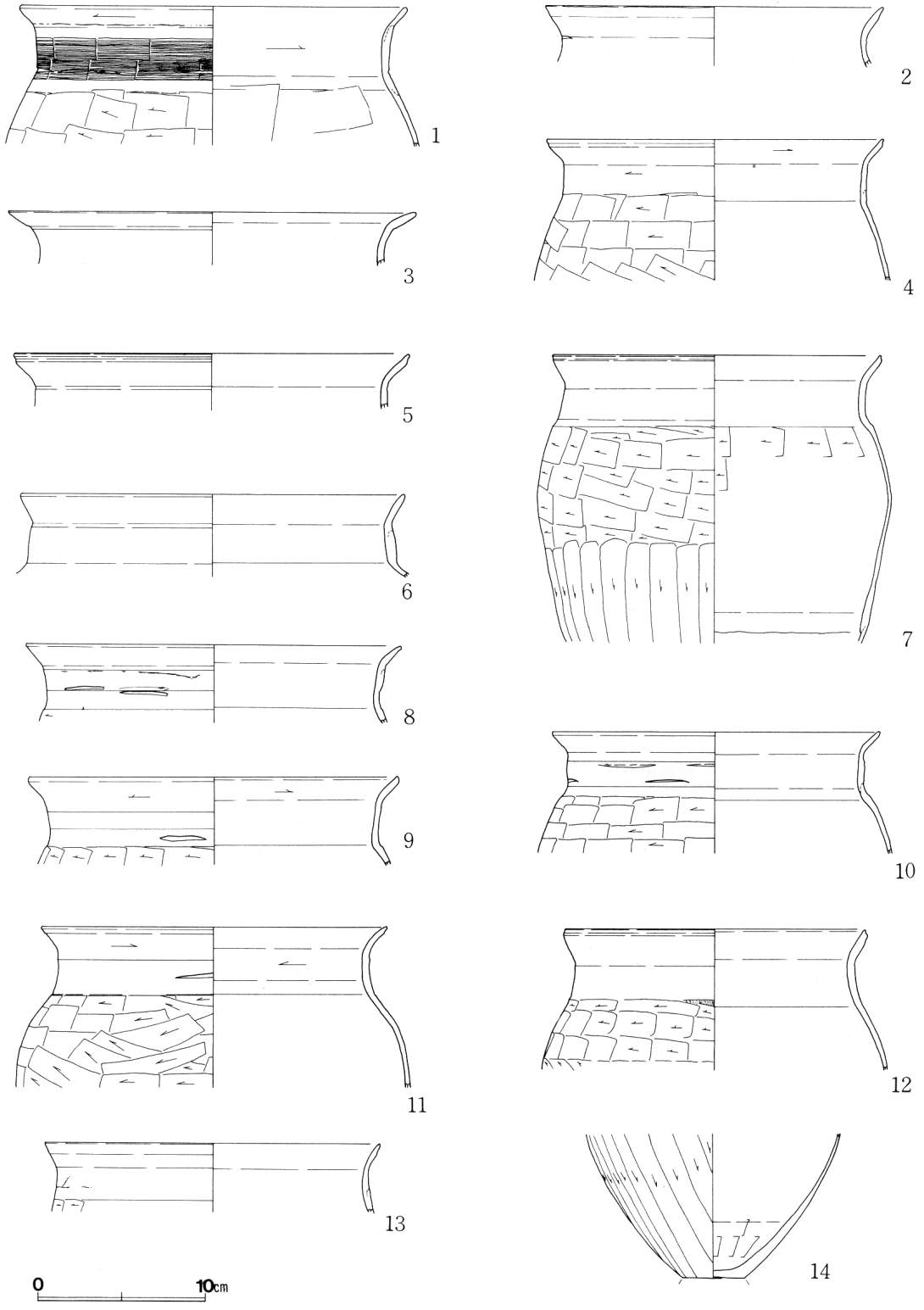
第34図　第6号住居址カマド

第６号住居址カマド土層説明

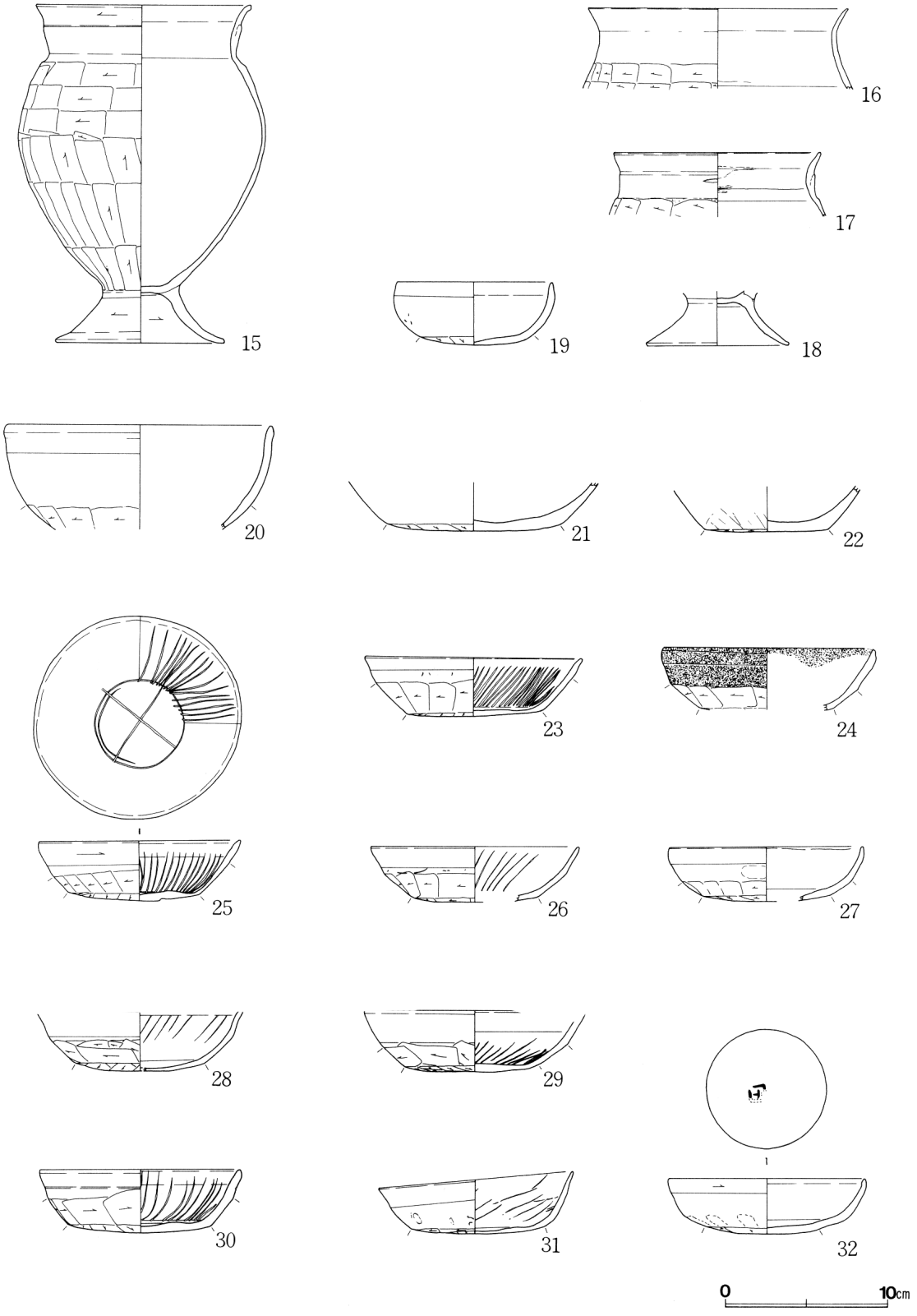
１層　暗褐色土（火山灰、焼土、粘土、炭化物を含む層で、しまっている。）
２層　茶褐色土（焼土ブロックを多く含み、炭化物を多少含む。やや粘質がある土層である。）
３層　灰褐色土（炭化材のブロックを多く含み、焼土粘土ブロックを含む。粘質があり、しまっている。）
４層　黒褐色土（炭化物、焼土ブロックを多少含み、粘土ブロックを多少含む。３層より粘質がなく、パサついている。）
５層　灰色土（粘土層であり、焼土を多少含む。）
６層　灰黒色土（炭化物と灰を主体とする土層で焼土をやや含み粘質なくパサついている。）
７層　灰黒色土（灰を主体とし、ローム粒、ロームブロックを多く含む。粘質がなくパサついている。）
８層　灰褐色土（粘土を主体とする土層で炭化物、焼土を含む。粘質がありしまっている。）
９層　暗赤褐色土（焼土を多量に含み、炭化物を多少含む。やや粘質がありしまっている。）
10層　暗褐色土（焼土、炭化物の小ブロックを多く含み、比較的粘土質の土層で、ややしまっている。）
11層　黒褐色土（炭化物を多く含む層で、焼土を多少含む。やや粘質がありしまっている。）
12層　赤燈色土（固い焼土層）
13層　明黒褐色土（焼土、炭化物の小ブロックを多少含む。やや粘質がありしまっている。）
14層　明赤褐色土（焼土ブロック粒を比較的多く含み、炭化物を多少含む。粘質があり、しまっている。）
15層　灰褐色土（焼土、炭化物、ロームを含み、灰を比較的多く含む。やや粘質があり、パサついている。）
16層　暗赤橙色土（焼土層で、粘質があり堅くない。）
17層　赤橙色土（堅い焼土ブロックを多く含み炭化物を多少含む。粘質がなくしまっている。）
18層　灰褐色土（焼土の小ブロックを少量含む粘土層。）
19層　灰黒色土（焼土ブロックを多量に含む。粘質なく、しまりがない。）
20層　暗赤褐色土（炭化物、焼土、ローム粒を少量含む。粘質があり、しまっている。）



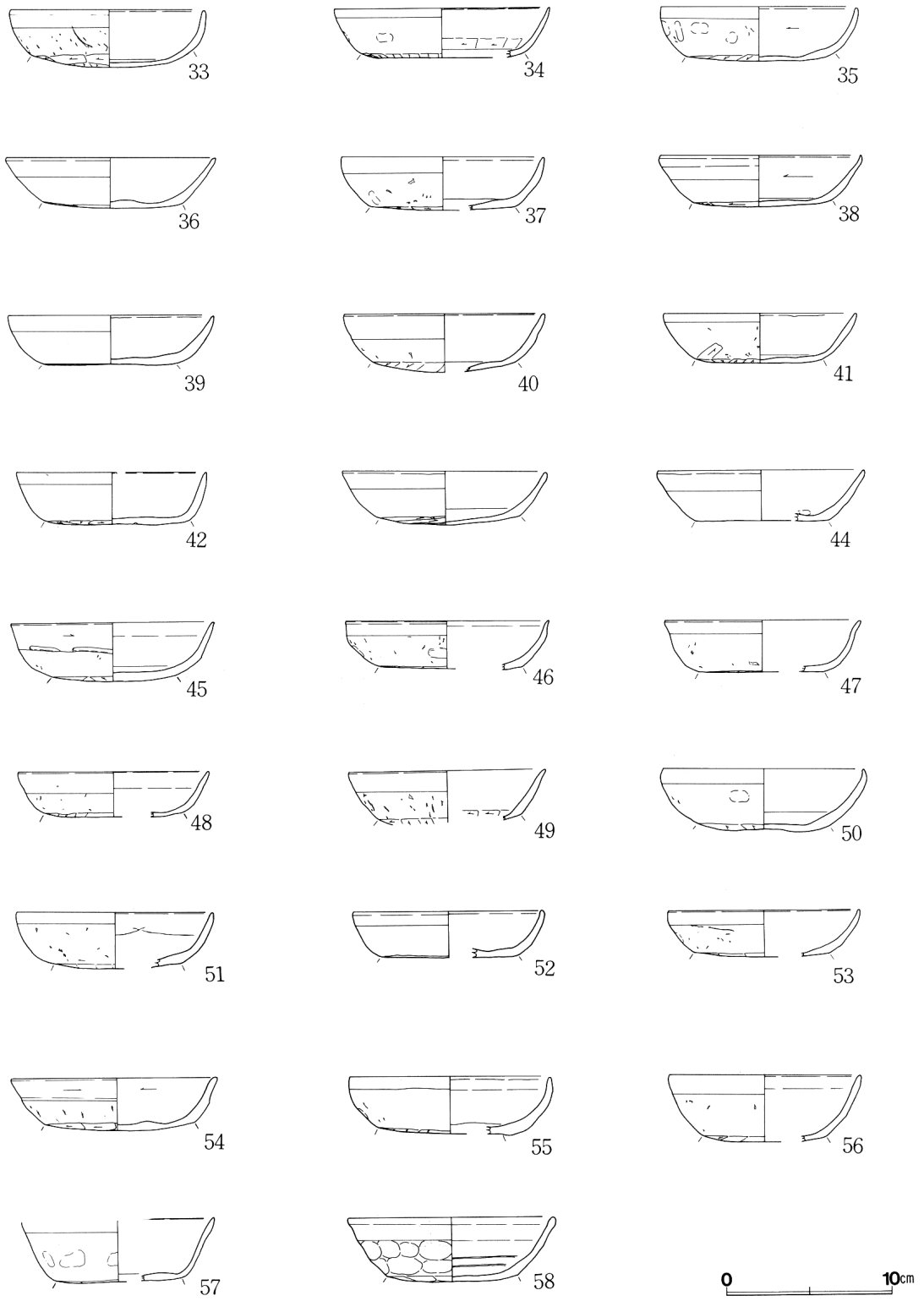
第35図　第６号住居址出土須恵器大型広口壺破片拓影図



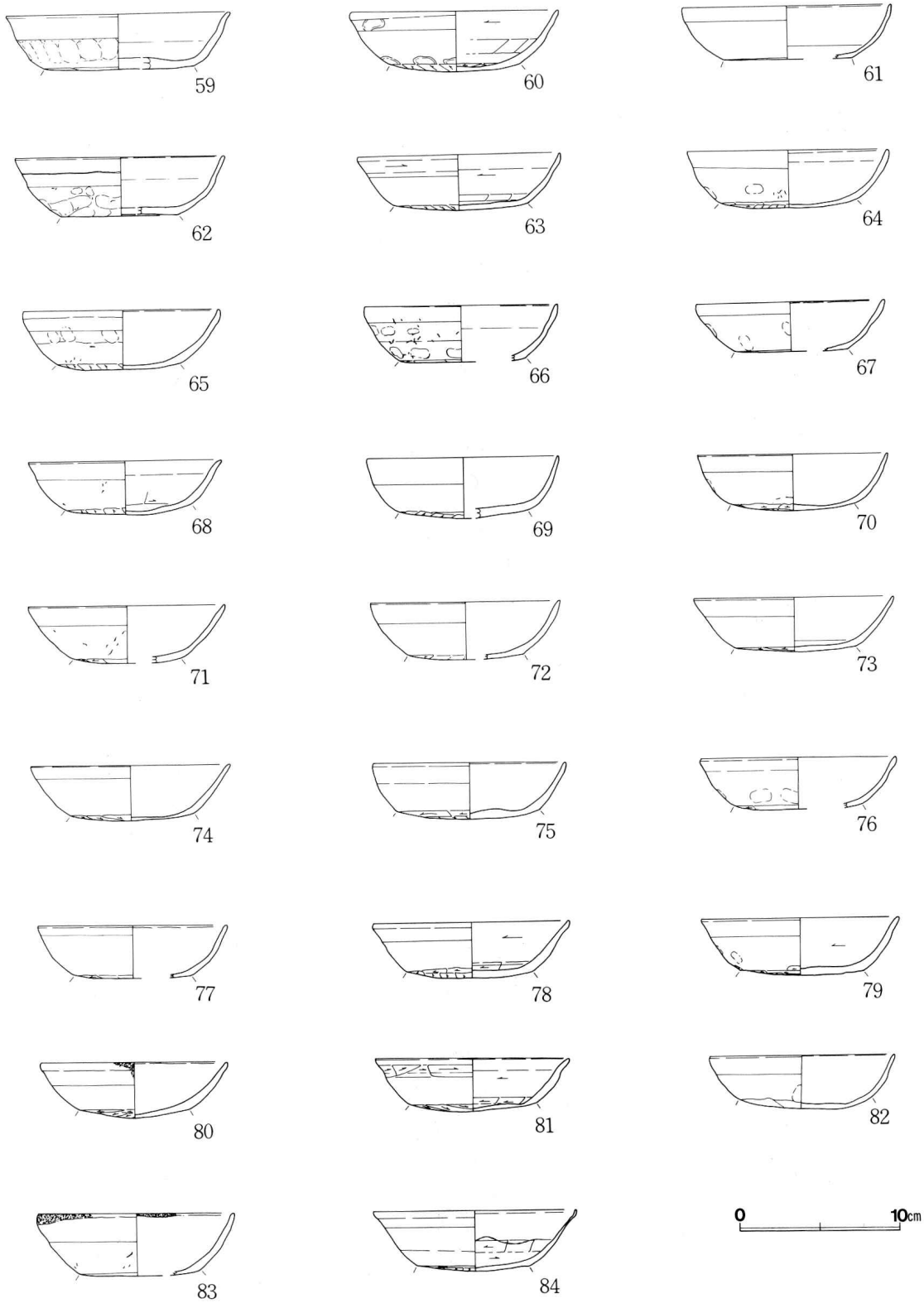
第36図　第６号住居址出土遺物(１)



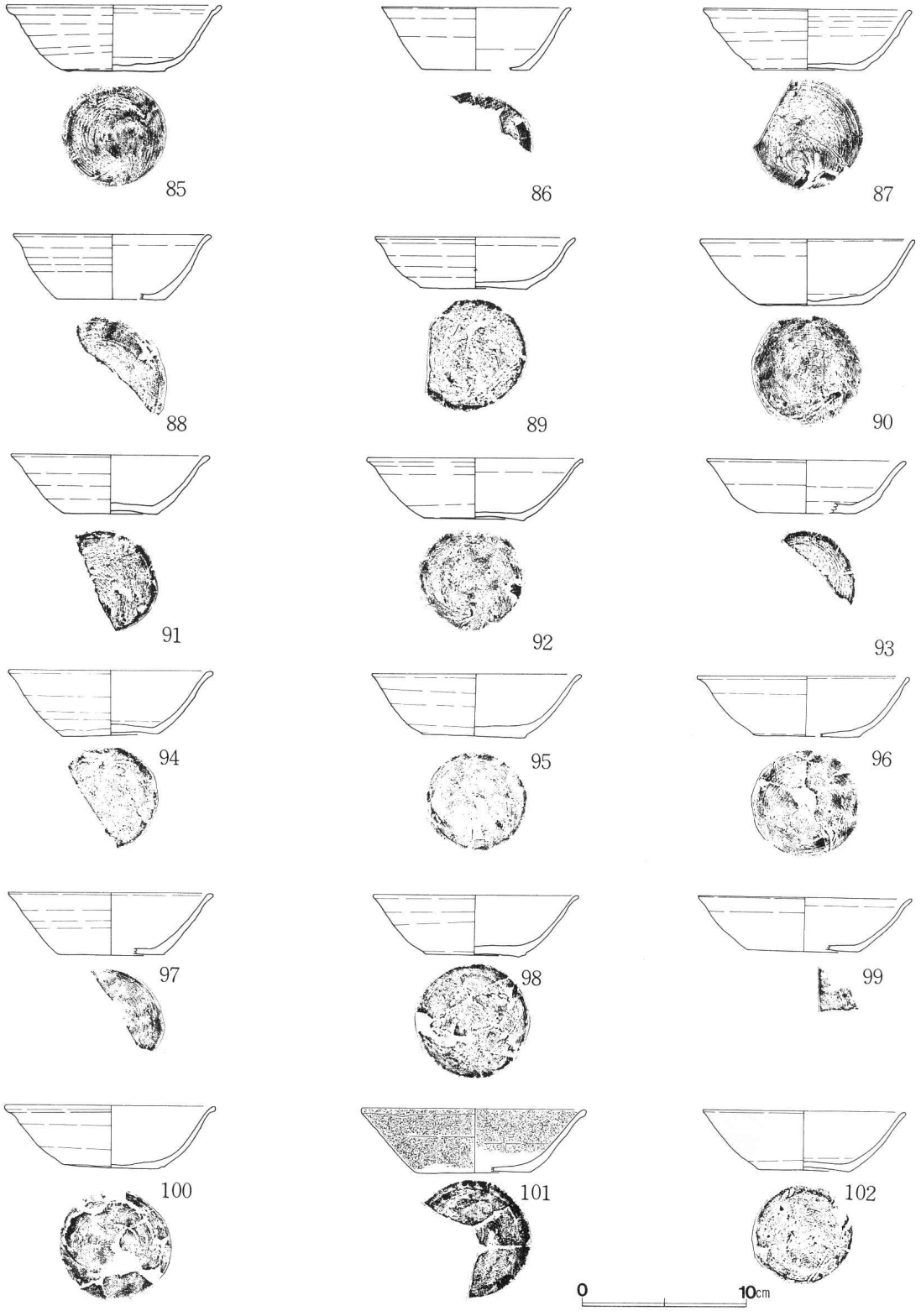
第37図　第６号住居址出土遺物（２）



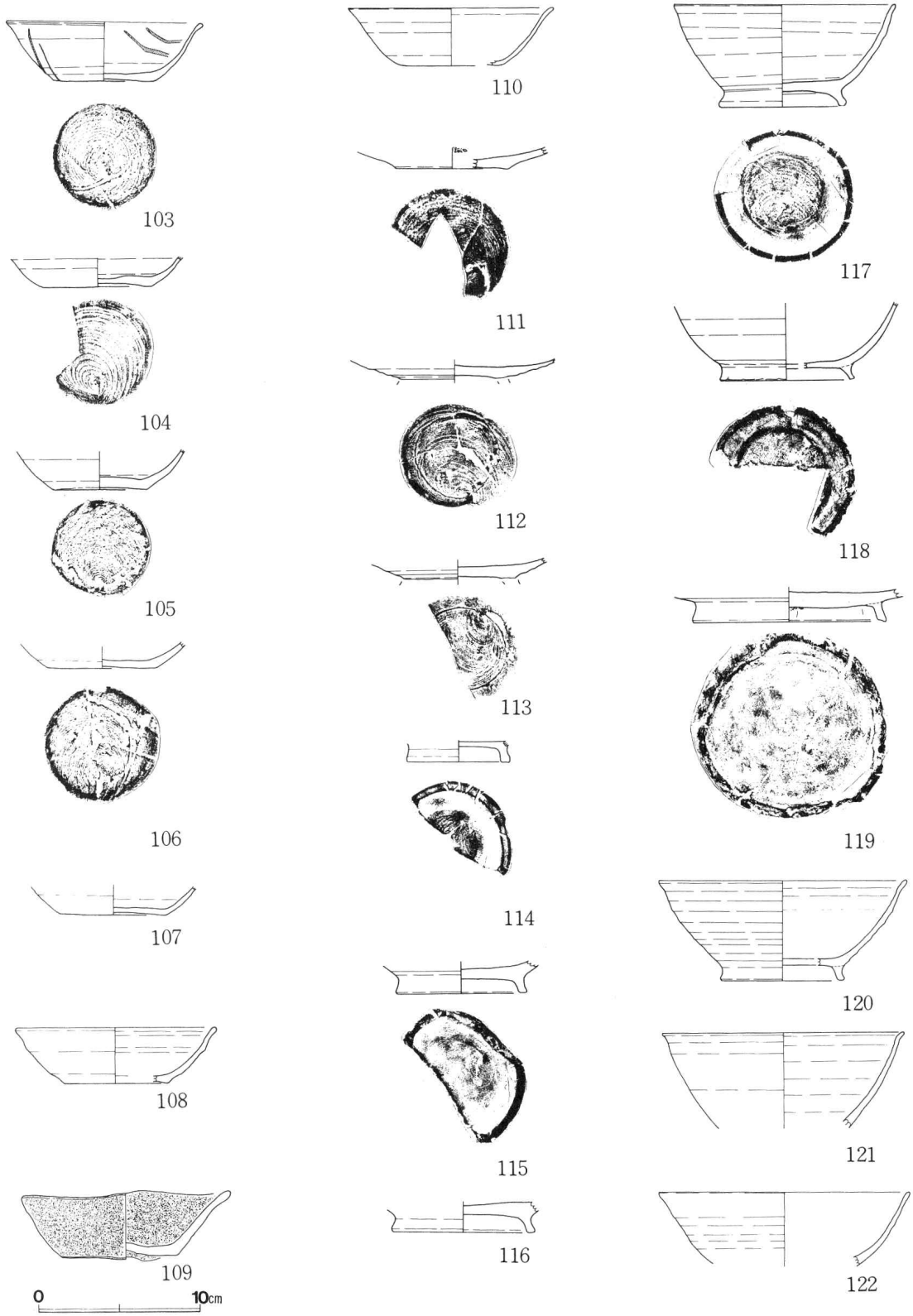
第38図　第６号住居址出土遺物（３）



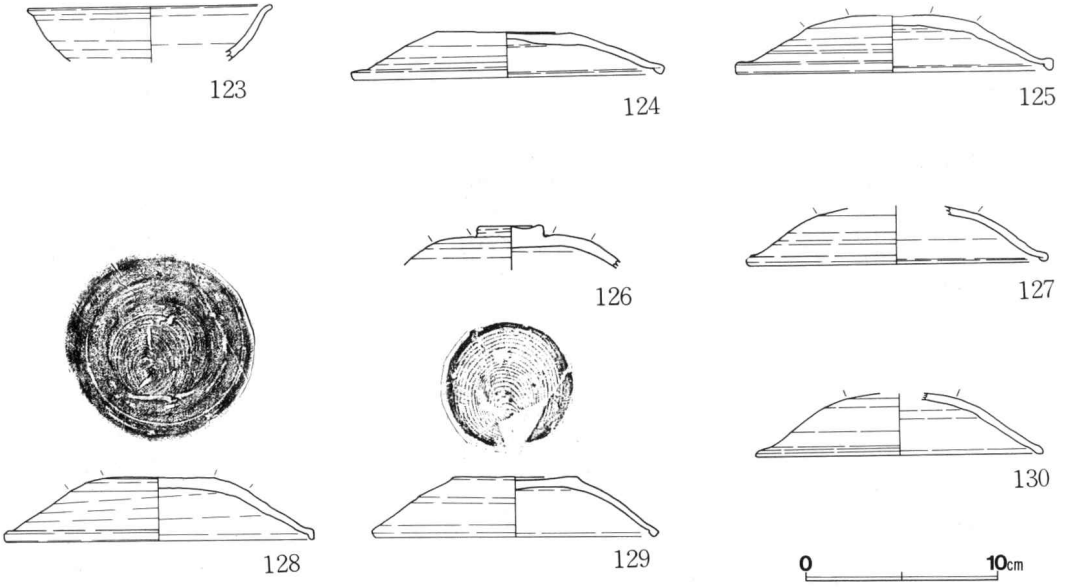
第39図　第６号住居址出土遺物（４）



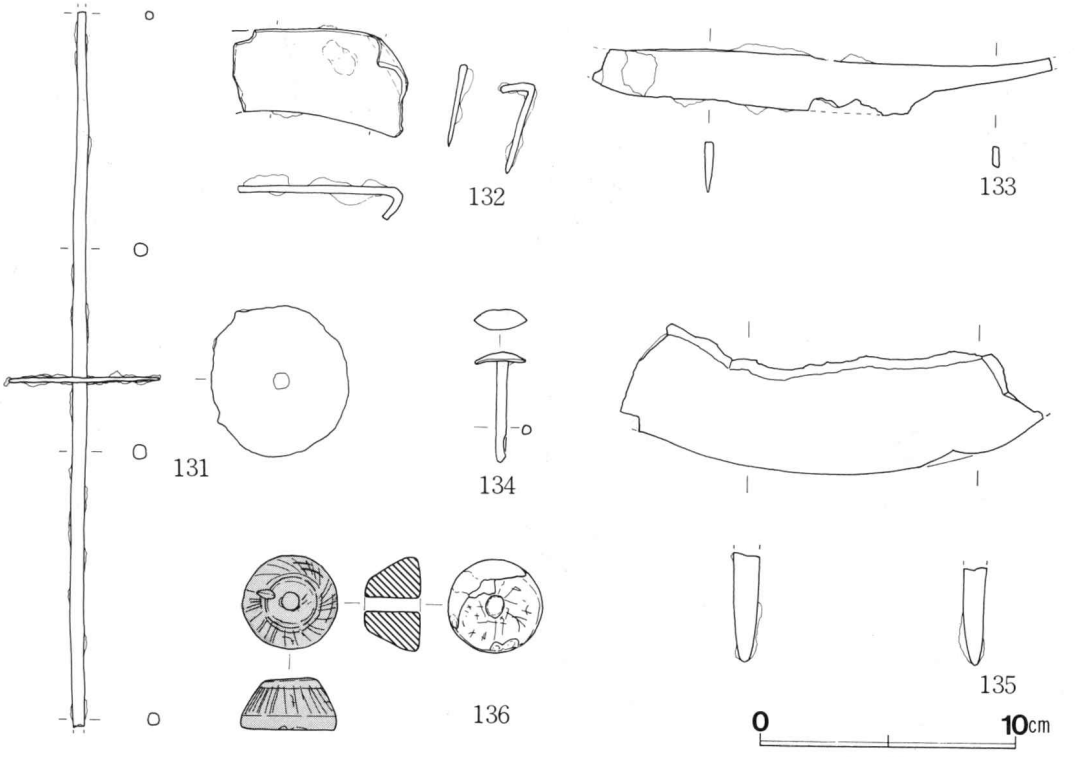
第40図　第６号住居址出土遺物（５）



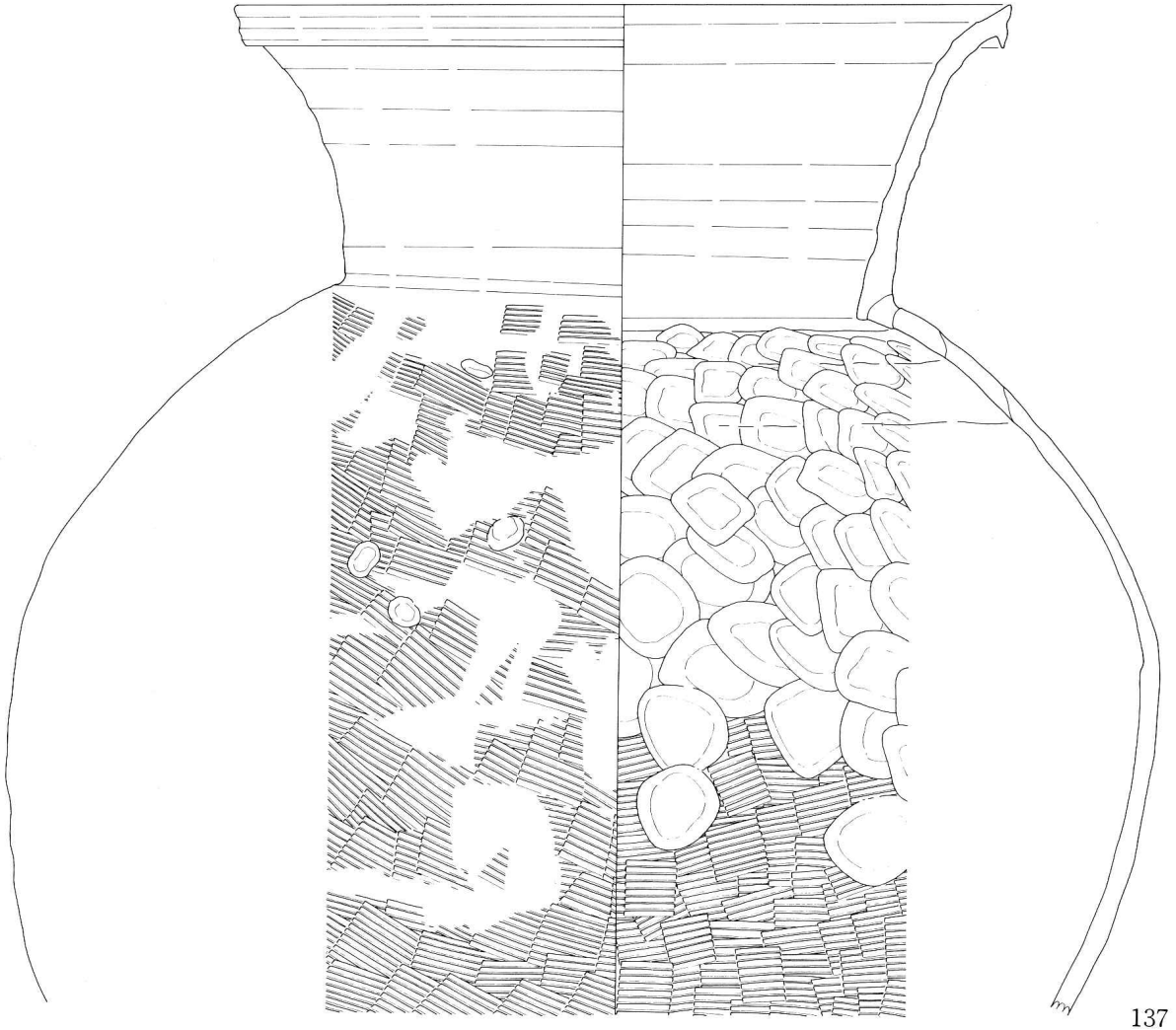
第41図　第６号住居址出土遺物（６）



第42図　第６号住居址出土遺物（７）



第43図　第６号住居址出土遺物（８）

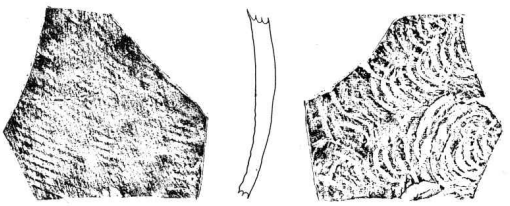


第44図　第６号住居址出土須恵器大型広口壺(１)

138

0 10cm

第45図　第６号住居址出土須恵器大型広口壺（２）



0 10cm

第46図
第７号住居址出土
須恵器大型広口壺破片

第７号住居址（第48・49図 図版13―１・２）

７号住居址は、調査区西端の斜面上に位置する。西側過半は、流失しており検出されない。

規模は、南北2.8m を測り、プランは方形を呈している。主軸は、N―84°―E を示す。

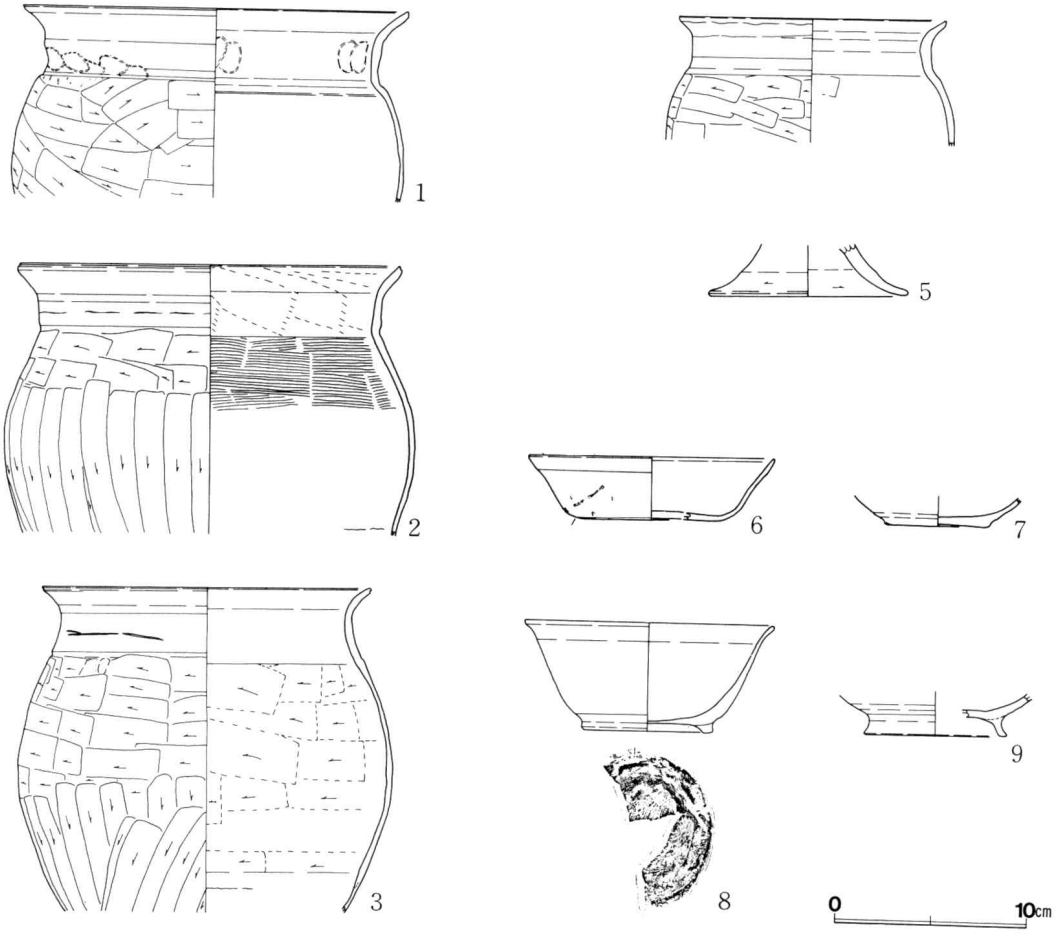
床面は、西に傾斜しており20cm以上の比高差を測る。壁高は東側で55cmを測る。

主柱穴は３基検出されており、床面からの深さは、30～40cmを測る。床面北西隅ピット内から検出された石及びその60cm東から検出された石は、礎石となることが考えられる。支柱穴は壁にそう形で検出されている。

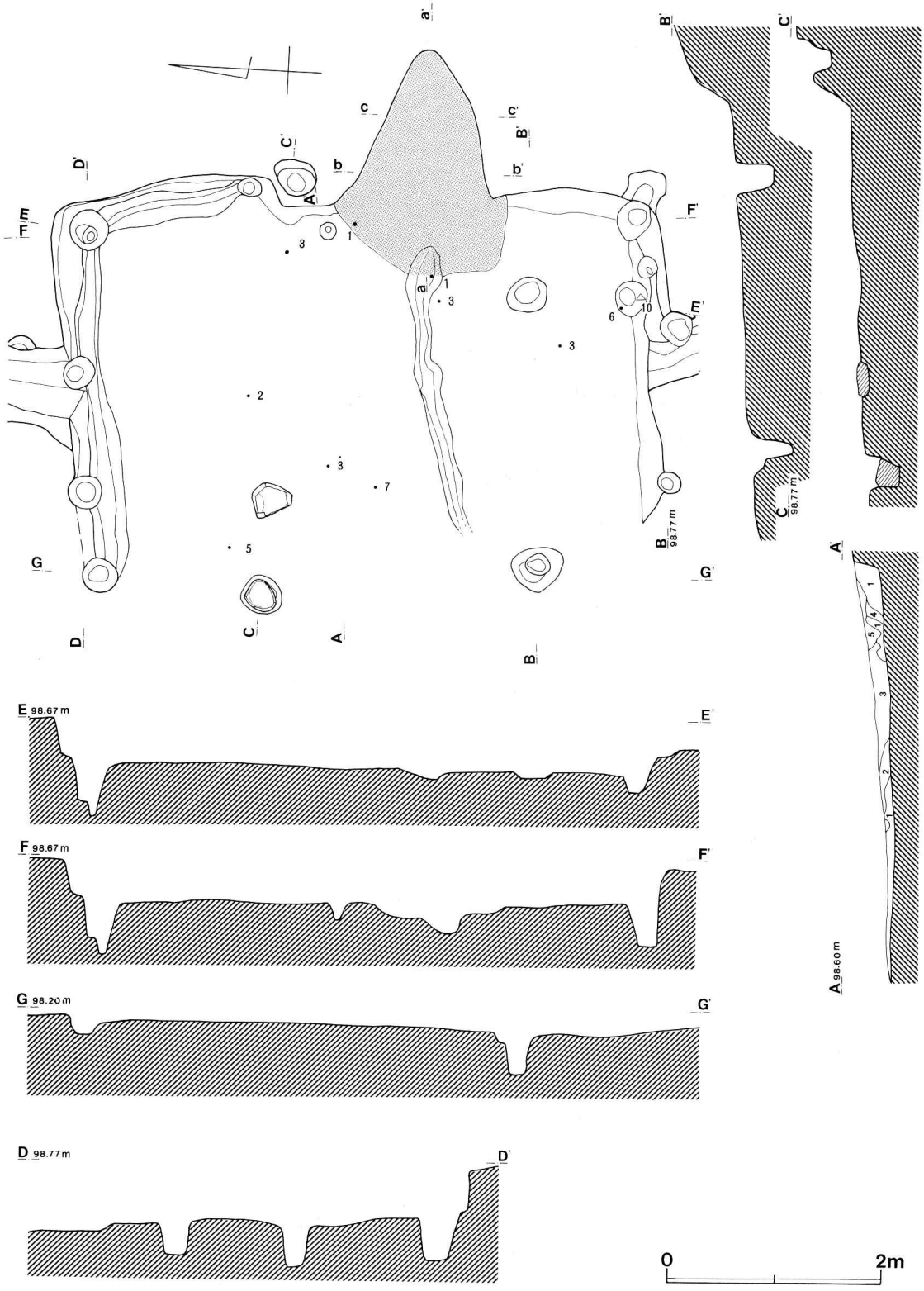
壁溝は、東壁カマド左側及び北壁に於いて検出されている。

カ マ ド（第49図，図版13―２）

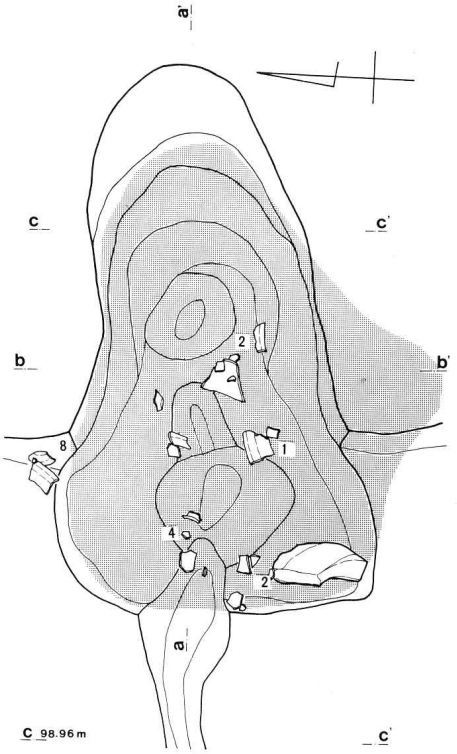
カマドは、東壁中央部に設けられ、主軸方向は、N―83°―Eである。燃焼部は壁を幅108cm、壁外へ長さ140cm掘り込む。焚き口部付近は径53cm深さ５cmのピットを設け、さらに浅い溝が接続する。

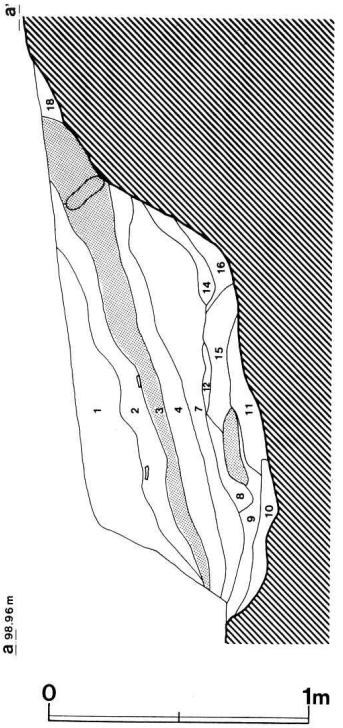


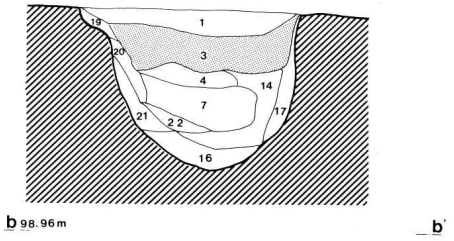
第47図　第７号住居址出土遺物

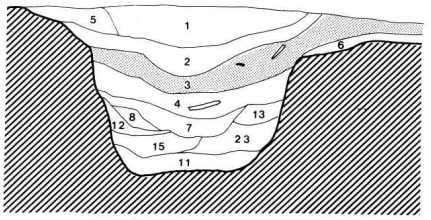

a'
B'
C'
c
c'
B'
C'
b
b'
D'
A'
E
F
F'
E'
G
G'
D
C'
A
B
B 98.77 m
C 98.77 m
A' 98.60 m
E 98.67 m
E'
F 98.67 m
F'
G 98.20 m
G'
D 98.77 m
D'
0
2m

第48図　第７号住居址





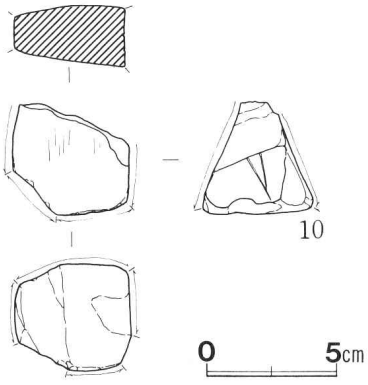




第49図
第７号住居址
カマド

第７号住居址カマド土層説明

１層　茶褐色土（焼土粒を多量に含み、炭化物を若干含む。粘性やや有り。火山灰を多量に含む。）
２層　茶褐色土（焼土の入り具合は１層よりやや少ない。粘性やや有り、１層よりやや暗い。）
３層　灰褐色土（粘性有り、焼土粒、炭化物粒を若干含む。）
４層　灰褐色土（粘性有り焼土粒、炭化物粒を多量に含む。）
５層　黒褐色土（焼土粒・炭化物粒を若干含む。）
６層　黄褐色土（焼土粒、炭化物粒を若干含む。）
７層　暗茶褐色土（粘性有り、焼土粒、炭化物粒を含む。）
８層　黒褐色土（焼土粒、炭化物を多量に含む。）
９層　灰褐色土（粘性有り焼土粒・炭化物粒を多量に含む。）
10層　黒褐色土（やや粘性有り、炭化物を多量に含む。）
11層　暗黄褐色土（炭化物を多量に含み、しまりが悪い。）
12層　焼土層１　　13層　焼土層２　　14層　焼土層３
15層　暗茶褐色土（ローム粒、炭化物粒を多量に含む。やや軟質である。）
16層　暗茶褐色土（ローム粒、炭化物粒を若干含む。粘性有。）
17層　暗黄褐色土（やや軟質である。）
18層　暗黄褐色土（焼土粒を若干含む。）
19層　黄褐色土（やや軟質である。）
20層　暗茶褐色土（焼土粒を若干含む。）
22層　暗茶褐色土（焼土粒を多量に含み、粘性が有る。）
23層　黒褐色土（炭化物、焼土粒を多量に含み、粘性が有る。）



第50図
第７号住居址
出土　砥石

第７号住居址土層説明

１層　暗黄褐色土（焼土粒子を若干含む。粘質。）
２層　暗褐色土（粘質。）
３層　黒褐色土（ロームブロックを若干含む。）
４層　暗茶褐色土（黒褐色土ブロック・ロームブロックの混合土。）
５層　黒褐色土（３層より明るい。ロームブロック、火山灰を若干含む。）〈攪乱〉

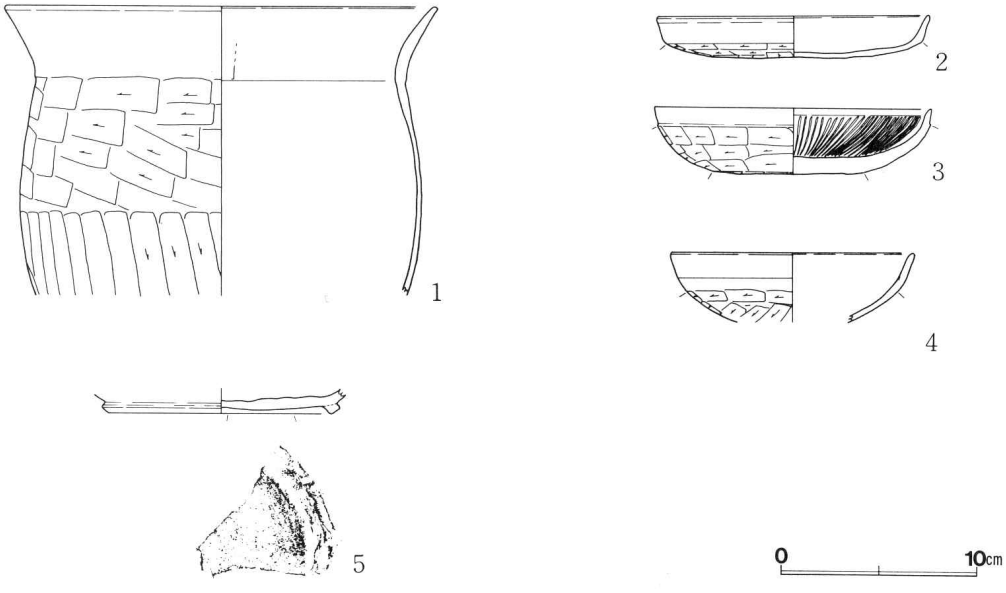
第８号住居址（第52図，図版14―１・２）

８号住居址は、調査区中央付近の緩斜面上に位置する。南側には、10号住居址が２ｍと近接している。

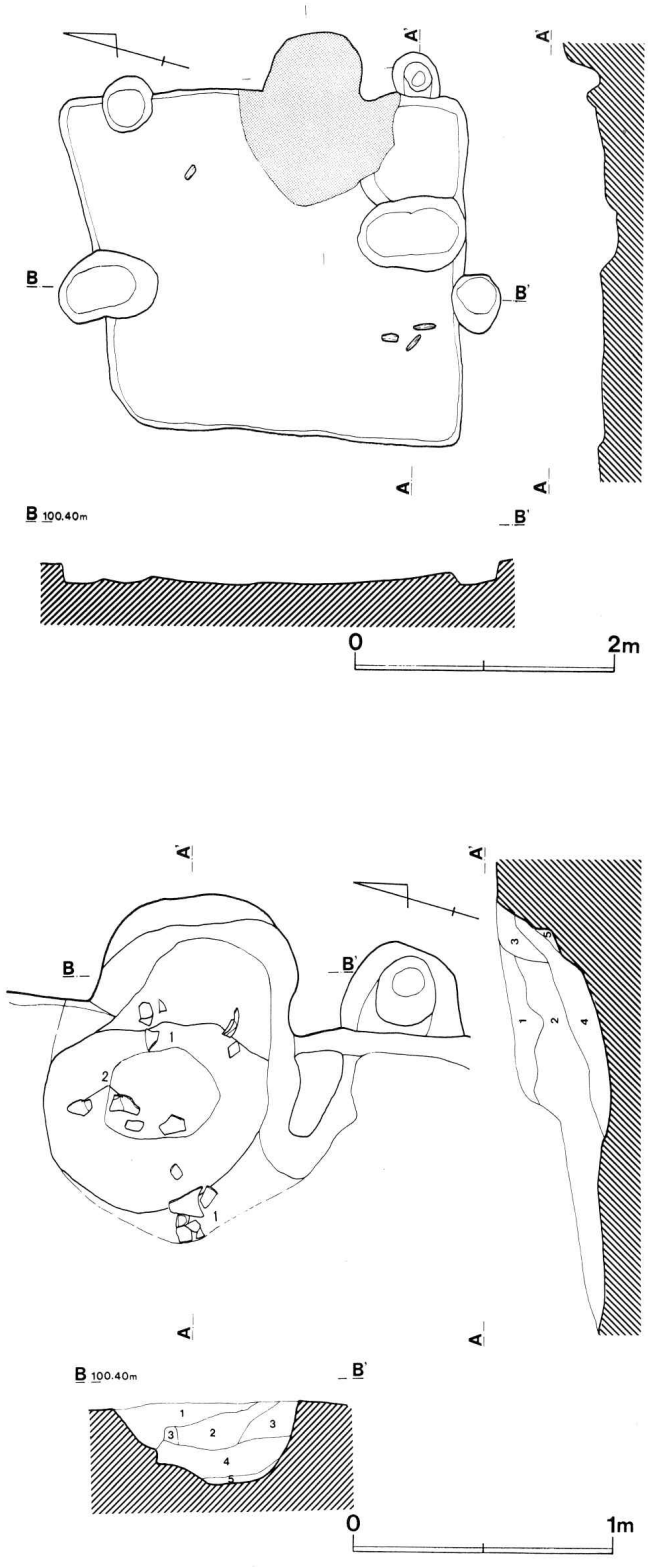
規模は、最大幅東西2.7ｍ、南北3.1ｍを測る。プランは、東側のやや幅広の台形を呈している。主軸は、N―80°―Eを示す。

床面は、中央部が若干低く、全体的に西に傾斜し、比高差10cmを測る。壁高は、東壁側で50cm程である。

主柱穴は検出されないが、支柱穴と考えられるピットが、東壁上に於いて２基検出されており、深さはそれぞれ20cm程である。



第51図　第８号住居址出土遺物



第52図　第８号住居址およびカマド

カマド（第52図，図版14－２）

カマドは東壁南寄部に設けられ、主軸方向は、N－87°－Eである。燃焼部は壁を幅80cm壁外へ長さ54cm掘り込む。焚き口部付近は、若干掘りくぼめられる。袖は壁を長さ55cm程削り出したものが南側のみ現存する。煙道部は不明である。

第８号住居址土層説明

１層　暗茶褐色土（粘質）

２層　暗茶褐色土（粘質、焼土粒子を若干含む。）

３層　暗茶褐色土（粘質、焼土粒子、白色粘土ブロックを多く含む。２層より明るい。）

４層　暗黒褐色土

５層　暗茶褐色土（ロームブロックを多く含む。攪乱層。）

６層　暗茶褐色土（スコリア、焼土粒子を若干含む。）

７層　浅間山系Ａ軽石

第８号住居址カマド土層説明

１層　茶褐色土（焼土ブロック〈小〉を若干、ロームブロック〈小〉、火山灰を多く含む。）

２層　暗黄褐色土（粘質土。焼土ブロック〈小〉、炭化物〈小〉を若干含む。）

３層　茶褐色土（焼土ブロック〈大〉を多く含む。他は１層と同じ。）

４層　黒褐色土（焼土ブロック〈大〉、ロームブロック〈小〉を多く炭化物を若干含む。）

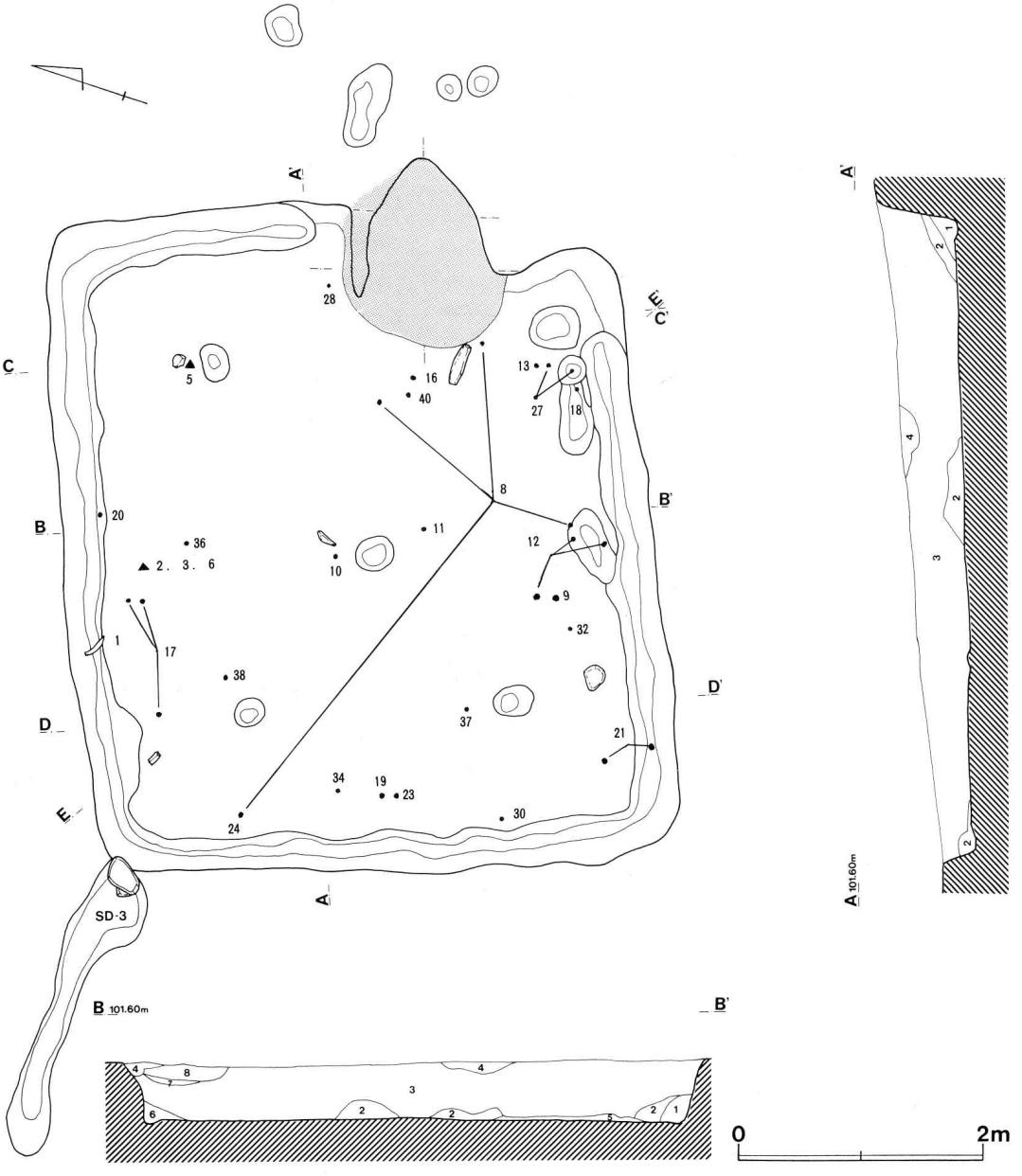
５層　暗黄褐色土（２層より粘性が弱い。）

第９号住居址（第53・54図，図版15―１・２）

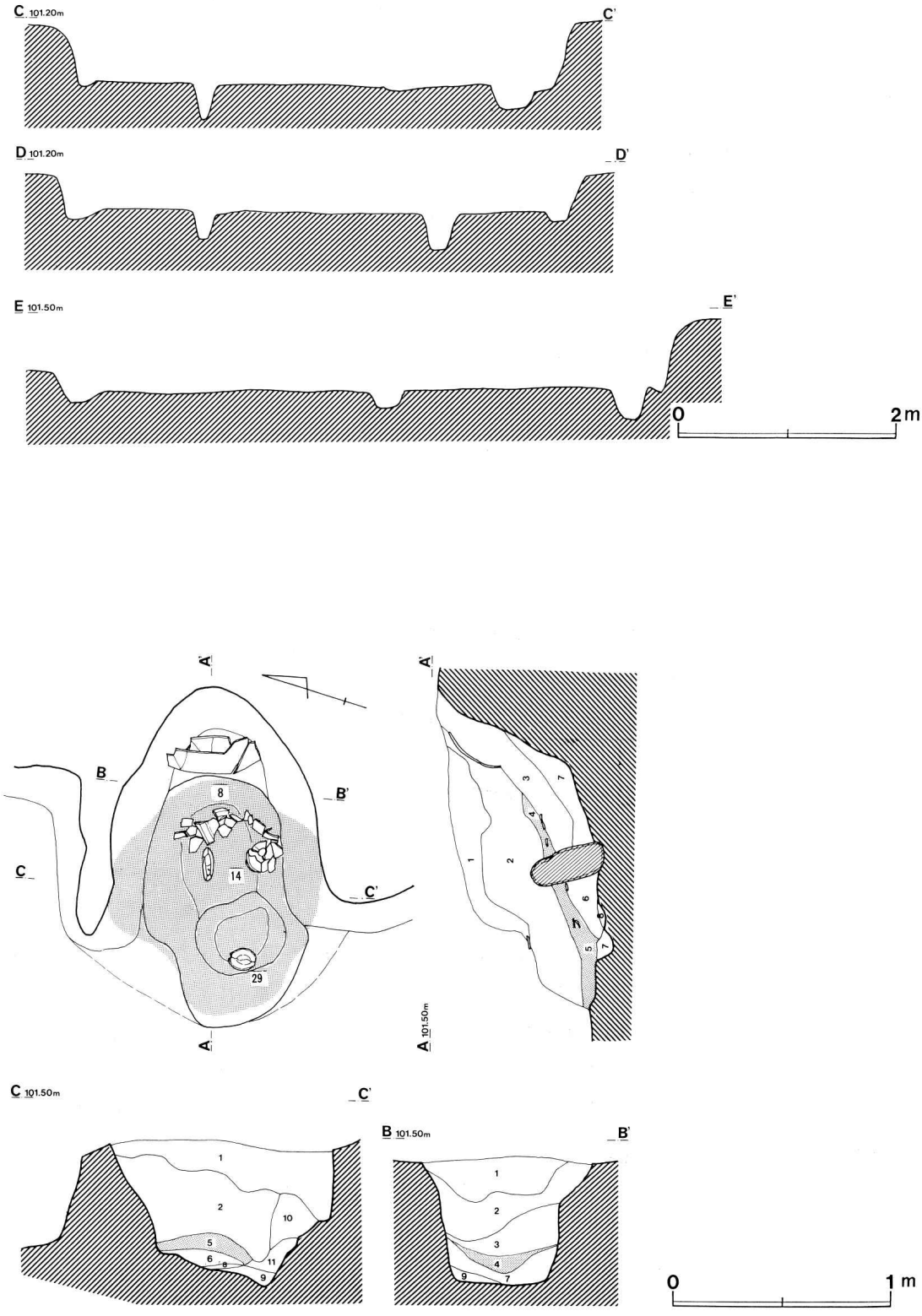
９号住居址は、調査区南東部に位置する。規模は東西5.4m、南北 4.8m を測る。プランは、東西に長い長方形を呈している。カマドの左側には80cm程の張り出し部を有する。主軸はN―69°―Eを示す。

床面は、比較的平坦である。壁高は、東側で60cm西側で20cmを測る。

主柱穴は、３基検出され深さ20～30cmを測る。



第53図　第９号住居址



第54図　第９号住居址断面およびカマド

壁溝はカマド部分以外で全周し北西コーナー部から6号住と同様な溝が外方に2.4m程のびている。

カマド
（第54図，図版15—2）

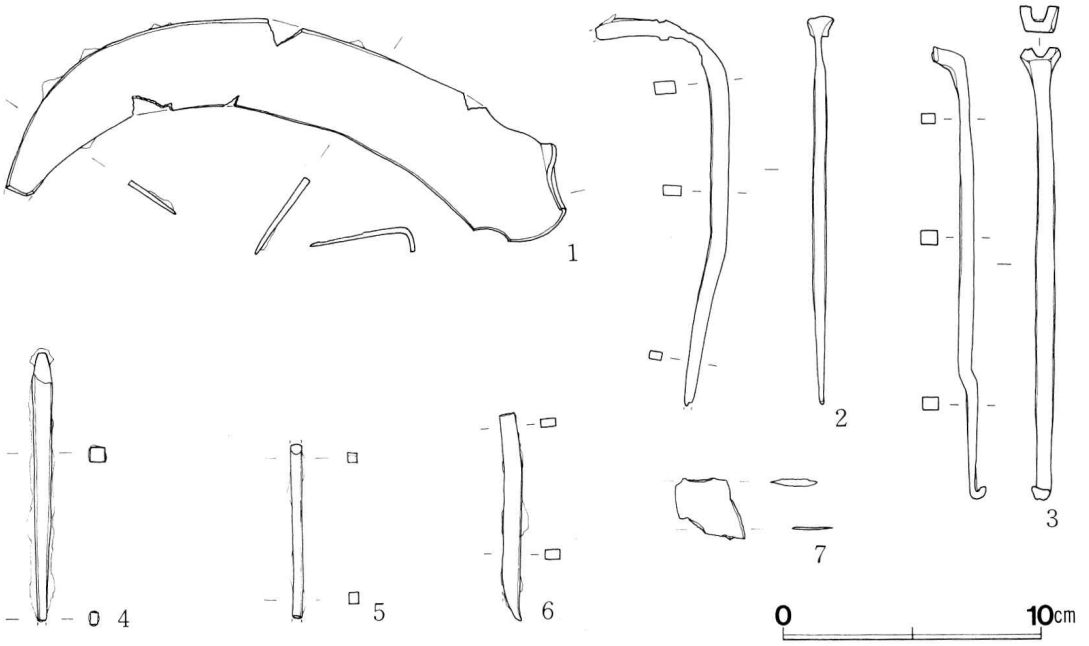
カマドは、東壁南寄部に設けられ、主軸方向は、N—70°—Eである。燃床部は壁を幅116cm壁外へ長さ104cm掘り込む。焚き口部付近には、径40cm、深さ7cmのピットが設けられる。北袖は壁を70cm程袖状に掘り残しており南袖に相当する部分は、完全に壁を掘り残しているため、袖は認められない。支脚は燃焼部中央に設置される。

第9号住居址土層説明

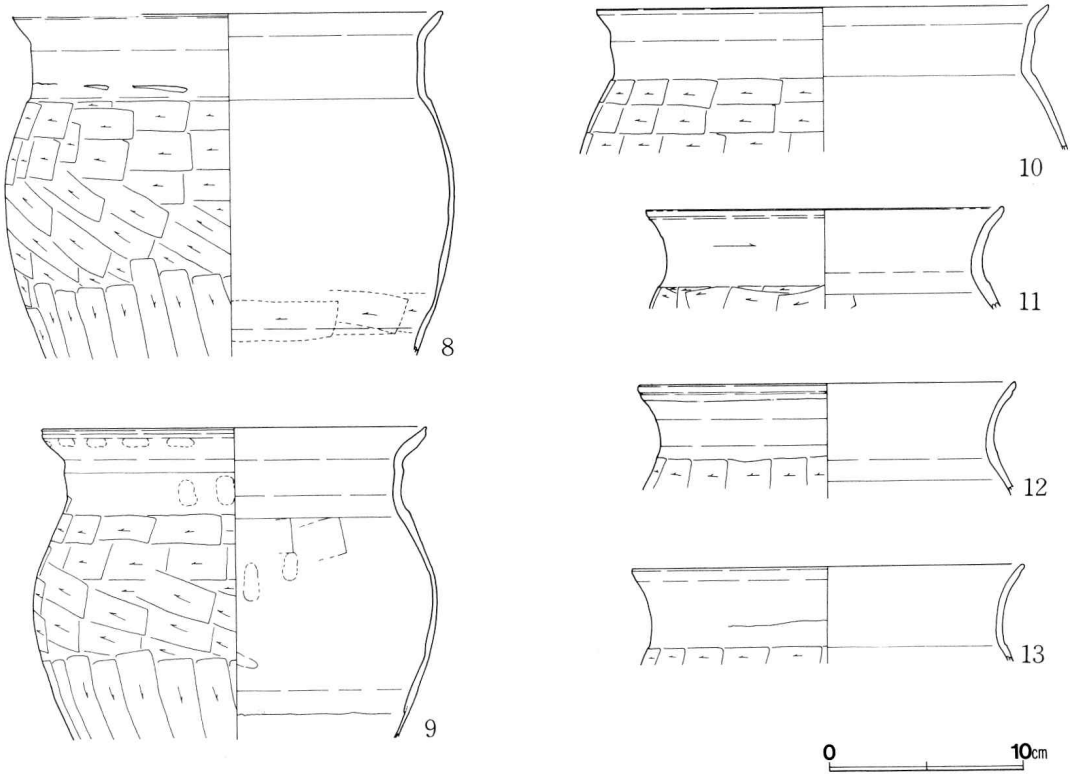
1層　暗黄褐色土（粘質）
2層　黒褐色土（ローム粒子・炭化物・焼土を若干含む。）
3層　暗茶褐色土（ロームブロック・焼土粒子・炭化物をやや多く含む。）
4層　黒褐色土
5層　暗黒褐色土（粘質）
6層　暗茶褐色土（灰褐色の粘土ブロックを多く含む。）
7層　灰褐色粘土
8層　暗茶褐色土（3層より明るい。）

第9号住居址カマド土層説明

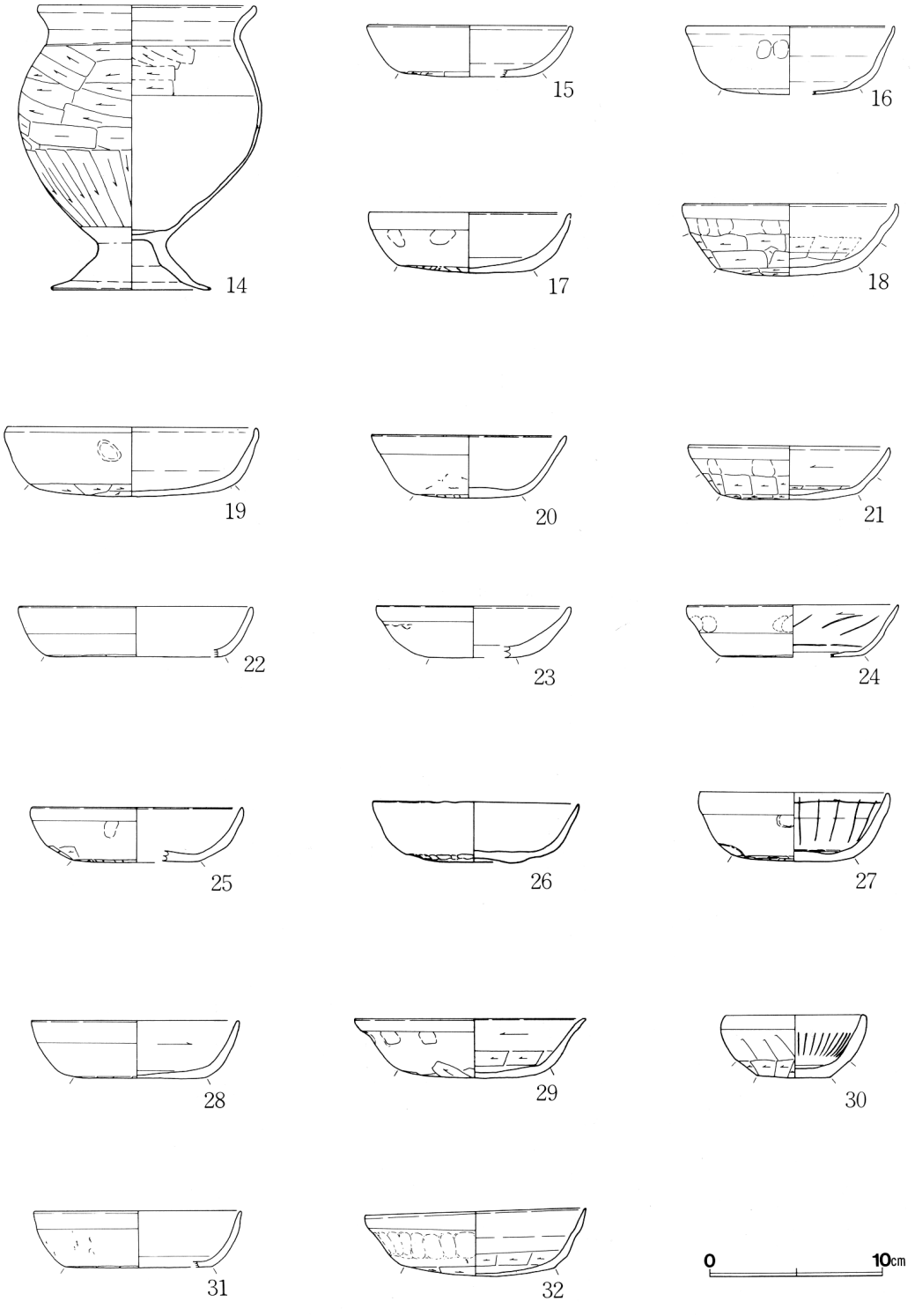
1層　茶褐色土（大きいロームブロックや小さい焼土ブロックを若干含み火山灰をやや多く含む。）
2層　茶褐色土（1層より明るい。小さいロームブロック・小さい焼土ブロック・炭化物を比較的多く含み、火山灰を僅かに含む。）
3層　暗赤褐色土（焼土、小さな灰褐色粘土ブロックを若干含む。）
4層　灰褐色土（粘土、小さな焼土ブロックを若干含む。）
5層　灰褐色土（小さな焼土ブロックを多く含み、炭化物を若干含む。）
6層　赤褐色土（焼土、小さなロームブロックを若干含む。）
7層　黒褐色土（小さな焼土ブロックを若干含む。）
8層　黄褐色土（粘土質）
9層　灰褐色土（粘土質基盤層）
10層　茶褐色土（大きな、灰褐色粘土ブロックとロームブロックを若干含む。）
11層　灰褐色土（大きな焼土ブロックを多く含む。）
12層　黒褐色土（小さな焼土ブロック・炭化物・ローム粒子を若干含む。）



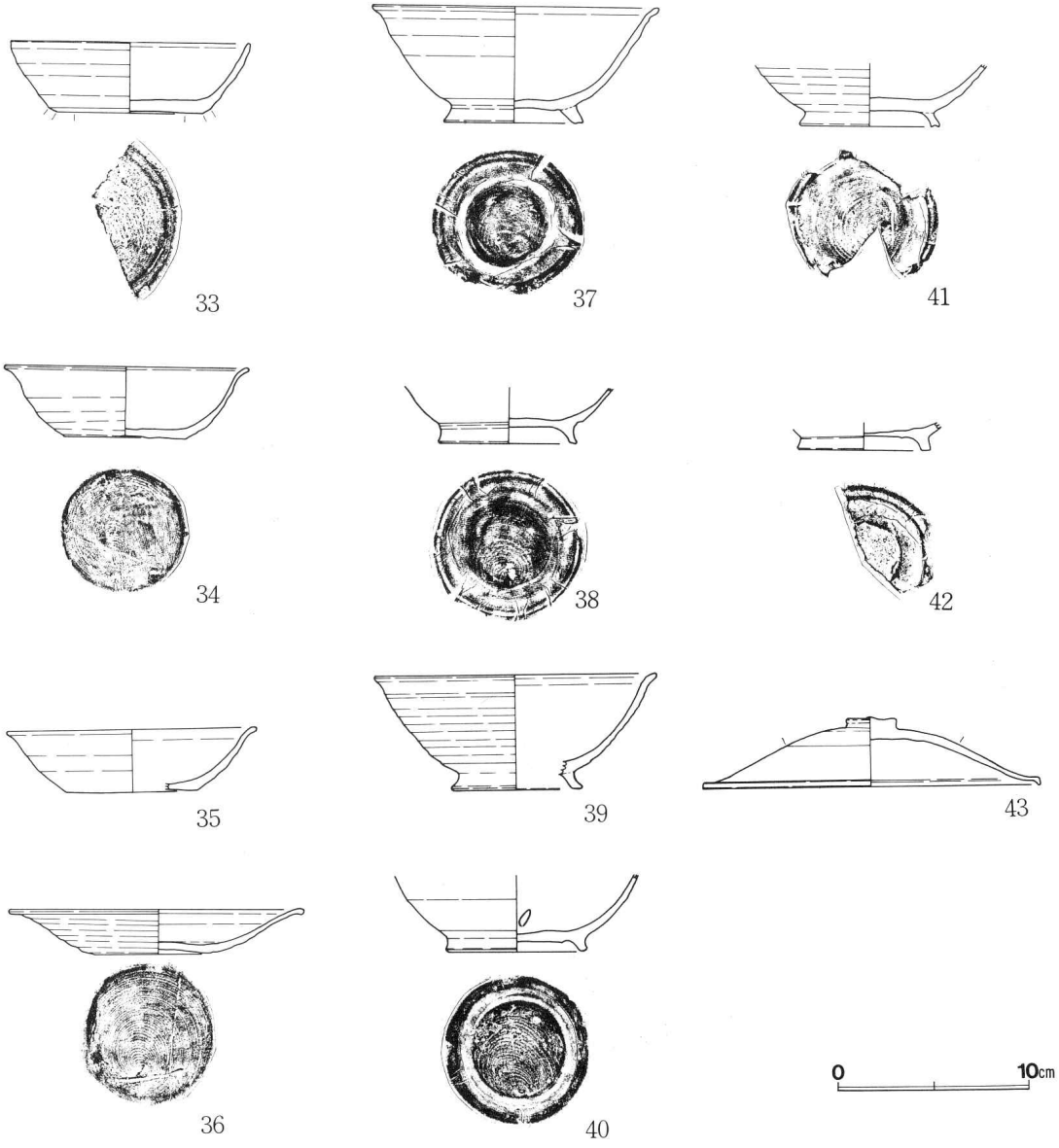
第55図　第９号住居址出土遺物（１）



第56図　第９号住居址出土遺物（２）



第57図　第９号住居址出土遺物(３)



第58図　第９号住居址出土遺物(４)

第10号住居址（第59・60図，図版17―１・２）

10号住居址は、調査区中央よりやや南寄りに位置し、北側には８号住居址が２mの位置にある。

規模は、東西4.2m、南北3.9mを測る。プランは、東壁が短かい不整形を呈ししている。主軸はN―85°―Eを示す。

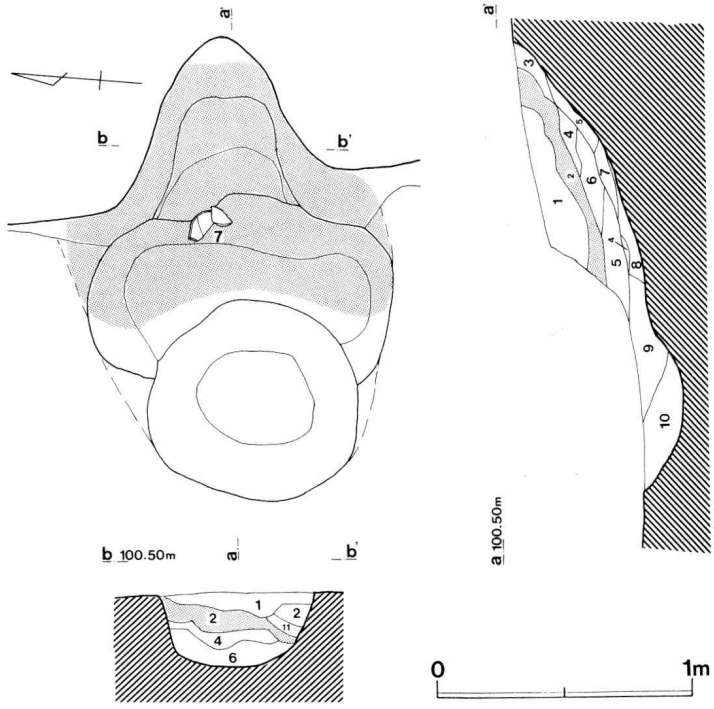
床面は、やや西側へ傾斜し、比高差15cm以上を測る。壁高は、東壁で30cm程であり、西壁は検出されていない。

壁溝は、西側の北半分を除いて、全周している。

柱穴としては、主柱穴が２基検出されている。深さは45～60cmを測る。支柱穴は、壁溝上に於いて検出されている。

カマド（第59図，図版17－２）

カマドは東壁南寄部に設けられ、主軸方向はＮ－79°－Ｅである。燃床部は壁を幅85cm、壁外へ長さ58cm程堀り込む。焚き口部付近は床面を若干掘りくぼめ、さらに、径72cm深さ15cmの円形のピットが設けられる。煙道部は不明である。



第59図
第10号住居址
カマド

第10号住居址土層説明

１層　暗黄褐色土

２層　黒褐色土（暗茶褐色土ブロック、焼土粒子、炭化物を若干含む。）

３層　黒褐色土（黒褐色土と茶褐色土の混合土、焼土粒子を多く含む。）

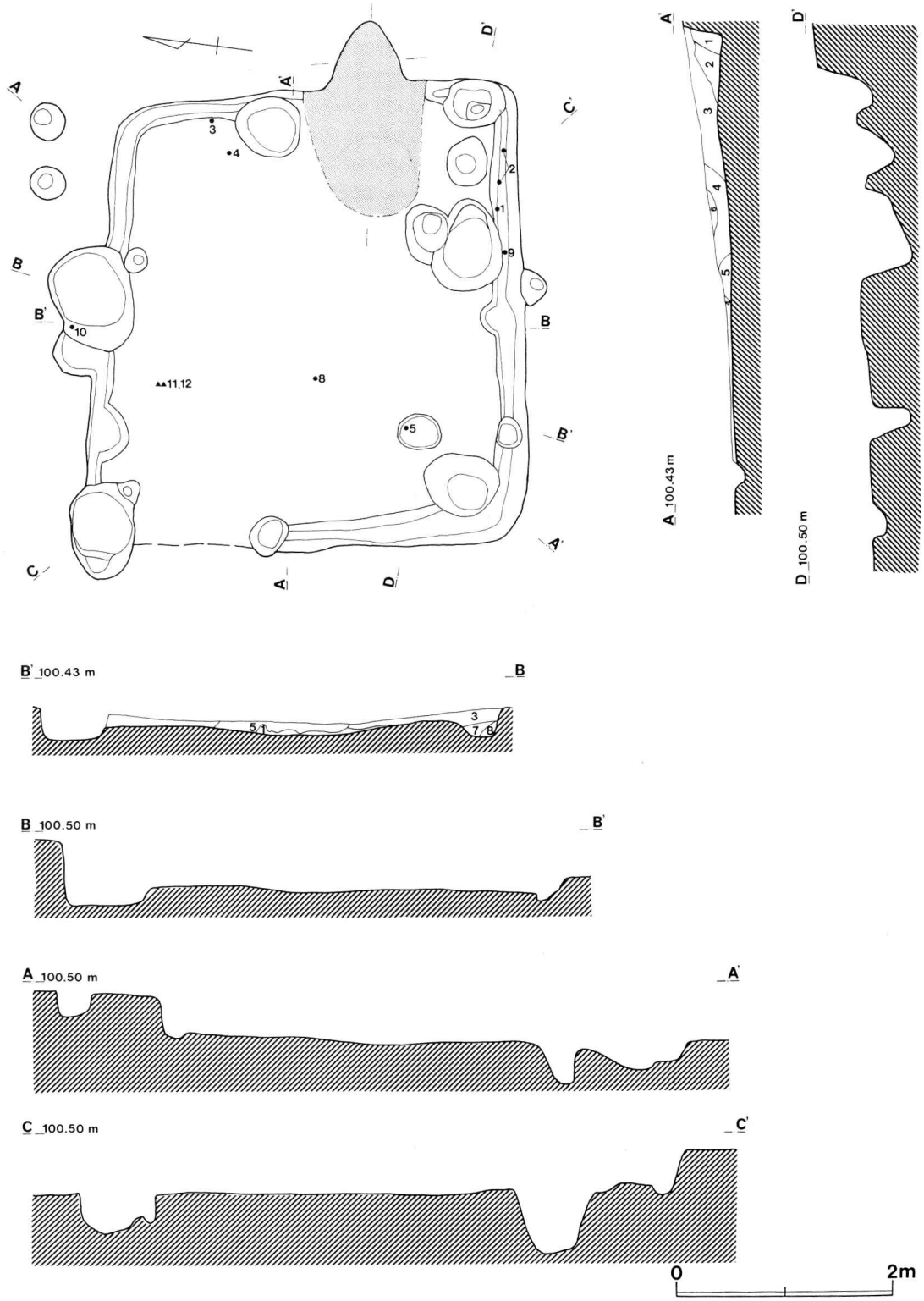
４層　暗茶褐色土（ロームブロックを若干含み、焼土粒子を多く含む。）

５層　黒褐色土（焼土粒子を若干含む。）

６層　暗茶褐色土（スコリア、焼土を多く含む。）

７層　暗黒褐色土（ローム粒、焼土を少量含む。）

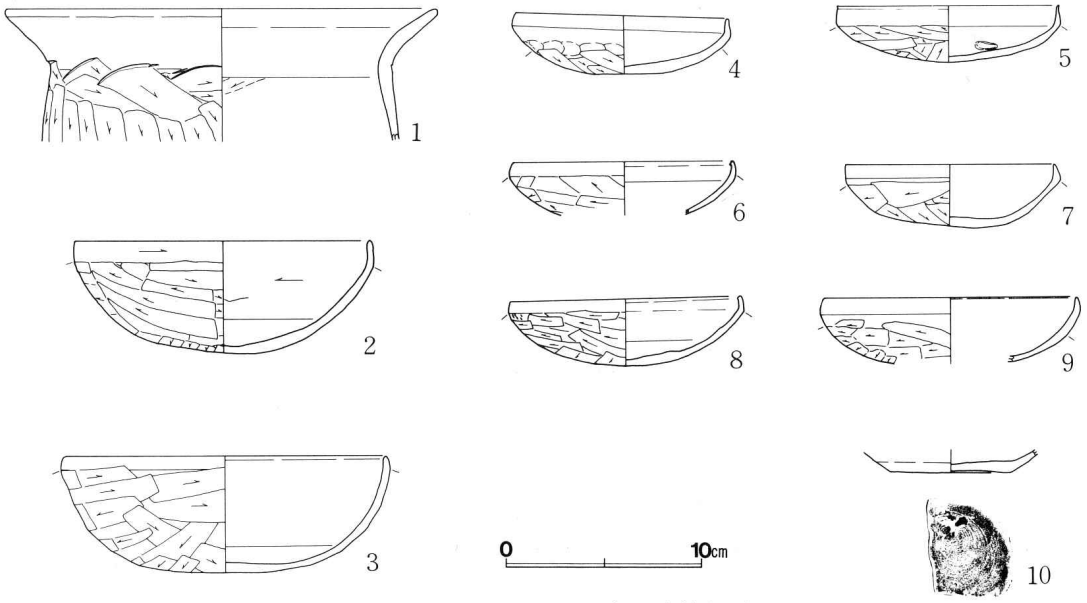
８層　暗黒褐色土（７層に比べ、色調がやや暗い。）



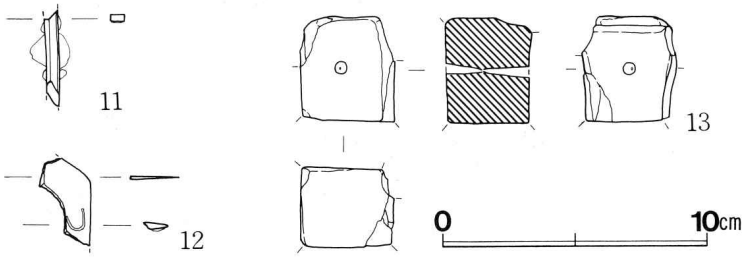
第60図　第10号住居址

第10号住居址カマド土層説明

1層　茶褐色土（火山灰を多く含み、焼土ブロック、炭化物を若干含む。）
2層　暗黄褐色土（粘土質）
3層　茶褐色土（焼土ブロックを多く含む。）
4層　暗赤褐色土（焼土）
5層　黒褐色土（焼土ブロックを多く含み、炭化物を若干含む。）
6層　茶褐色土（暗黄褐色粘土ブロック、焼土ブロックを多く含　炭化物を若干含む。）
7層　茶褐色土（6層より焼土ブロッ
8層　暗黄褐色土（ロームや2層より粘性が弱い。）
9層　茶褐色土（ロームブロックを多く含み、焼土、炭化物を若干含む。）
10層　暗黄褐色土（茶褐色土を霜降り状に含み、焼土、炭化物を若干含む。）
11層　黒褐色土（焼土ブロック、ロームブロックを若干含み、火山灰を多く含む。）



第61図　第10号住居址出土遺物（1）



第62図　第10号住居址出土遺物（2）

第11ａ・11ｂ・11ｃ号住居址（第63・64図，図版19―１・２）

11号住居址は、調査区南西隅に於いて検出されている。11―ａ、ｂ、ｃ号住居址の３軒の切り合いであり、新旧関係は、11ｂ住より11ａ住が新しいことが明らかである。

11―ａ号住居址の規模は、東西、南北ともに３ｍ以上である。主軸はＮ―85°―Ｅを示す。

11―ｂ号住居址は、南北2.5ｍ以上であり、主軸はＮ―83°―Ｅを示す。

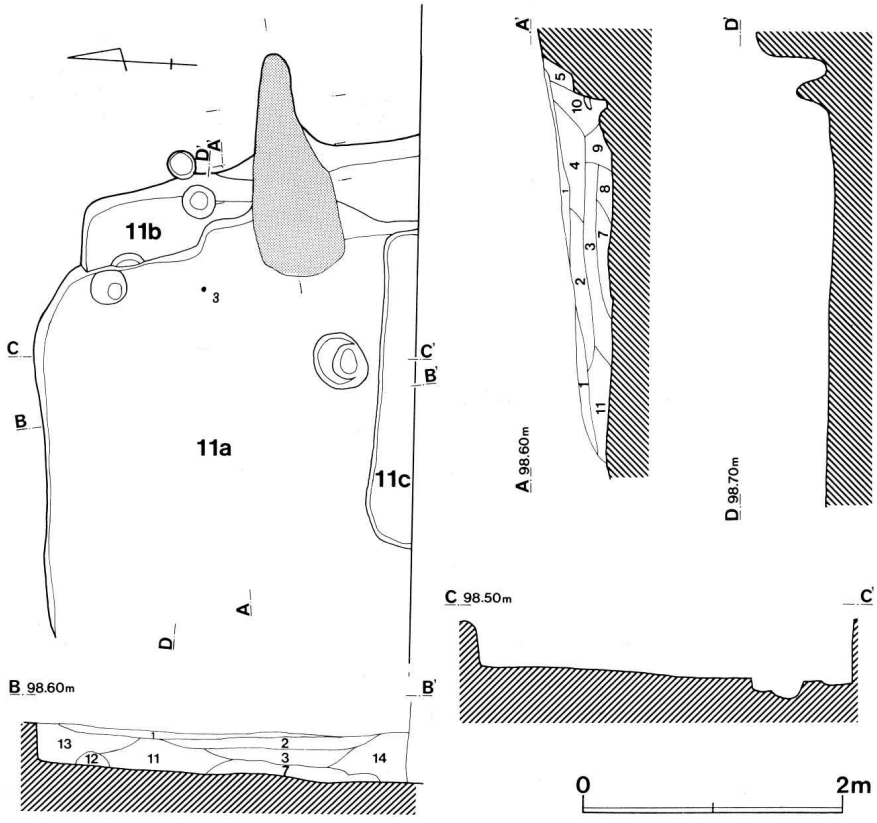
11―ｃ号住居址は、東西2.5ｍ程の規模をもつ。

床面は何れも平坦であり、壁高は、11―ａ号住居址が東壁で50cm、11―ｂ号住居址が東壁で20cm、11―ｃ号住居址が北壁で５cmである。

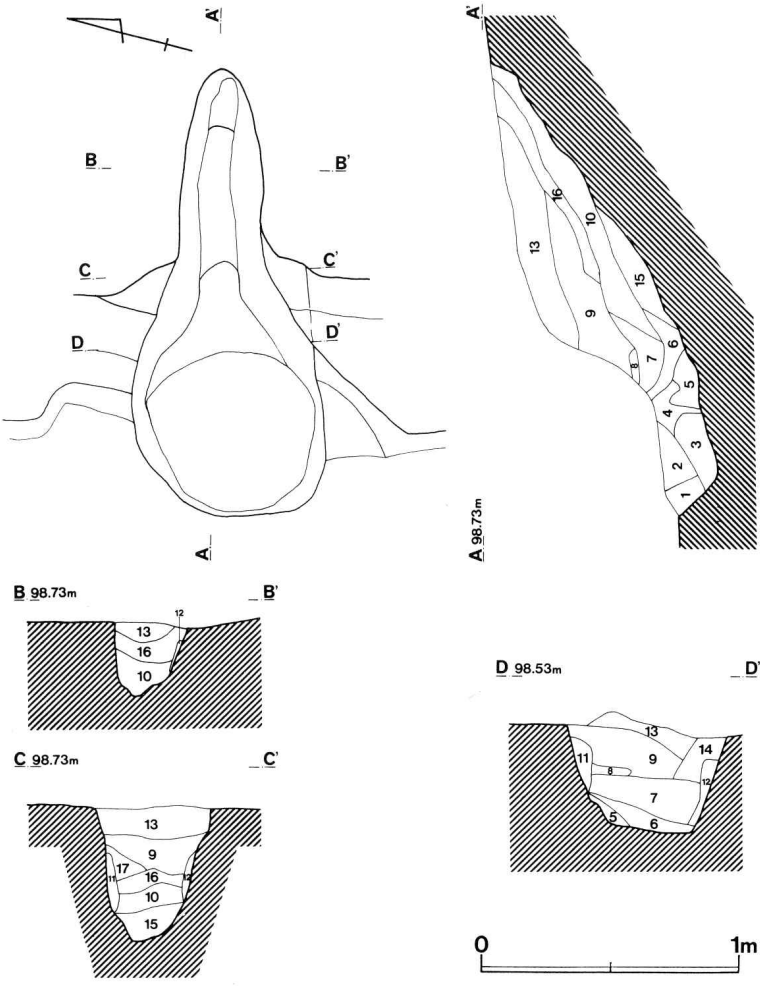
壁溝は何れも検出されておらず、またピットも、どの住居に伴なうか明らかでない。

カマド（第64図，図版19―２）

11号住は２軒の切り合いが確認されたが本カマドは新しい11ａ号住居址のものである。東壁中央に設けられ、燃焼部は床面を深さ20cm、幅70cm、壁外へ長さ54cm掘り込み、これに幅33cm長さ74cmの煙道部を付設する。焚き口部は平坦な床面を利用する。



第63図　第11ａ・ｂ・ｃ号住居址



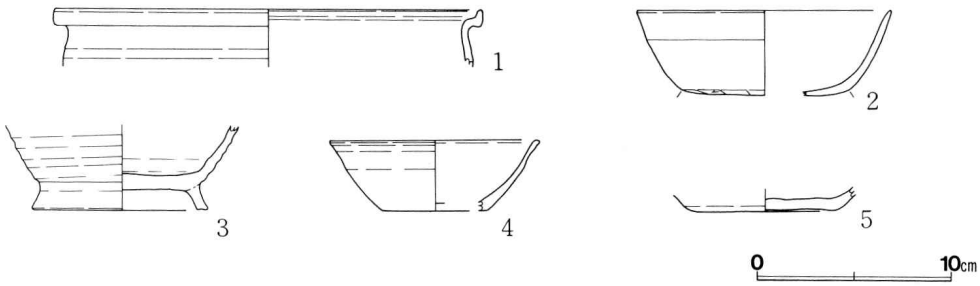
第64図
第11 a 号住居址
カマド

第11号住居址土層説明

1 層　茶褐色土（しまっていない。ローム粒子をやや含む。篠の根がかなりある。）
2 層　黄茶褐色土（しまっている。ローム粒子を含む。）
3 層　黒褐色土（しまっている。ローム粒子をやや含む。）
4 層　茶褐色土（ややしまっている。ローム粒子・炭化物をやや含む。）
5 層　黄褐色土（かなりしまっている。炭化物をやや含む。やや焼土の粒が散布している。
6 層　ローム質土
7 層　薄茶褐色土（たいしてしまっていない。ローム粒子を多く含む。土器片がある。）
8 層　茶褐色土（4 層よりは明るい。炭化物ややあり。土器片を持つ。
9 層　茶褐色土（8 層より暗い。焼土の粒がややある。土器片を持つ。）
10層　茶褐色土（炭化物、焼土の粒を持つ。）
11層　茶褐色土（しまっている。ローム粒子を含む。ほんの少し炭化物と焼土 粒を含む。）
12層　黄茶褐色土（ローム粒子を多く含む。しまっている。）
13層　茶褐色土（11層より暗い。しまっている。ローム粒子・炭化物・焼土の粒を含む。）
14層　茶褐色土（あまりしまっていない。ローム粒子をやや含む。）

第11号住居址カマド土層説明

1層　茶褐色土（焼土粒子をやや含む。あまりしまっておらずバサバサしている。）
2層　淡茶褐色土（ほんの少し焼土粒子を含む。ローム粒子をやや含む。堅くしまっている。）
3層　赤褐色土（焼土）
4層　淡茶褐色土（ほんの少し焼土粒子を含むが2層よりも少ない。ローム粒子やや有り。堅くしまっている。）
5層　赤褐色土（焼土）
6層　黒褐色土（焼土粒子を含む。炭化物を含む。）
7層　淡茶褐色土（粘性があり、しまっている。）
8層　黒褐色土（6層よりしまっている。ローム粒子をやや含む。）
9層　茶褐色土（やや粘質である。炭化物をやや含む。ローム粒子やや有り。）
10層　暗赤褐色土（焼土・炭化物を非常に多く含む。）
11層　紅褐色土（焼土）
12層　紅褐色土（焼土）
13層　茶褐色土（9層より明るい。堅くしまっている。炭化物・焼土・ローム粒子ともにやや有る。）
14層　淡茶褐色土（しまっていない。ローム粒子を多く含む。）
15層　黒褐色土（6層よりも黒い、炭化物の層。ほんの少し焼土を含む。）
16層　赤褐色土（焼土と炭化物の層。10層よりも明るく、11層・12層よりも暗い。）
17層　黄茶褐色土（かなりローム粒子が混ざっている。あまり堅くない。）



第65図　第11号住居址出土遺物

第12号住居址（第66図 図版20—1・2）

12号住居址は、調査区中央より北寄りに位置し、南2mには5号住居址がある。住居址は、西側の多くが流失しており、カマド付近のみ検出されている。

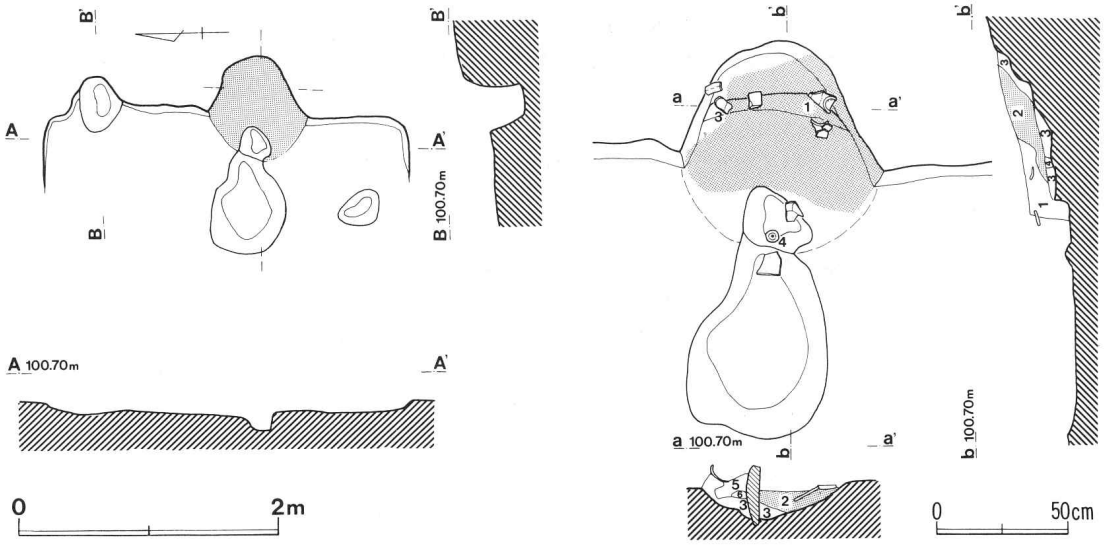
規模は、東西2.8mを側り、プランは方形あるいは長方形を呈すと考えられる。主軸は、N—90°—Eを示す。

床面は、比較的平坦であり、壁高は、東壁で25cmを測る。壁溝は検出されず、またピットについても住居址に伴なうものであるかどうか明らかでない。

カマド（第66図，図版20-2）

カマドは、東壁中央部に設けられ、主軸方向はN—90°—Eである。燃床部は壁を幅79cm壁外へ長さ47cm掘り込む。焚き口部付近には浅い不整形のピットが設けられる。支脚は燃床部中央よりやや北よりに設置される。

（住居址・篠崎潔、カマド・鳥羽政之）



第66図　第12号住居址およびカマド

第12号住居址カマド土層説明

1層　茶褐色土（焼土粒・炭化物粒を若干含む。ローム粒を多量に含む。やや明るい色である。）

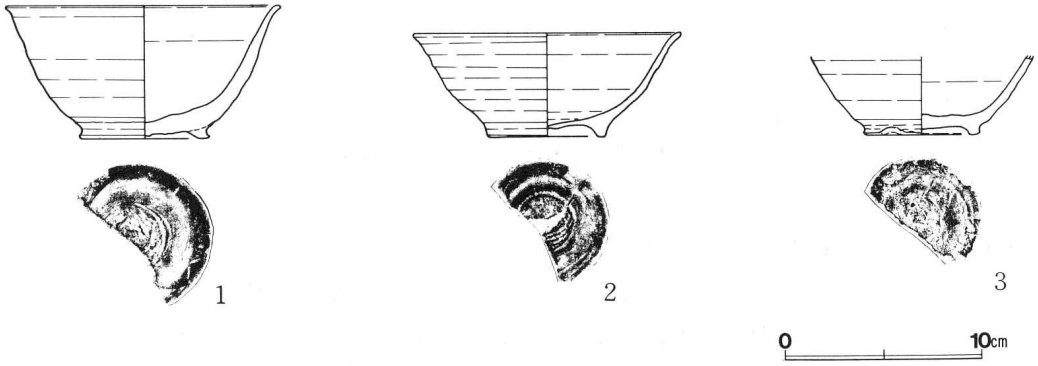
2層　茶褐色土（焼土粒を多量に含む。炭化物粒を含む。粘性強い。）

3層　焼土

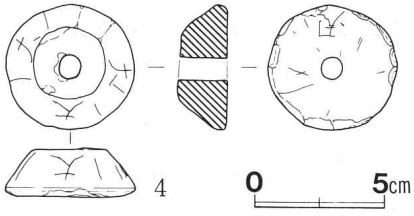
4層　茶褐色土（焼土粒・炭化物を若干含み、ローム粒子を含む。）

5層　茶褐色土（焼土粒・炭化物を若干含み、ローム粒子を含む。）

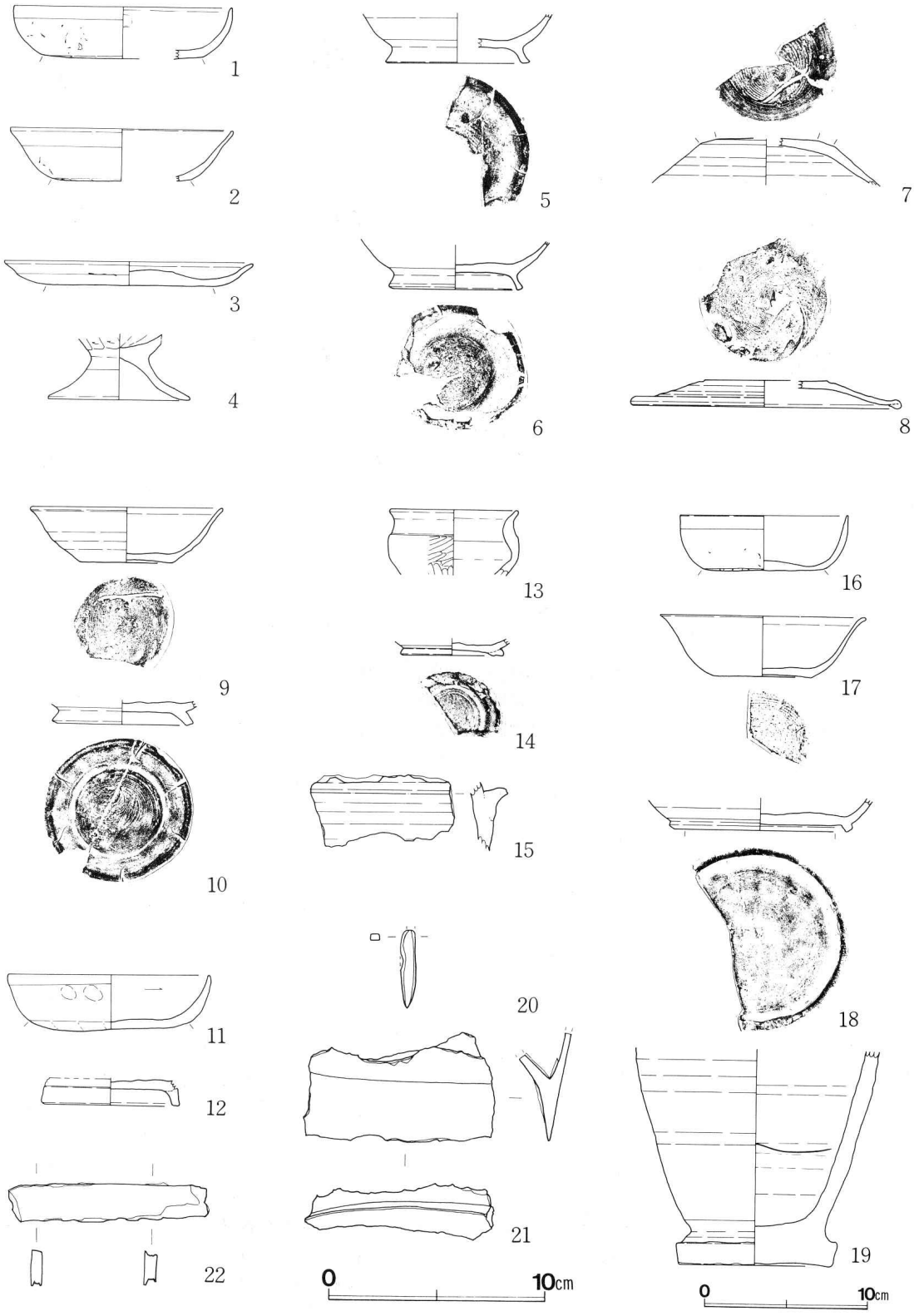
6層　黄褐色土（ロームブロック）



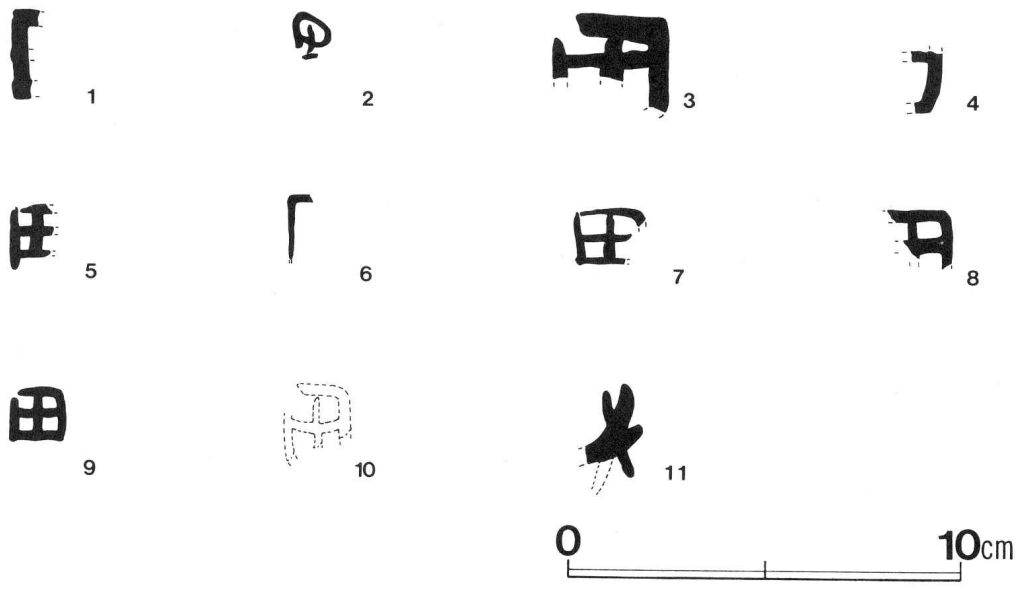
第67図　第12号住居址出土遺物



第68図　第12号住居址出土
石製紡錘車



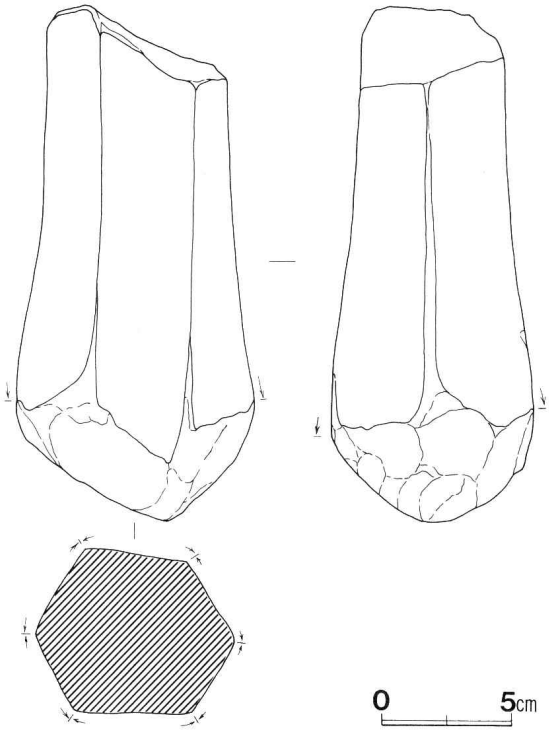
第69図　グリッド区出土遺物



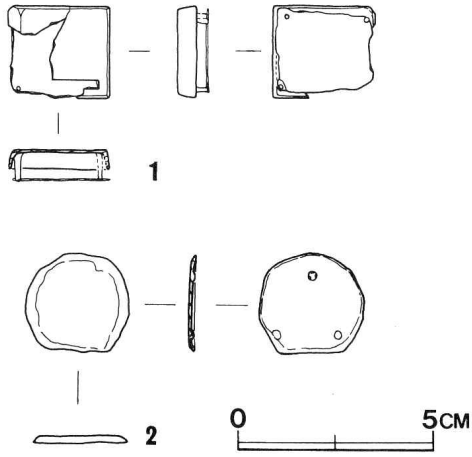
第70図　阿知越遺跡A地点出土墨書集成（破片）

番号	参照図・番号	出土遺構	器種・部位	残存量	墨書の部位	文字	重さ(g)
1	第70図 No.1	第2号住居址覆土上層	土師器坏 底部	破片	内底部	田カ	2
2	第70図 No.2	〃 〃	土師器皿 口縁部	口径の$\frac{1}{5}$	外面体部	不詳	12
3	第70図 No.3	〃 〃	土師器坏 底部	破片	内底部	田カ	15
4	第70図 No.4	〃 〃	〃 〃	〃	〃	田カ	3
5	第70図 No.5	〃 〃	土師器坏 口縁部	〃	外面口縁部	田カ	2
6	第70図 No.6	〃 覆土下層	土師器坏 底部	〃	内底部	田カ	10
7	第70図 No.7	〃 覆土上層	〃 〃	〃	〃	田	3
8	第70図 No.8	〃 〃	〃 〃	〃	外底部・内底部(？)	外田カ内不明	10
9	第70図 No.9	〃 〃	〃 〃	〃	外底部・内底部(？)	外田 内不明	15
10	第70図 No.10	〃 〃	〃 〃	〃	内底部	田	22
11	第70図 No.11	〃 〃	須恵器皿(？)底部	〃	外底部	不詳	10
12	――――	〃 〃	土師器坏 底部	〃	内底部	不明	6
13	――――	〃 〃	〃 〃	〃	〃	〃	15
14	第14図 No.23	〃 覆土下層	土師器坏	$\frac{1}{2}$	外面体部	田カ	65
15	第14図 No.24	〃 床直	〃	ほぼ完形	外面体部・外底部	体田 底田	135
16	第14図 No.25	〃 〃	〃	完形	内底部	田	140
17	第14図 No.26	〃 〃	〃	〃	〃	田	97
18	第17図 No.83	〃 覆土上層	須恵器高台付埦高台部	高台部全周	〃	上(？)(田の可能性有)	80
19	第17図 No.84	〃 〃	〃 〃	〃	〃	田	70
20	第17図 No.85	〃 覆土下層	須恵器 高台付埦	$\frac{1}{2}$	内底部・内面体部(？)	底田 体不明	150
21	第37図 No.32	第6号住居址 覆土	土師器坏	$\frac{1}{2}$	内底部	田カ	50
22	――――	〃 〃	灰釉陶器	ほぼ完形	外面体部	田カ	920

第3表　阿知越遺跡A地点出土墨書土器一覧表



第71図　第１号住居址南表採　砥石



第72図 阿知越遺跡Ａ地点出土銅製品

1　銅製巡方

第１号掘立柱建物遺構出土

2　銅製丸鞆裏金具

第２・６号住居址付近出土

第２節　　掘立柱建物遺構、ピット群、土坑、溝

(1)　掘立柱建物遺構

第１号掘立柱建物遺構（第73図）

本址は桁行西側及び梁行東側の柱列が不明確であるが、桁行東側、梁行北側でのピットの並び方から東西２間×南北３間の南北棟建物と思われる。長軸はＮ一10°一Ｗにとり、桁行の柱間は約２ｍ80cm、梁行の柱間は約２ｍを測る。梁行妻中央のピットより銅製巡方（第72図No.１）が出土している。

第２号掘立柱建物遺構（第73図）

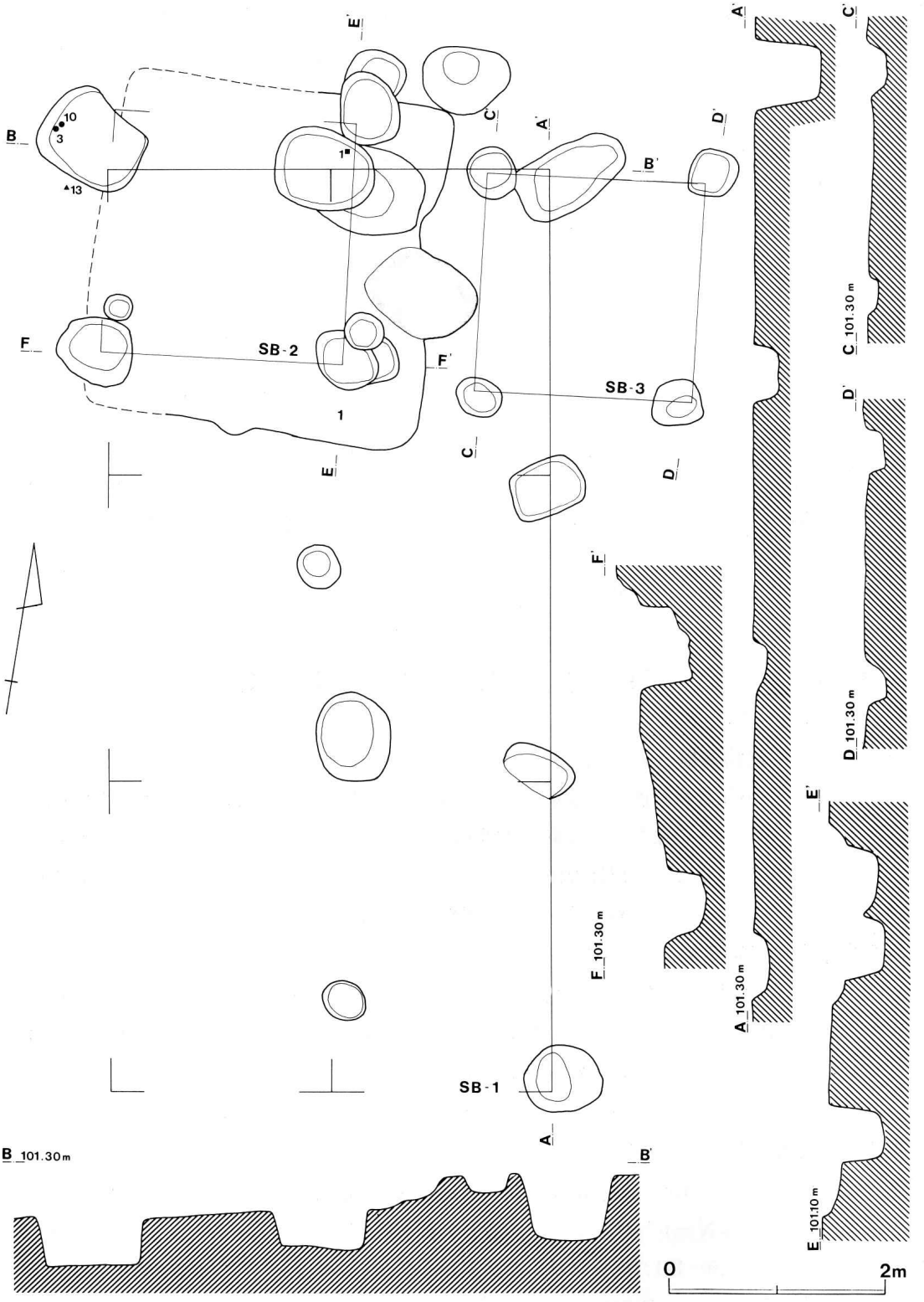
本址は東西１間×南北１間又は１間以上の規模を有する。柱間は約１ｍ10cmを測る。方位はＮ－７°－Ｗを示す。ＳＢ－１の１部と重複する。北西隅のピット内より土師器坏と須恵器蓋（第６図No.３，10）が出土している。又そのすぐ南より鉄製品（第６図No.13）が出土しており本址及び周辺諸遺構との関連が考えられる。

第３号掘立柱建物遺構（第73図）

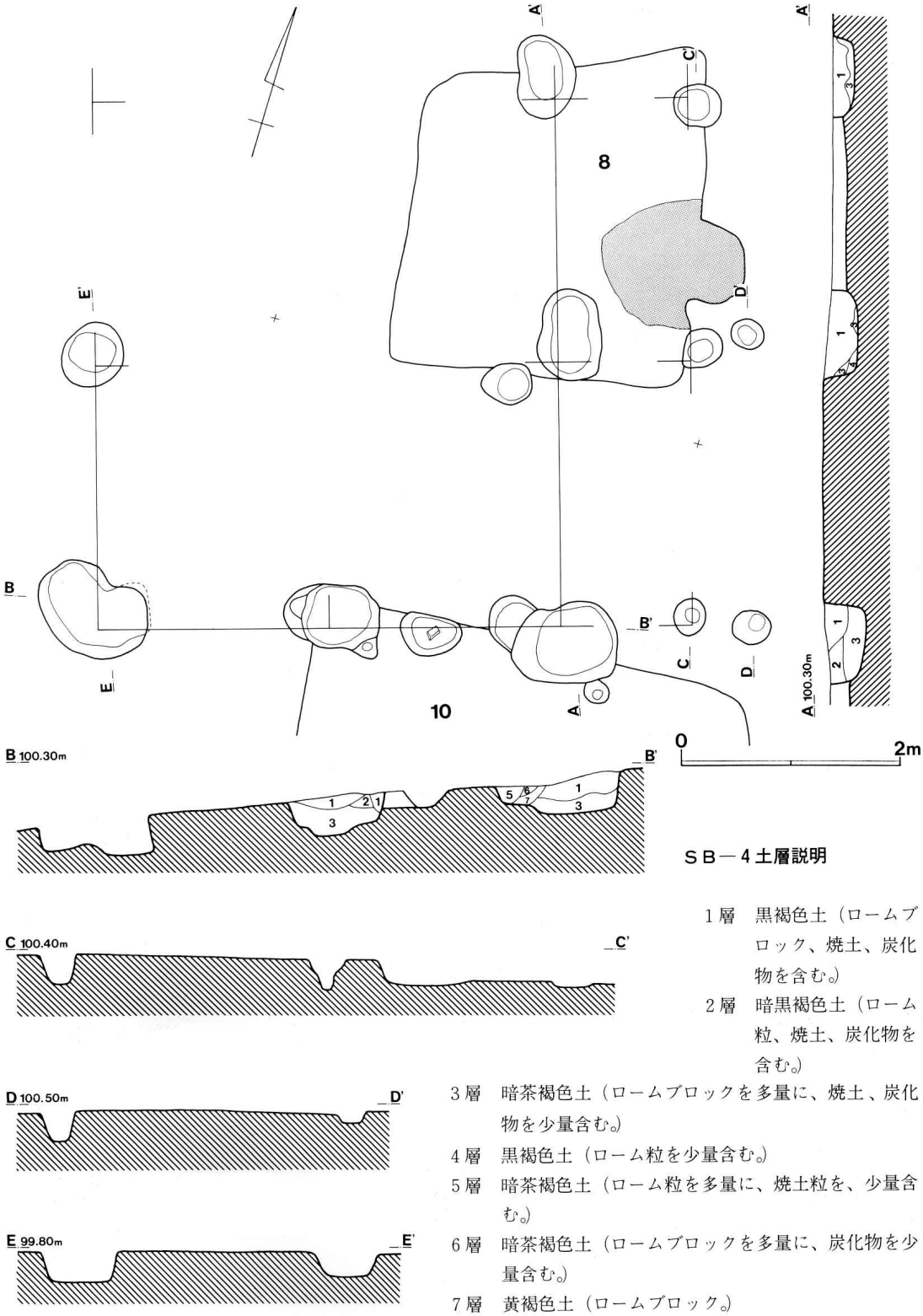
本址は東西１間×南北１間又は１間以上の規模を有する。柱間は約２ｍを測る。方位はＮ－６°－Ｗを示す。円形の小ピットで構成される。各ピットの下場の標高は101.0～101.1ｍを測り、ほぼ等しくなっている。

第４号掘立柱建物遺構（第74図）

本址は東西２間×南北２間又は２間以上の規模をもつ。桁行の柱間は約２ｍ40



第73図　第１．２．３号掘立柱建物遺構(ＳＢ－１．２．３)



SB－4土層説明

1層　黒褐色土（ロームブロック、焼土、炭化物を含む。）

2層　暗黒褐色土（ローム粒、焼土、炭化物を含む。）

3層　暗茶褐色土（ロームブロックを多量に、焼土、炭化物を少量含む。）

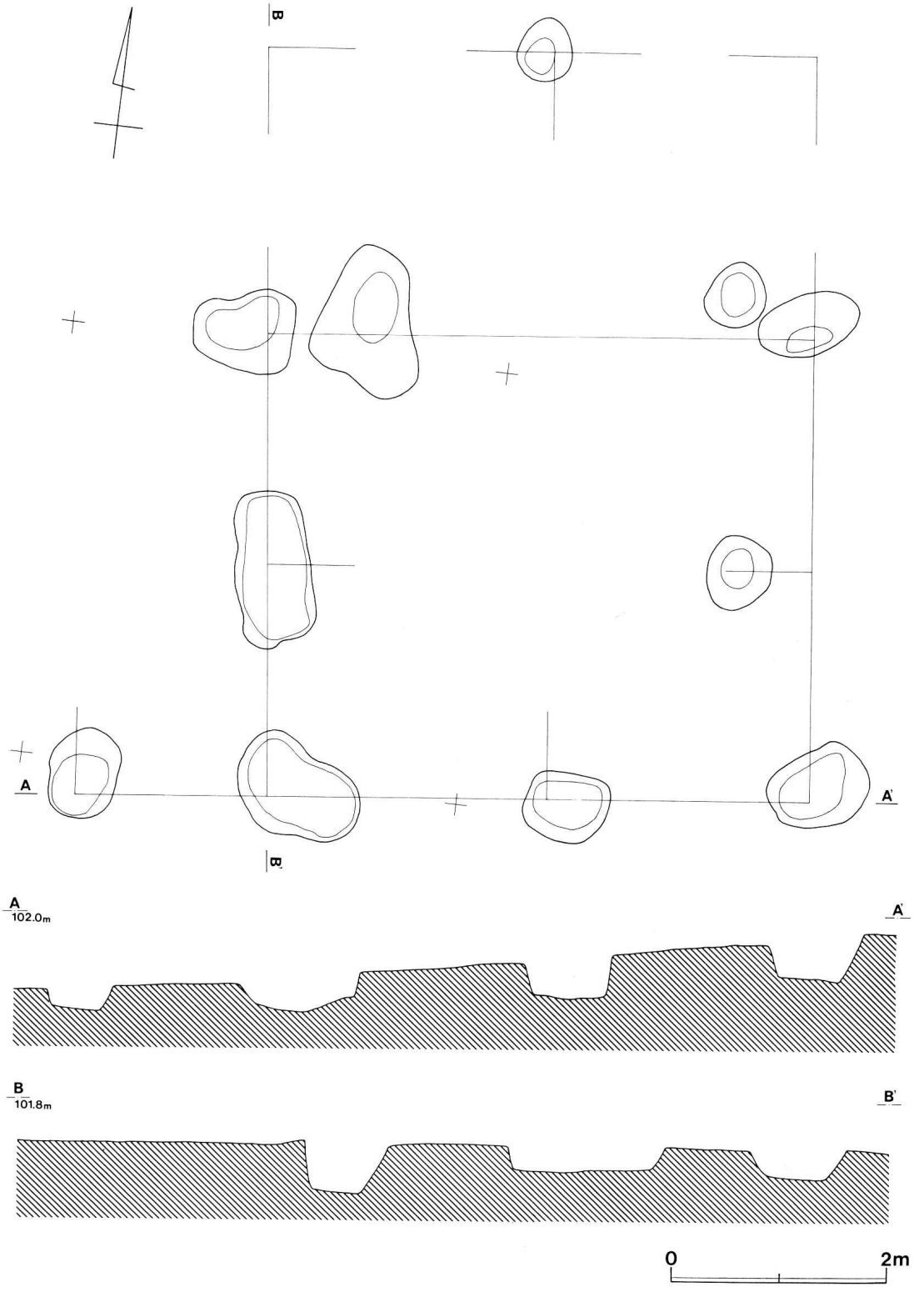
4層　黒褐色土（ローム粒を少量含む。）

5層　暗茶褐色土（ローム粒を多量に、焼土粒を、少量含む。）

6層　暗茶褐色土（ロームブロックを多量に、炭化物を少量含む。）

7層　黄褐色土（ロームブロック。）

第74図　第4号掘立柱建物遺構（SB－4）



第75図　第５号掘立柱建物遺構（ＳＢ－５）

cm、梁行の柱間は約２ｍ10cm、１ｍ20cmを測る。長軸はＮ―17°―Ｗを示す。梁行北側の柱列は不明確である。

第５号掘立柱建物遺構（第75図）

本址は南北２間×東西２間又は２間以上の規模を有する。桁行の柱間は約２ｍ12cm～２ｍ60cm、梁行の柱間は約２ｍ40cm～２ｍ60cmを測る。長軸はＮ―７°―Ｗを示す。梁行北側の柱列は不明確である。

(2) ピット群

ピット群―1（第76図）

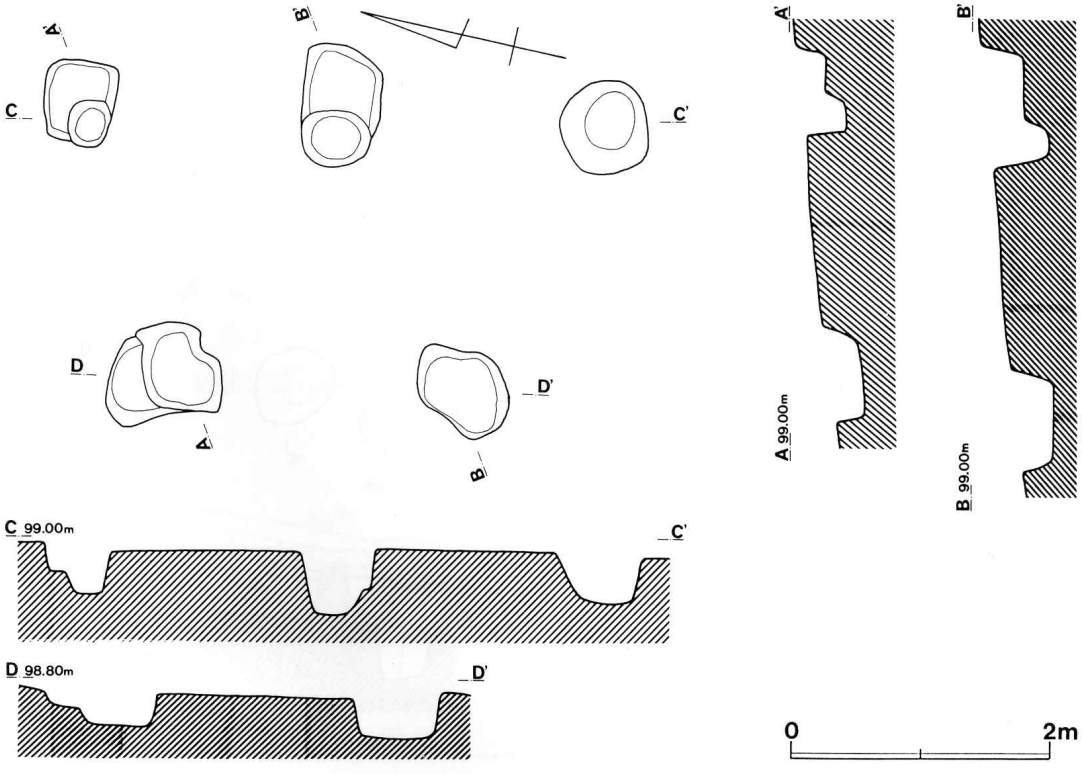
本群を構成するピットの位置関係は何らかの規則性の存在を示唆しているが、建物遺構として捉え得るまでに至らなかったものである。

ピット群―2（第77・78図）

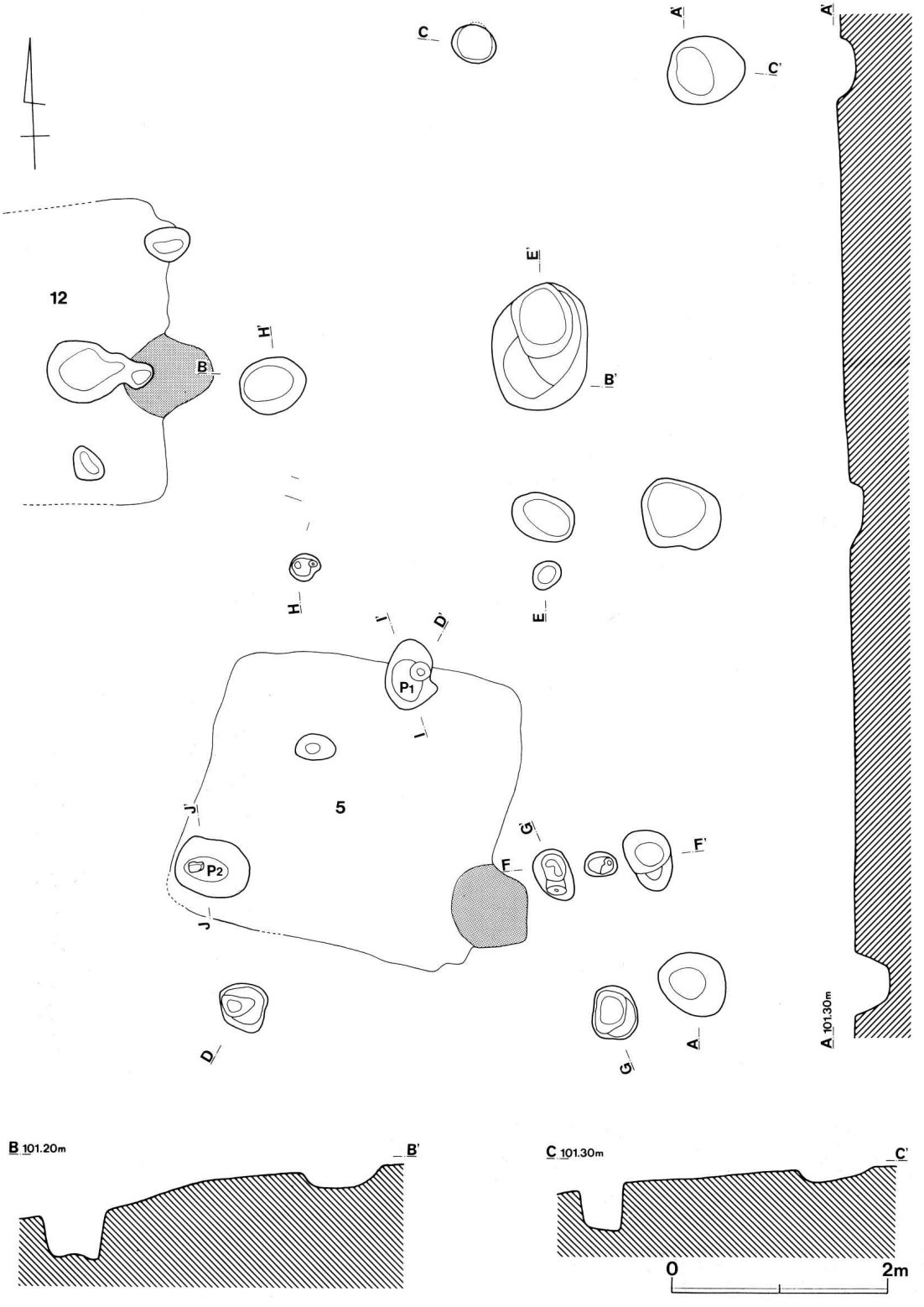
本群の西側には第５・12号住居址が存在する。住居址に伴なう柱穴が本群内に含まれているか否かは明らかでない。各ピットのプランには、ばらつきがみられる。

ピット群―3

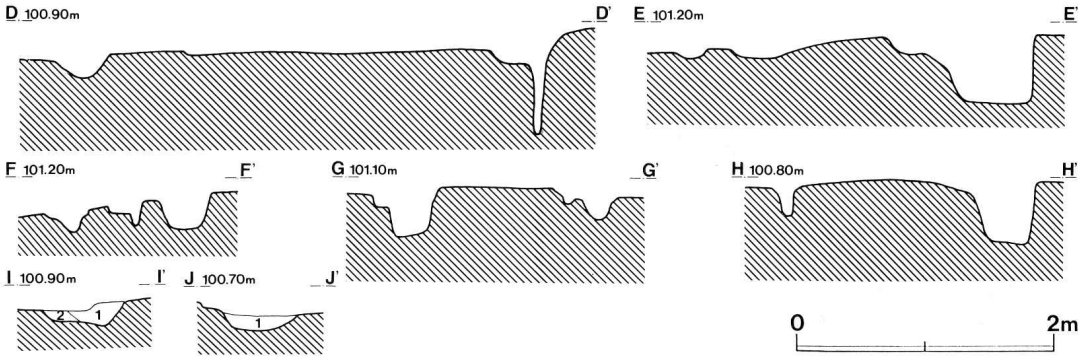
本群は第３ａ、ｂ号住居址周辺に存在するものである。複数の中・小ピットにより構成される。住居址に伴なうピットが含まれているかどうかは明らかでない。



第76図　ピット群―１


C
A'
C'
A
12
E'
H'
B
B'
H
E
I'
D'
P1
I
5
J'
G'
F'
P2
F
J
D
G
A
A 101.30m
B 101.20m
B'
C 101.30m
C'
0
2m

第77図　ピット群－2（1）



第78図　ピット群－２（２）

ピット群－２土層説明

Ｐ－１

１層　茶褐色土（ロームブロックを若干含み、火山灰を多量に含む。）

２層　茶褐色土（ロームブロックを若干含む。）

Ｐ－２

１層　茶褐色土（ロームブロックを若干含み、焼土ブロックをわずかに含む。）

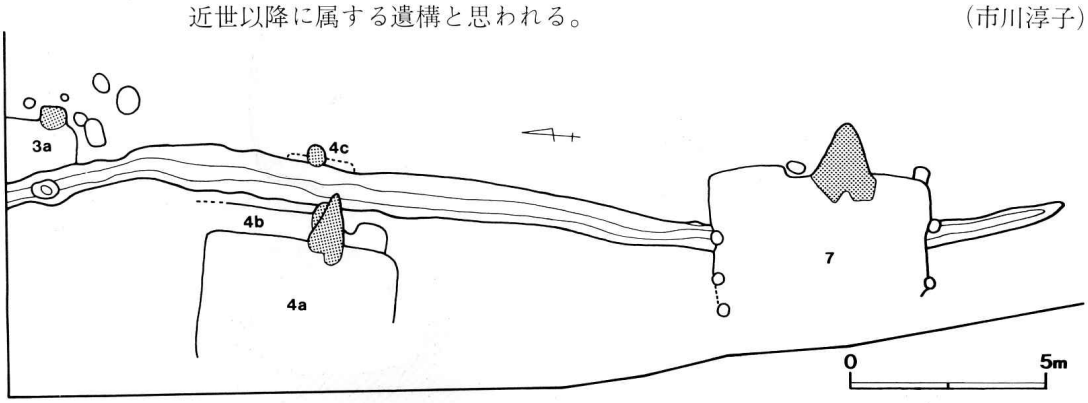
(3) 土　　坑（第80図・第４表）

第４表　第１～６号土坑計測表

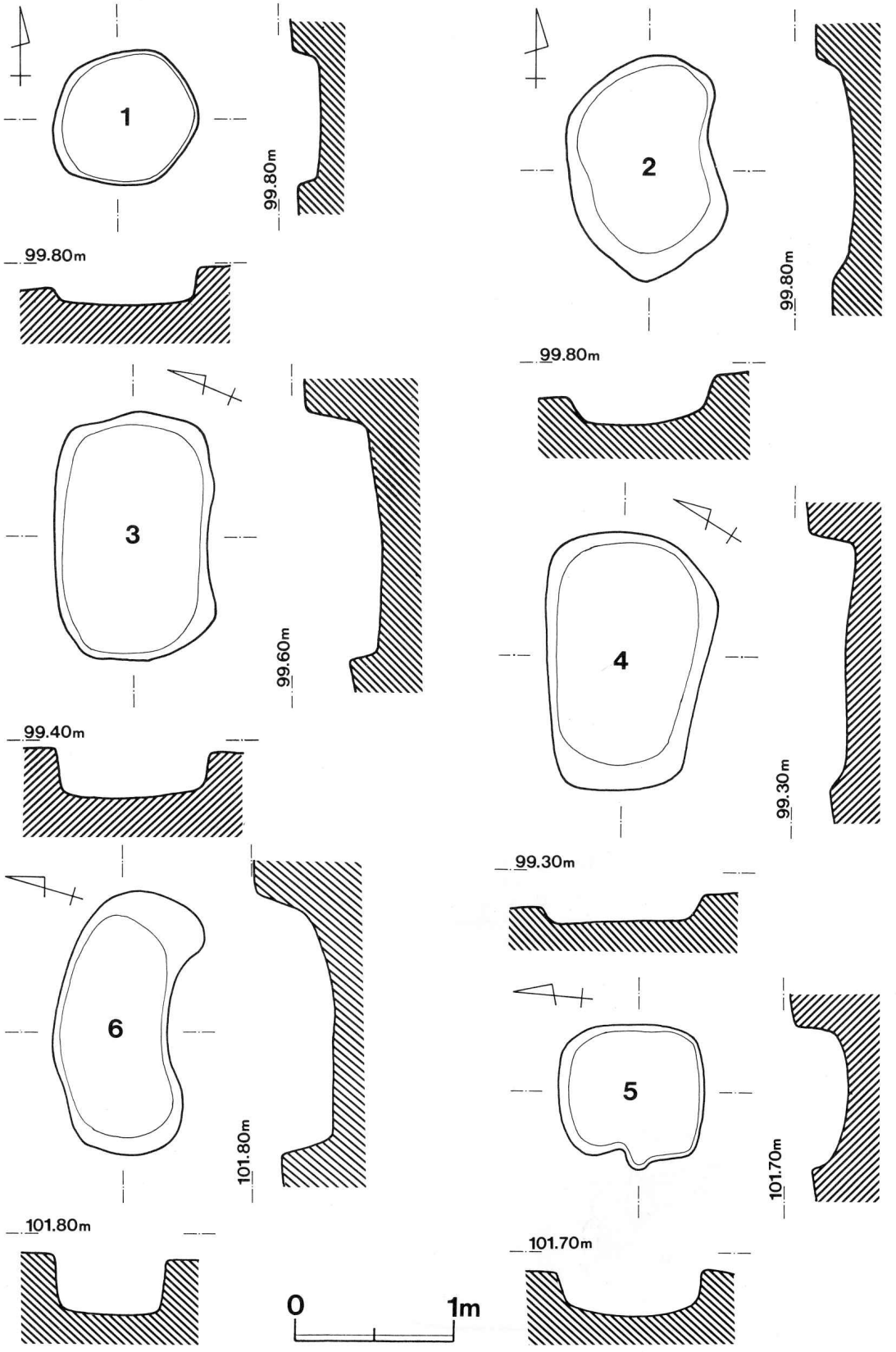
No.	規 模(cm)	深　さ(cm)	No.	規 模(cm)	深　さ(cm)
1	84×90	16	4	162×100	14
2	140×92	22	5	84×90	28
3	154×94	30	6	166×70	36

(4)　　溝（第79図）

第１号溝は覆土全体に浅間山系Ａ軽石を含み、部分的には純層も認められた。近世以降に属する遺構と思われる。　　（市川淳子）



第79図　第１号溝（ＳＤ－１）



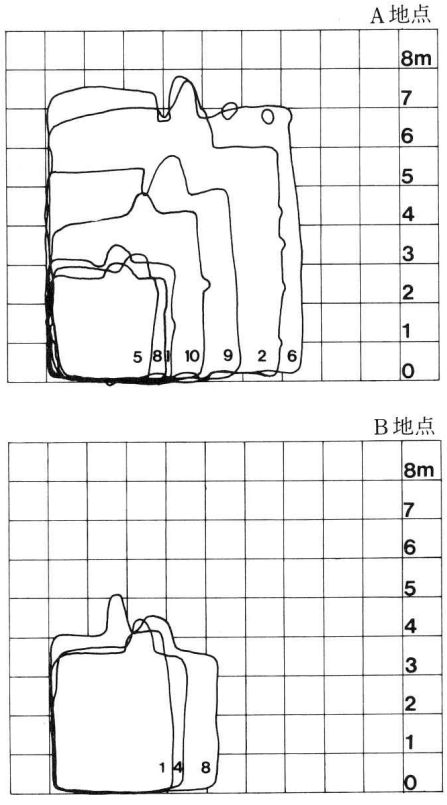
第80図　第１～６号土坑(ＳＫ－１～６)

第Ⅵ章　阿知越遺跡の提起する問題

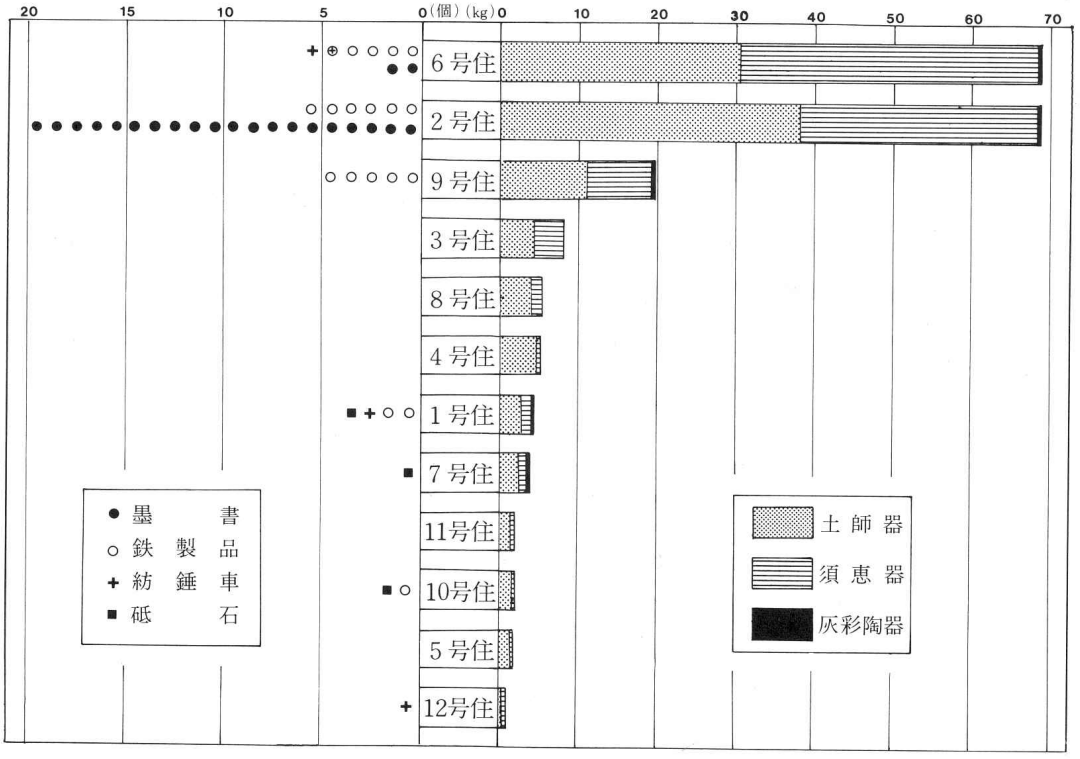
本遺跡から発見された竪穴住居址の規模を比較するために、平面形態の推定できる７軒の住居址を同一図上に表わしたものが第81図である。これによると本遺跡で検出された住居址の中でも第２号住居址と第６号住居址は他に傑出した規模をもち、更に阿知越遺跡Ｂ地点（第81図下）や御林下遺跡（駒宮、1977）等の近隣の住居群と比較した場合においてもその規模はめだった存在といえよう。

大型住居址

これらの住居址は、太い壁柱穴のめぐる第２号住居址や、一部に礎石を有する第６号住居址等やや特殊な構造をとるとともに、土器の出土量の点においても他に傑出していることが解る（第４表）。また、第２号住居址や第６号住居址では、須恵器大甕（大型広口壺）の存在や鉄製品の出土量においても他の住居址よりも多い傾向が認められ、墨書土器においてはこの二軒だけに存在するなど、単に住居の居住人員の多寡に還元できない差異を示している。更に注目すべきことは、火災を被ったと考えられる第６号住居址では、焼けただれて海綿状になった土器や多量の炭化米とともに三点の溶解した銅の小塊が出土している。これは本址周辺から出土した銅銙の丸鞆裏金具や、第１号建物址（ＳＢ－１）の柱穴埋土から出土した巡方とを考えあわせるとき、あるいは銙帯金具の溶解したものであることも考えられよう。ともあれ、これらの家屋に居住する人物は、下級官人層に連なる者であったことを示唆するものであろう。このようにこれらの住居址は、他の住居址と同一の竪穴住居という形式をもちながら、その規模や財物の蓄積の点において他に卓越しており、九世紀代には集落内にこのような階層が形成されていたことは注目すべきであろう。また、以上のような集落内における旧秩序の変化とともに、本庄市大久保山Ⅰ遺跡の報文（佐々木、1980）において問題が提起されているような共同用益地の用益権にも変化が起こったことが予測される。



第81図　阿知越遺跡住居平面比較図



第５表　住居址別遺物出土量比較表（1）

共同用益地の推定

ここでは、本遺跡周辺の共同用益地としての山野の区域を限定するために、まず該期の周辺地域の開発の状態を推定したい。本地域の開発の状態を知る手がかりのひとつに条里形地割りがあり（注１）、本遺跡北側に広がる女堀川の沖積地には大部分にその条里の痕跡をみてとることができる。また本遺跡を含めた女堀川沖積地に臨む丘陵斜面部には集落が占地しているのが一般的であることから、これらの区域が居住区域として利用されることが多かったことが推定される。この他に集落が営まれたと考えられる地点には女堀川の自然堤防上があり、生野山丘陵やそれ以南の小山川（身馴川）の氾濫原を中心とする広い区域には集落址は稀少である。特に生野山丘陵以南の区域は、表土上に小山川の氾濫によってもたらされた砂礫層の被覆する地点の多い開墾の難かしい区域であったと考えられ、共同の用益地としての荒地や森林が残されていたと推定される。注目すべきことは、この生野山丘陵とそれ以南の区域は、古墳時代後期には生野山古墳群や児玉下町・大久保古墳群が形成され、墓域として利用されていた地区を中心としていることである。延暦17年（798年）の太政官符によると「加功成林」は五町以下、墓地牧地には制限がなく占取が認められている。本遺跡周辺の古墳が、ここにいう墓地に相当するものかどうかは検討を要するが（注２）、少なくとも７世紀後半頃まで古墳が築造され、その後も墓前祭祀等を行なったと考えられるところから、該

区域には祖先を葬り祀った場としての宗教的意識が強く残存していたとみてさしつかえない。このような墓域としての古墳群の存在する区域は、半永久的に占取された場として氏族的に占有されながらも共同の用益地として設定されていた区域であり、公私未分化で所有主体が不明確な未開発の原野ではなかった（注3）。この墓地等の共同用益地である「伝統的に共同体が管理・維持してきた地については、国家権力は面積その他を問うことなく、そのまま共同体全体に占取を認める」（丸山、1967）ものであるといわれている。これが事実とすれば、これらの区域は古墳群形成主体である共同体による排他的な用益権が認められることを意味している。

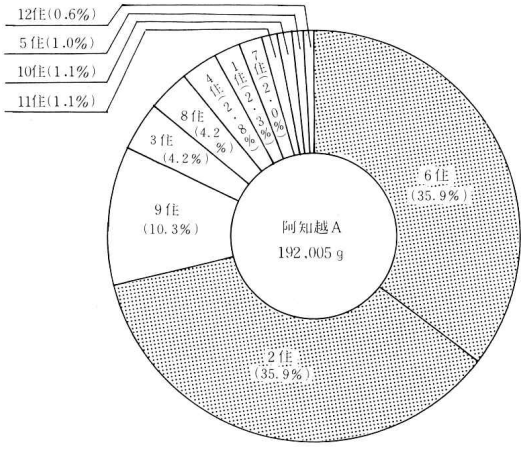
共同体による占取

戸田芳実は、山野に関わる在地住民の意識を拘束した観念として、少なくとも九世紀代には「住民の祖先神・守護神と目された地主神の所有である」という観念の存在をあげながら、山野をこのような地主神の所有とすることについて、山野に対する「村落の本来的・潜在的な共同体的所有を宗教的に転倒して表現するものに外ならない」(戸田、1961）としている。本地域における古墳群を中心とした区域は、このような古墳群に祀られるべき祖先神等の宗教的観念をとおして、古墳形成主体としての共同体的な占取が意識されていたことは想像にかたくない。以上のことから生野山丘陵やそれ以南の小山川氾濫原を中心とする区域は、そこに所在する古墳群の形成主体としての共同体の用益地として占取されていたことが推定されよう。

共同用益地内の開発

しかし、生野山と児玉下町古墳群に挟まれた区域にも九世紀末～十世紀代には、湧水点を中心とした集落（第２図―ｇ）が形成され始め、また小山川と大久保古墳群に挟まれた間隙にも集落（第２図―ｈ）が形成されることは、前述の共同用益地としての場にも、ある種の開発と、分割占取が始まったことを示唆している。このように、本遺跡での財物を蓄積した大形住居址の出現する九世紀代の末には、少しづつではあるが旧秩序の崩壊が始まり、中世的武士団形成の前提が準備されていたのである。

以上、ここに本遺跡から導かれる幾つかの問題を提起したが、これらを含めた本書の欠は、『阿知越遺跡Ⅱ』の報文中で補ないたいと考えている。(鈴木徳雄)



第６表　住居址別遺物出土量比較表(2)

注1．条里形地割りをただちに古代に遡るものとすることはできない。しかし、児玉町深町遺跡（鈴木、西口、1981）や、児玉町共和地区の試掘等では、条里の痕跡の認められる地点に浅間山系B軽石含有層下層の水田耕作土が検出されている。ここでは条里の痕跡のある区域の大半はおおむねこの時期に水田化されていたと考えておきたい。

注2．岡野慶隆は、喪葬令の分析をとおしてここにいう墓地を三位以上または、五位以上の官人を出しえる氏族である「別祖氏宗」に限定すべきであるとしている（岡野、1978）。

注3．石母田正は、未開墾の「山林原野については、所有の主体が公でもなく私でもなく、未分化で不明確である」（石母田、1971）ことを指摘している。

引用・参考文献

石母田正（1971）『日本の古代国家』岩波書店

井上尚明・高橋好信（1983）「児玉町、本庄市古井戸・将監塚遺跡の調査」『第16回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会他。

岡野慶隆（1978）「奈良時代における氏墓の成立と実態」『古代研究』16

金子章他（1980）『長沖古墳群』児玉町教育委員会

駒宮史朗（1977）『御林下遺跡』埼玉県教育委員会

佐々木幹雄（1980）『大久保山Ⅰ』早稲田大学本庄校地文化財調査室

菅谷浩之・駒宮史朗（1973）「児玉町・美里村生野山古墳群発掘調査概要」『第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会他

鈴木徳雄・西口正純（1981）『深町・城の内遺跡』深町遺跡調査会

大護八郎（1956）『古墳調査報告書第一編』埼玉県教育委員会

高橋一夫他（1982）『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県県史編さん室

田口一郎他（1975）「児玉郡及び周辺地域における前方後円墳の研究」『いぶき』8・9合併号

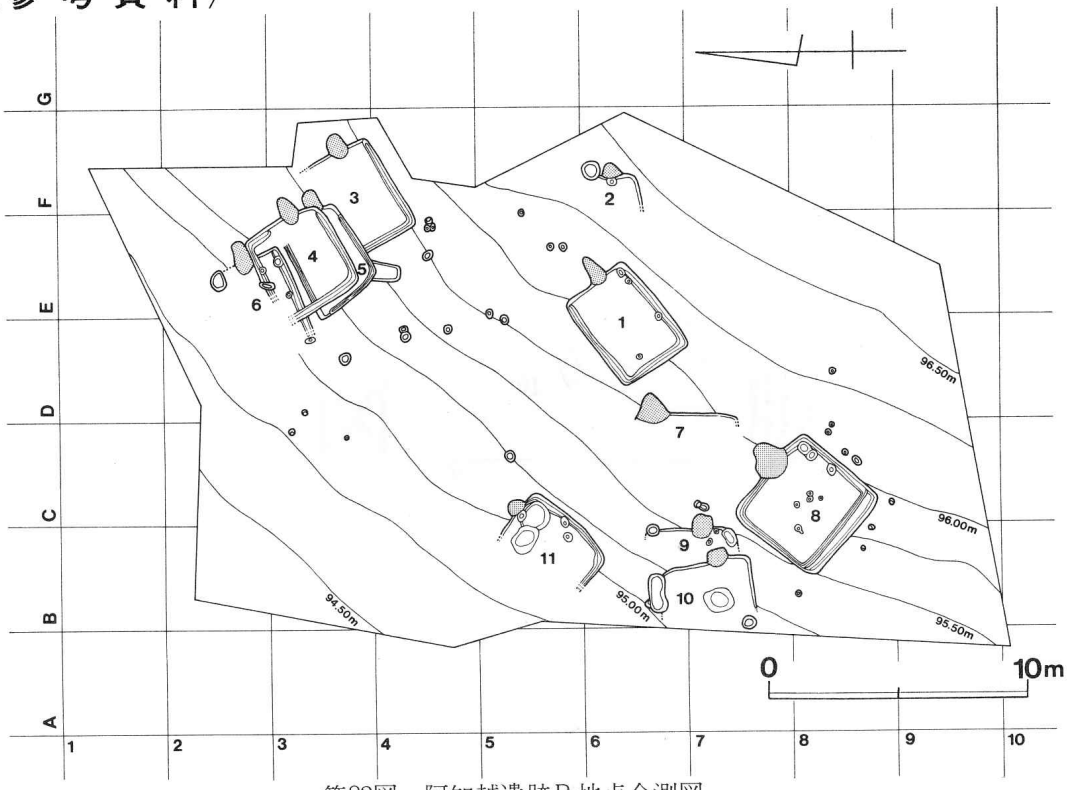
戸田芳実（1961）「山野の貴族的領有と中世初期の村落」『ヒストリア』29

丸山幸彦（1967）「九世紀における大土地所有の展開―特に山林原野をめぐって―」『史林』50―4

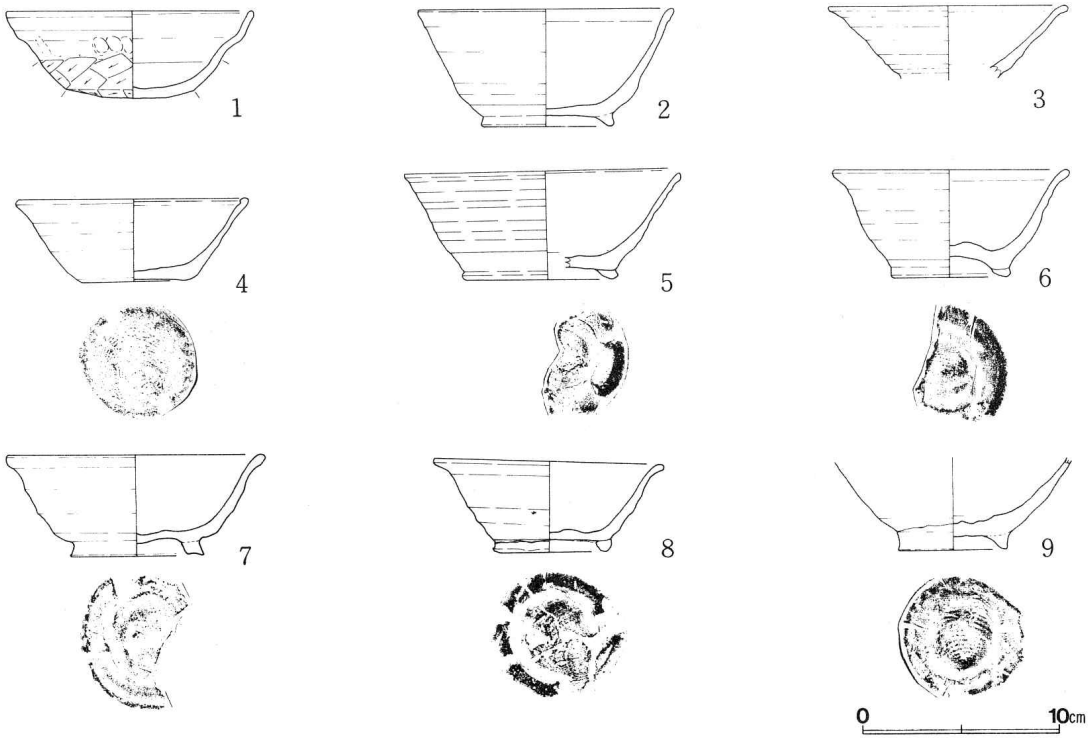
柳　進　（1961）『児玉町八幡山埴輪焼場窯跡発掘報告書』埼玉県立児玉高等学校

柳田敏司（1964）「埼玉県児玉郡生野山将軍塚古墳発掘概報」『上代文化』34

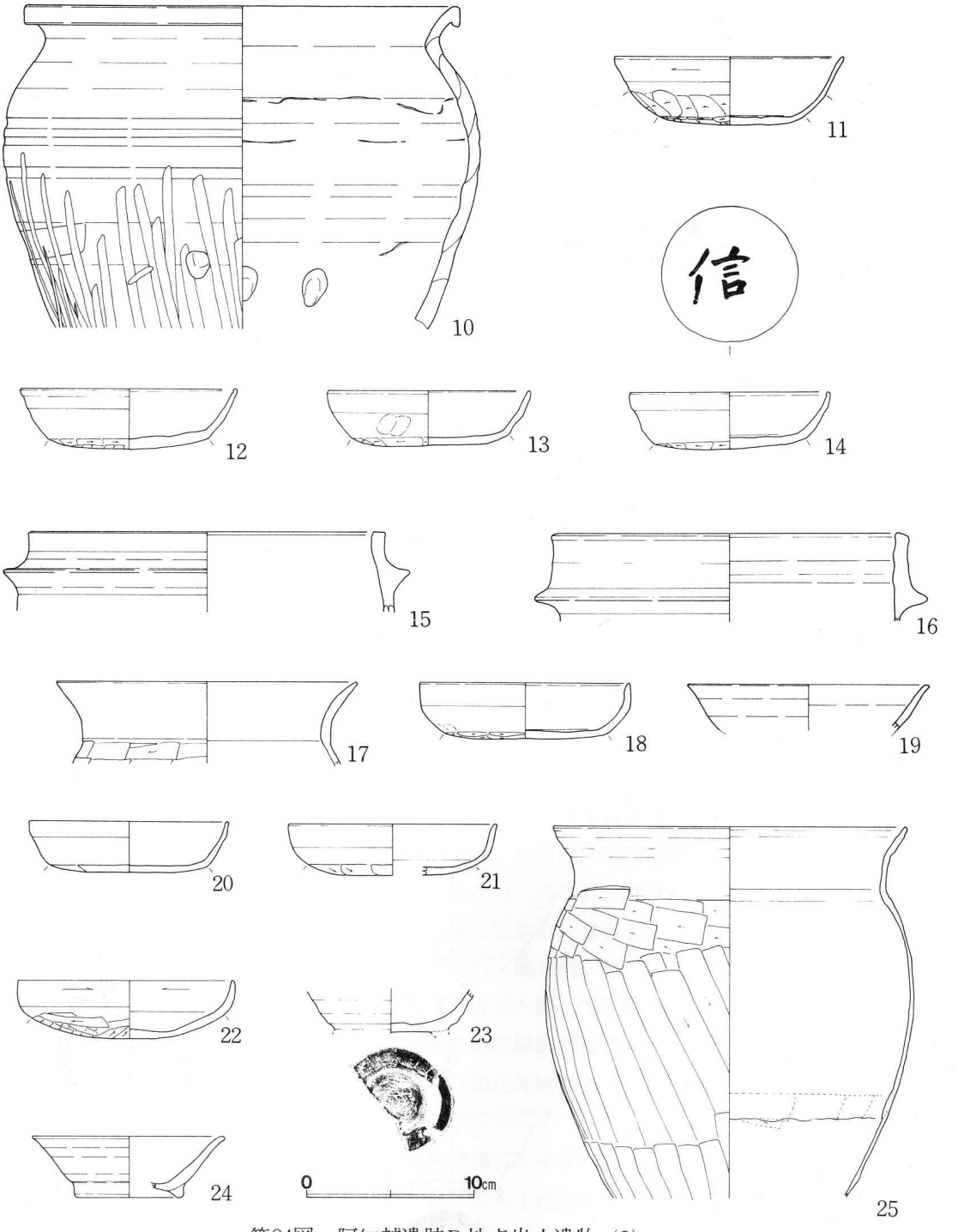
〈参考資料〉



第82図　阿知越遺跡B地点全測図



第83図　阿知越遺跡B地点出土遺物（1）



第84図　阿知越遺跡B地点出土遺物（2）

（10号住１～９，１号住10～14，２号住付近15，７号住16，５号住17・18，６号住19～21，８号住22，９号住23，４～６号住付近24，４号住25）

図　　版

1．阿知越遺跡A地点全景（南西より）

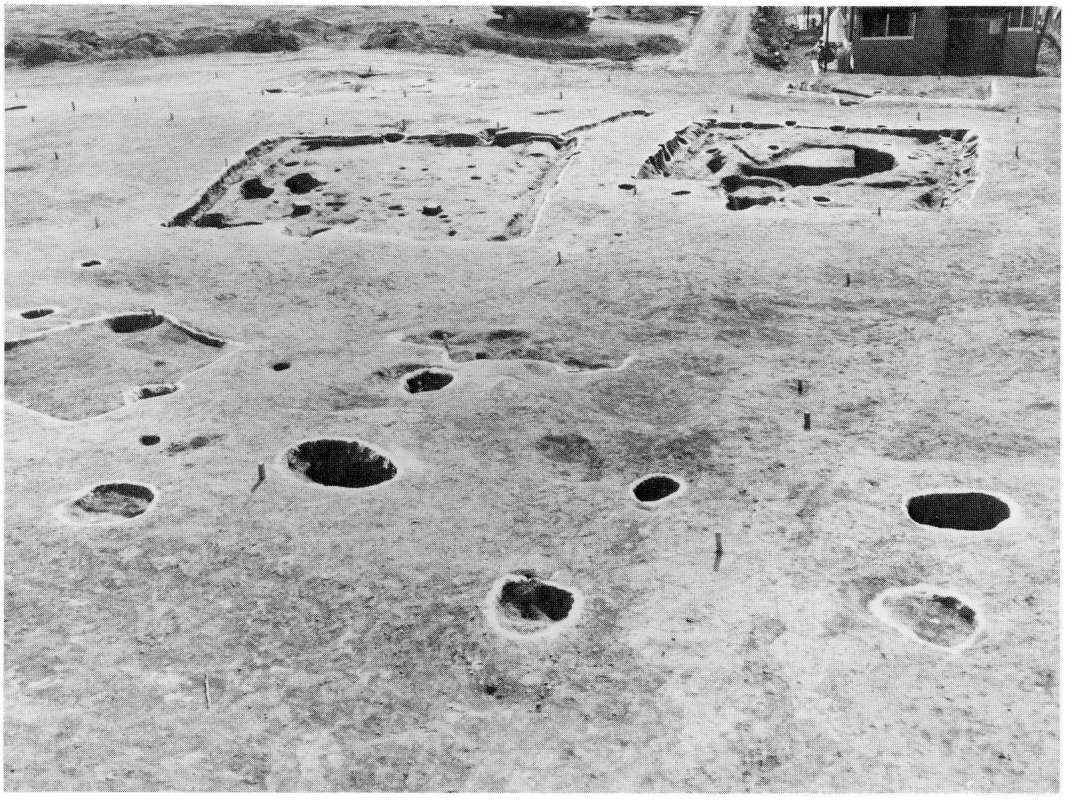
図版 2

1．阿知越遺跡A地点遠景（西より）

2．調査区中央部（北西より）

図版 3

1．調査区西半部（南東より）



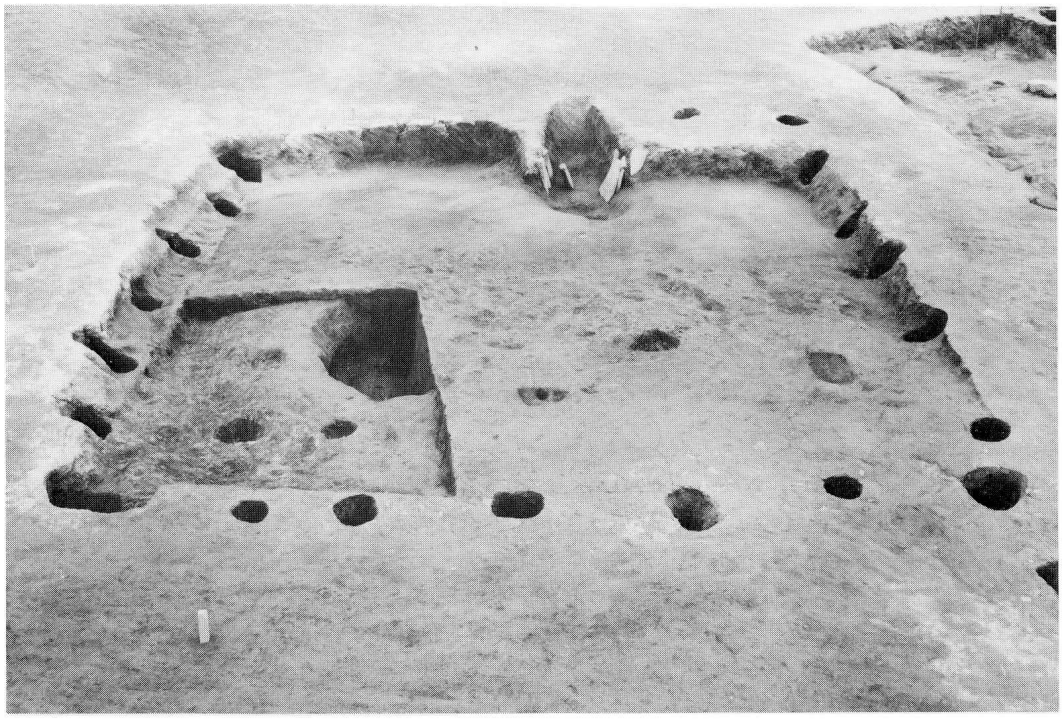
2．第2．6号住居址（東より）

図版 4

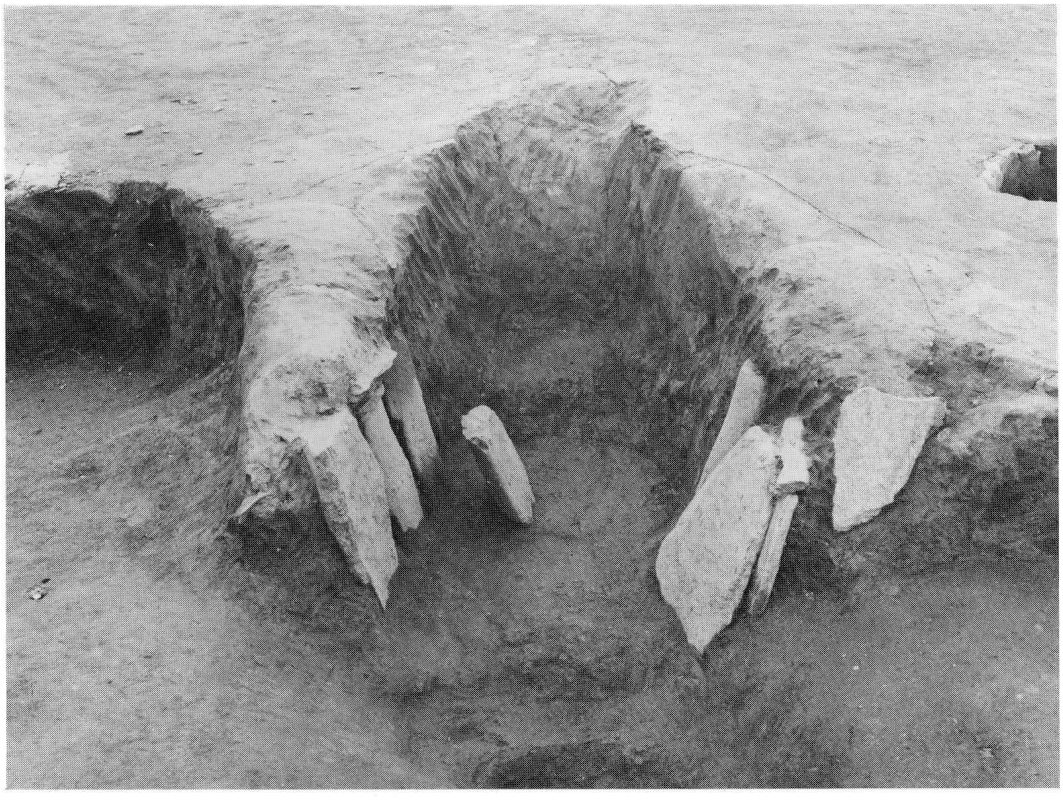
1．第１号住居址

2．第１号住居址カマド

図版 5

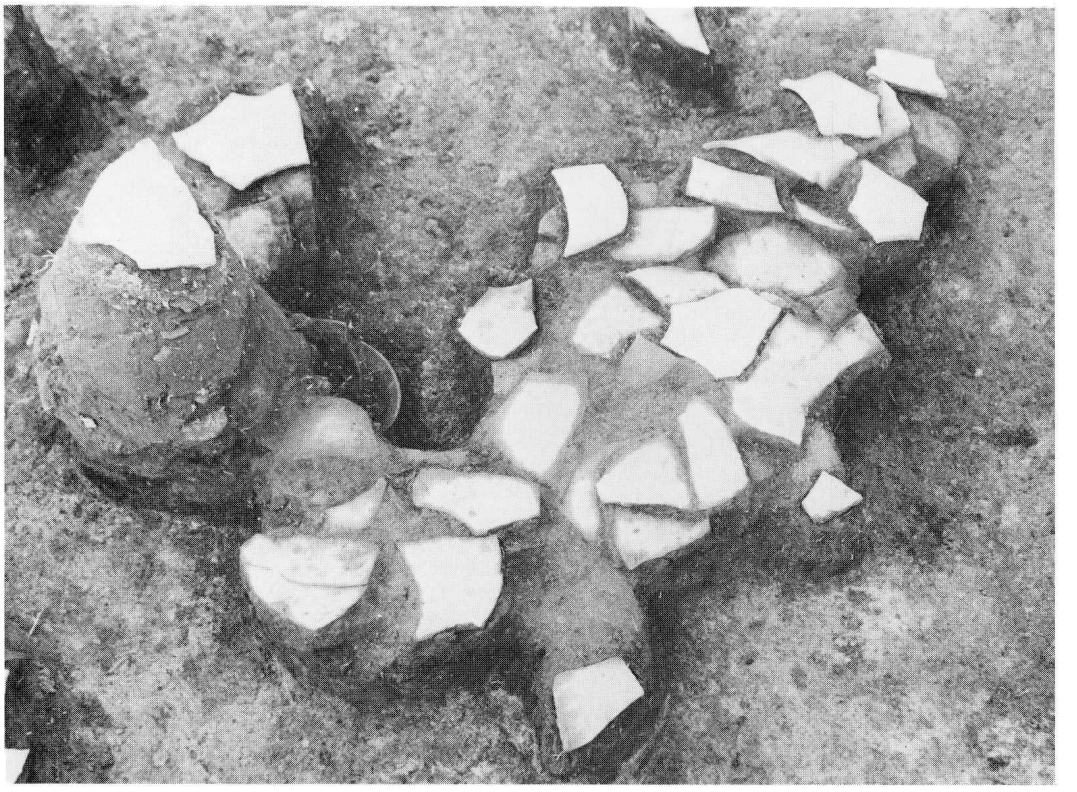


1．第２号住居址



2．第２号住居址カマド

図版 6

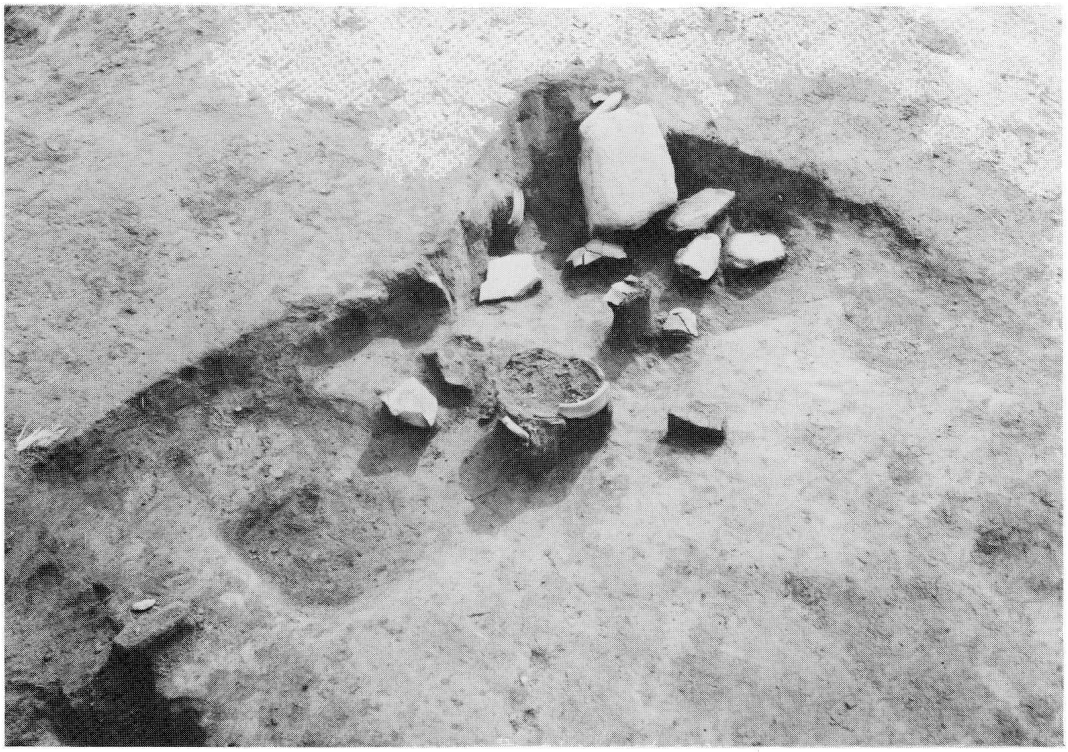


1．第 2 号住居址遺物出土状態（1）

2．第 2 号住居址遺物出土状態（2）

図版 7

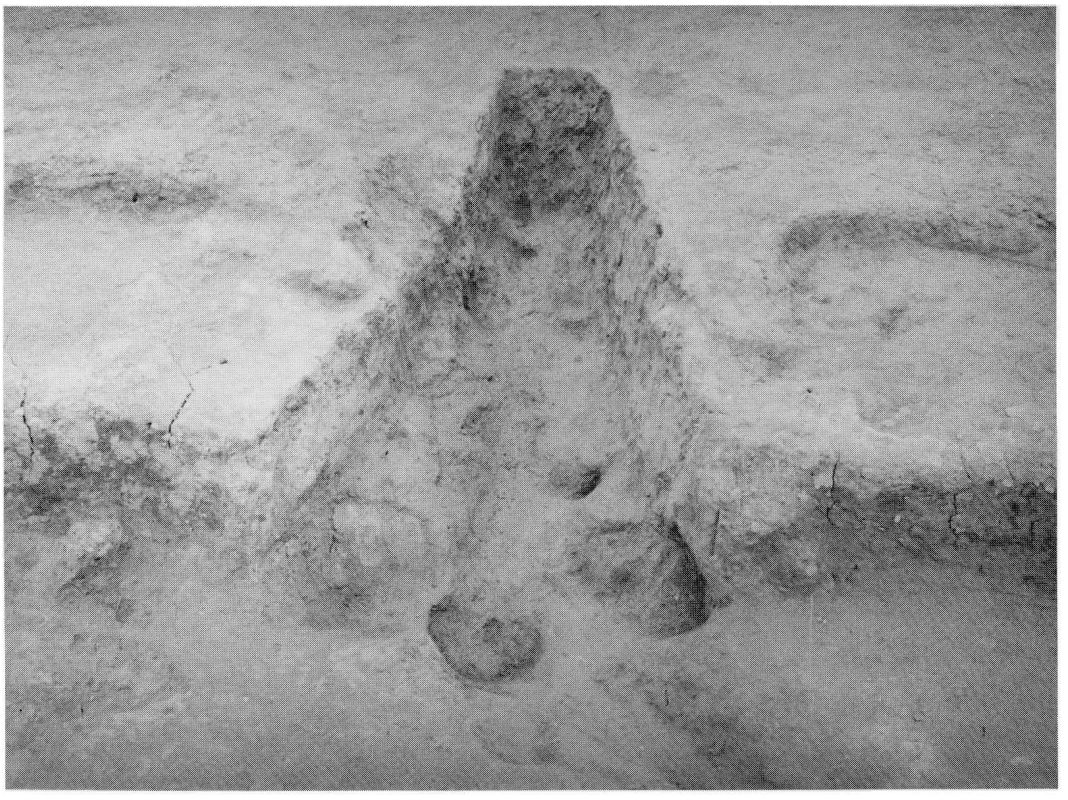
1．第３ａ号住居址



2．第３ｂ号住居址

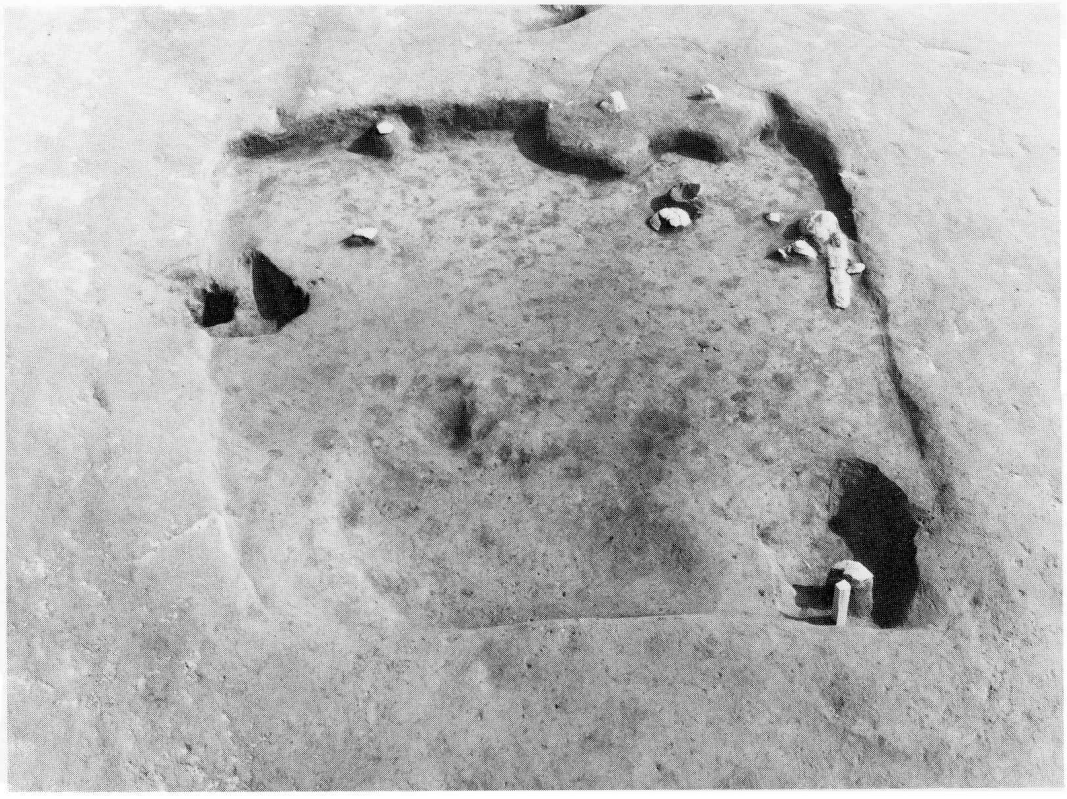
図版 8

1．第４a、b号住居址



2．第４a号住居址カマド

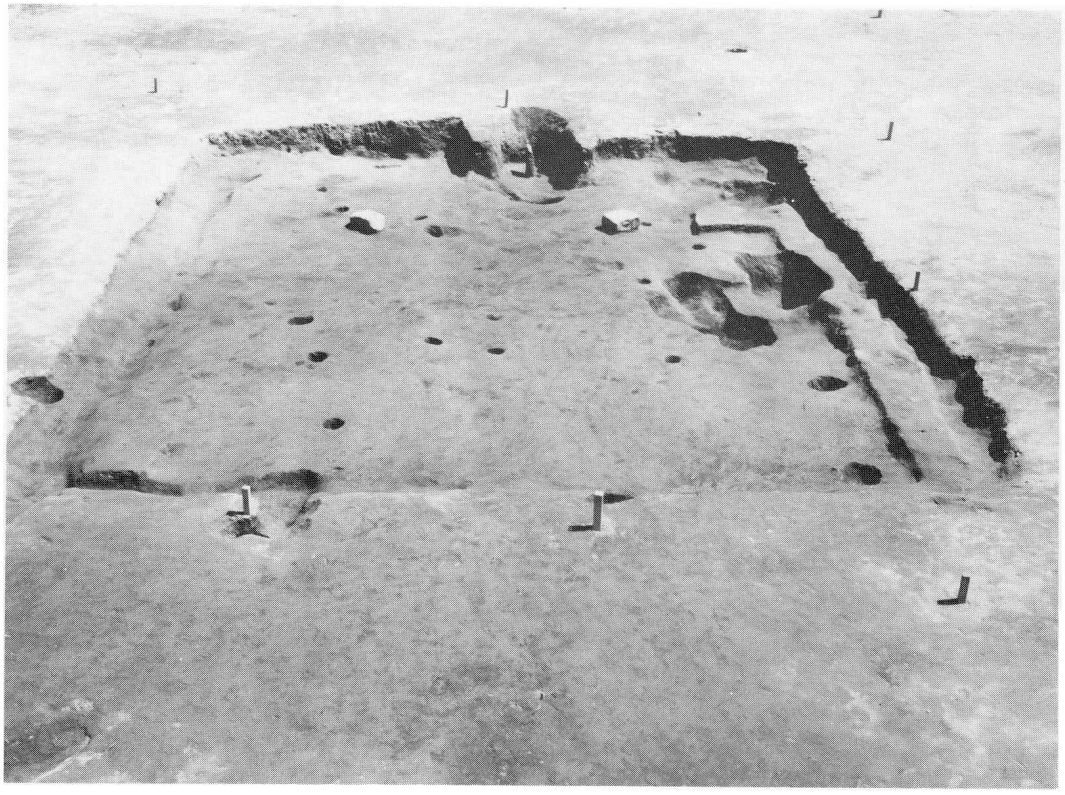
図版 9



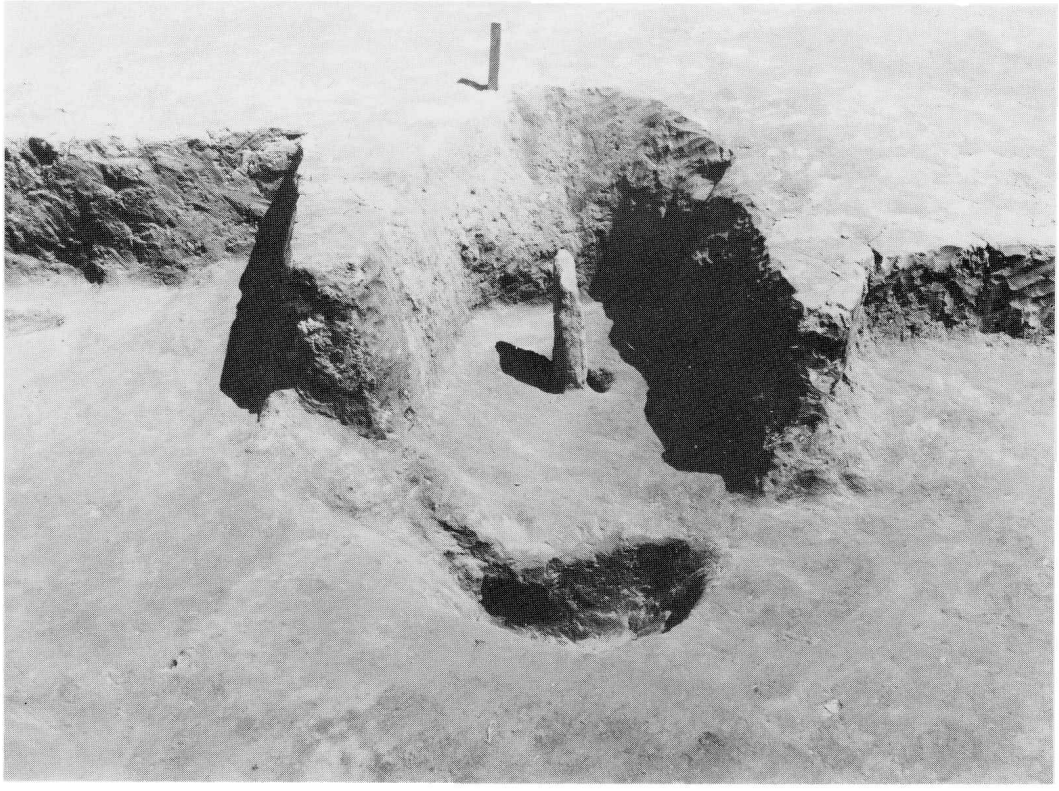
1．第５号住居址

2．第５号住居址カマド

図版10



1．第6号住居址



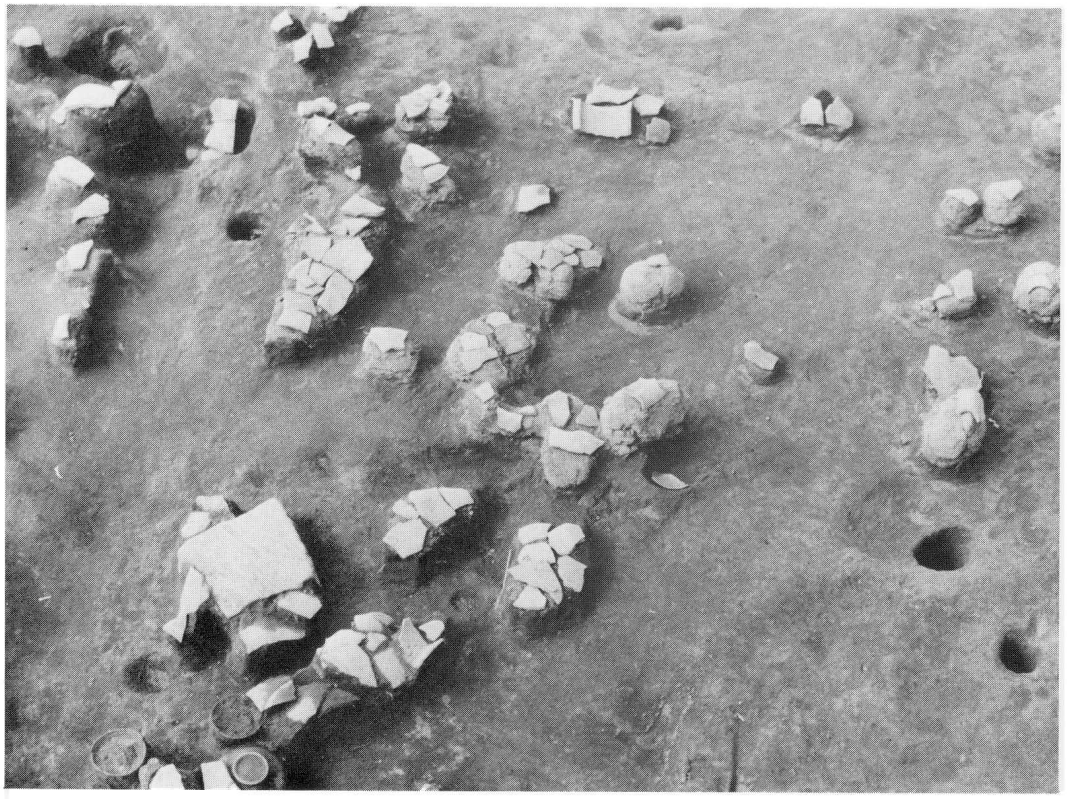
2．第6号住居址カマド

図版11

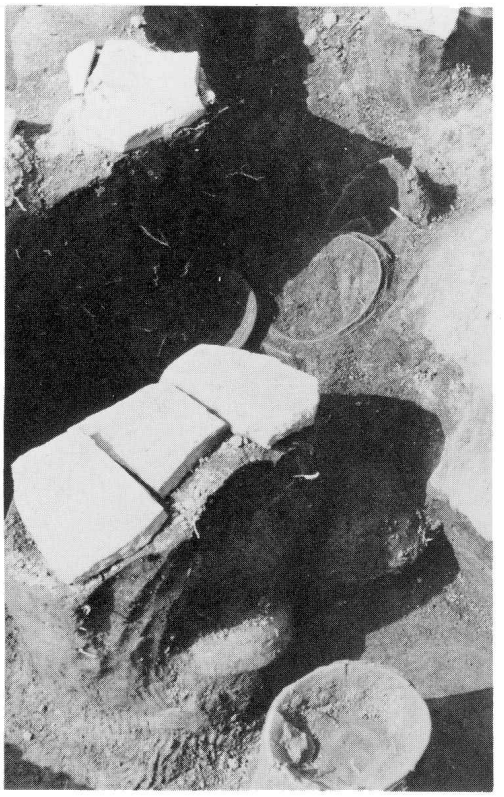
1．第６号住居址カマド南側遺物集中地区(1)

2．第６号住居址カマド南側遺物集中地区(2)

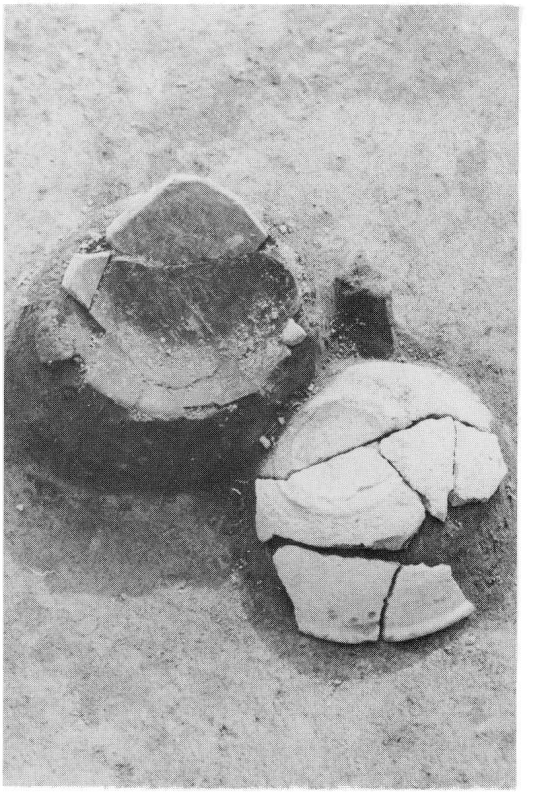
図版12



1．第６号住居址遺物出土状態（1）



2．第６号住居址遺物出土状態（2）



3．第６号住居址遺物出土状態（3）

図版13

1．第７号住居址

2．第７号住居址カマド

図版14

1．第８号住居址

2．第８号住居址カマド

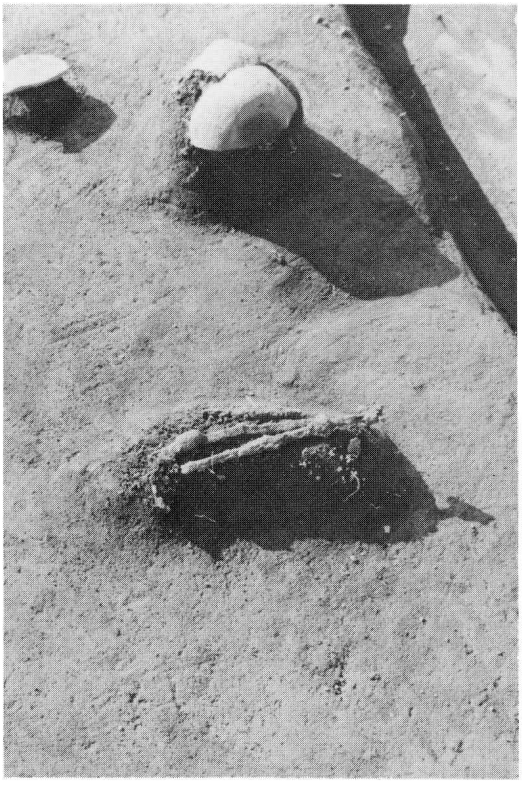
図版15

1．第9号住居址

2．第9号住居址カマド

図版16

1．第９号住居址遺物出土状態

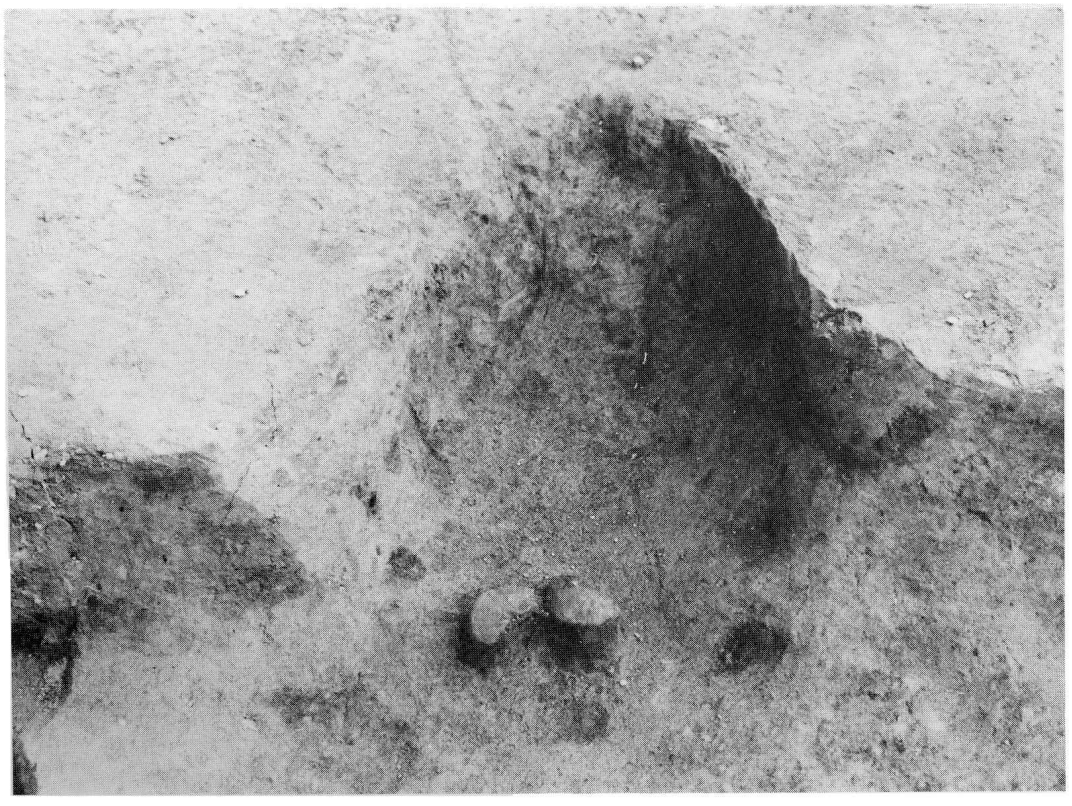


2．第９号住居址鉄製品出土状態（1）

3．第９号住居址鉄製品出土状態（2）

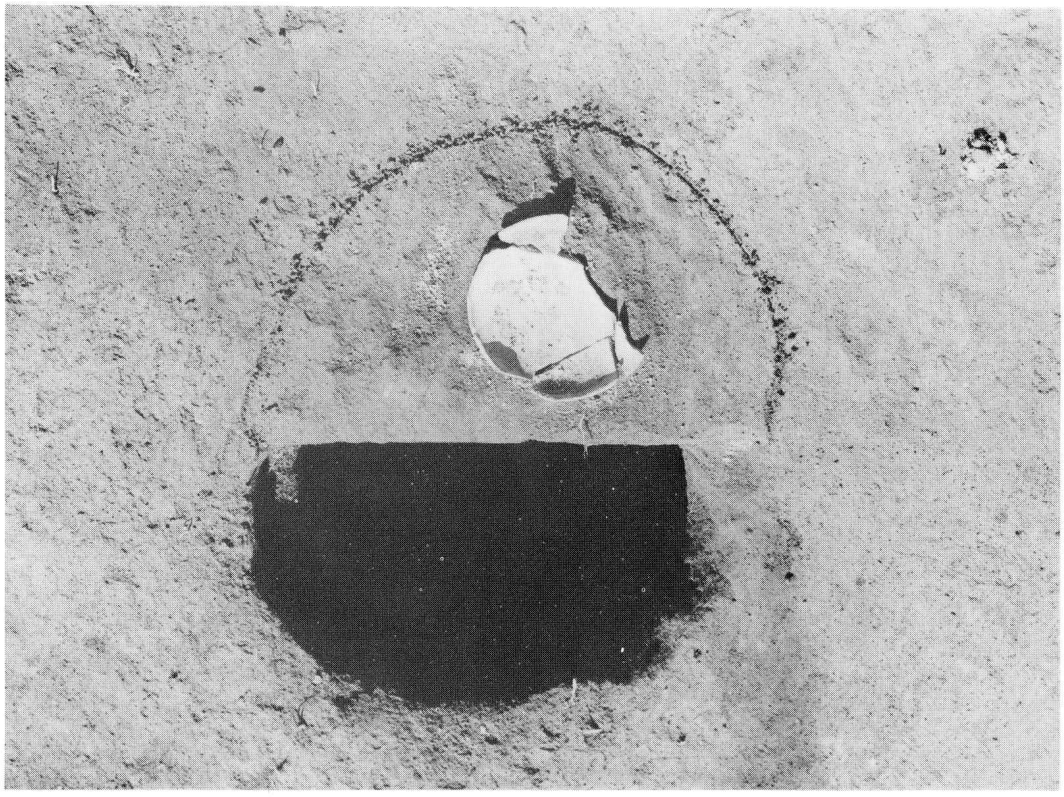
図版17

1．第10号住居址

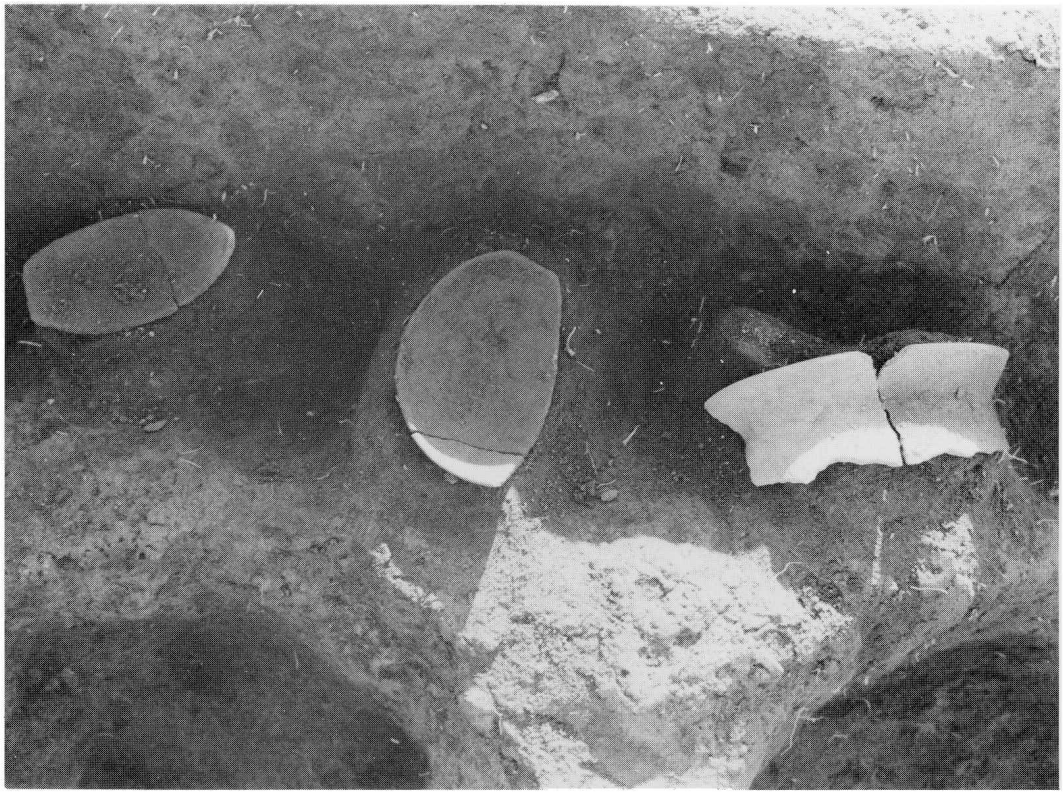


2．第10号住居址カマド

図版18



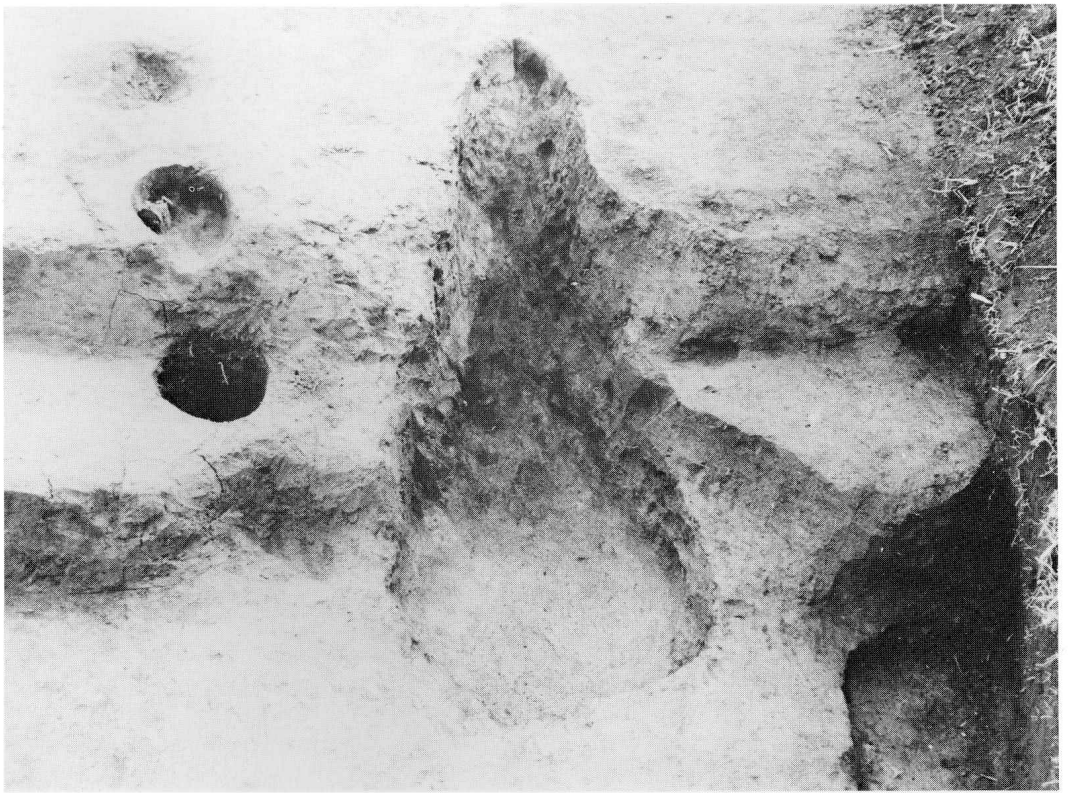
1．第10号住居址遺物出土状態（1）



2．第10号住居址遺物出土状態（2）

図版19

1．第11a．b．c号住居址



2．第11a号住居址カマド

図版20

1．第12号住居址

2．第12号住居址カマド

児玉町文化財調査報告書第３集
阿　知　越　遺　跡　Ⅰ
児玉遺跡群埋蔵文化財保存事業に伴う調査報告書

昭和58年３月20日印刷
昭和58年３月31日発行

発行者　児玉町教育委員会
埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368

印刷所　たつみ印刷株式会社
埼玉県深谷市東大沼356